

そら飛べワンチャンダイブマン ～ 1日1回個性ガチャ～

AFO

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『——そんなヒーローに就きてんなら効率いい方法があるぜ。』

来世は個性が宿ると信じて……屋上からのワンチャンダイブ!!』

幼馴染みの心ない言葉を少年が真に受けた世界線。

緑谷出久はオールマイトに出会うことなく。

よって爆豪勝己は敵に襲われることなく。

そして無個性だったはずの彼に個性が発現する。

その名も『ワン・チャン・ダイブ』。

これは彼の無念と未練、執念が生み出した、決して受け継がれることのないナチュラルリボンヒーローの物語である。

目次

N o.	1	緑谷出久：アナザー	1
N o.	2	はりさける体操服	12
N o.	3	服着よう？	23
N o.	4	猛れ『頑張れ!!』って感じのクソナード	37
N o.	5	いいぞガンバレ非常口！	52
N o.	6	ゲームオーバー	61
N o.	7	正義（オールマイト）	71
N o.	8	どういうことよ お茶子さん	84
N o.	9	策柵作	92
N o.	10	親哀れ	103
N o.	11	いざ決勝	118
N o.	12	だめだやめとけ非常口	134

## No. 1 緑谷出久：アナザー

人は、生まれながらにして平等じゃない。  
そんなことわかっていた。

わかりきっていた。痛感したからこそ、目を逸らしていた。

『個性がないから』

それは夢を叶える努力をしない言い訳で。そして夢を見ることは現実から目を背ける口実で。

画面の中の、ヒーローの背中に憧れ続けたのはどのつまり宗教のそれではなく、結局は大きな何かを心の支えにしたかったからに過ぎない。

形だけ、見せかけだけのハリボテの努力はノート十三冊分。

希望だけ、志望しただけの高校受験は馬鹿にされ、自らの無力を痛感した。

『——そんなヒーローに就きてんなら効率いい方法があるぜ。』

来世は個性が宿ると信じて……屋上からのワンチャンダイブ!!』

幼馴染の言葉が蘇る。

緑谷出久は『無個性』だ。そしてヒーローがヒーローたる条件は『個性』を持つていること。

少年は、ヒーローにはなれない。

——本来の世界線ならば、彼はこれから下校途中に敵に襲われ、そしてオールマイトと出会うはずだった。

しかしこの日、少しの心境の変化が物語を変える。

いつもと違う帰り道。自然と足が向かったのは、高層ビルの屋上。

見下ろす街の風景はどこか他人事。色あせた1枚の絵のように、どうでもよく無味乾燥。

まるで世界から色がなくなってしまったかのようだ。

それもそう、今からこの世界に別れを告げようというのだ。

夢も見れないこんな世界から解き放たれ、来世はそう、もっと素晴らしい世界に変わっていることを願って。

しかしそれ自体が現実逃避でしかなく、希望も何もないことだつというのは薄々わかっていた。人生は一度きり。それを全て捨て去ってしまった方が楽な場合もある。

逃げてしまった方が楽なのだ。

虚ろな目のまま、彼は空中に身を投じた。

眼下に広がるは裏路地。せめて世間に迷惑をかけないようにと目立たない場所を選んでしまうあたり、彼は最期まで日陰者であった。

重力に逆らうことなく、来世を信じて身投げ。

地面との距離が縮まっていくその最中、不意に我に返る。

(――いやだ)

その瞬間、世界に色が戻る。

(いやだ、死にたくない……！)

突如として沸き上がる恐怖、後悔、絶望。自分の行動の取り返しのつかなさ、愚かさ。

虚構のように実行した行いが、現実として去来する。

しかしどんなに想おうとも、自由落下という不自由に囚われた彼の身体は止まらない。

(いやだ、いやだ、まだ死にたくない。僕はまだヒーローになる夢を、諦めたくない！)

恐怖に目を瞑る。地面に身体が触れたその瞬間、意識は闇に飲まれた。

緑谷出久が最後に抱いたのは、後悔。恐怖よりも、絶望よりも勝つたのは後悔。

――ヒーローになりたい。

今際の際、彼の無念の想いが全身を支配した。

そして彼の内、奥底に眠っていた僅かな個性因子を――呼び覚ます。

瞑った目を、開く。

視界に映ったのは、人気の少ない路地裏のものだった。

「い、生きてる……っ！」

目を見開いた。死ぬはずの自分が生きていること、そして、そんな自分が、宙に浮いていたこと。

「と、飛んでる?! いや、う、浮いてるんだ!!」

緑谷出久は、それが個性であると直感した。辺りを少し滑空すると、興奮に身を振るわせた。

「おいおいおい、僕に！ 個性が！」

自然と持ち上がる口角。彼は念願の個性を手に入れたのだ。

「なんだこれ、『飛行』!? いや、『テレキネシス』!? 『重力操作』!?」

思うままに、候補となる個性を上げる。個性の本質を捉えるのは簡単ではない。いくつもの経験を経てようやく、その個性がどんなものなのかがわかるのだ。

一口に浮くと言えど、浮力を操作するのか、重力を操作するのか、物体の位置を操作するのか、風を操作しているのか、はたまた、見えないう手で持ち上げているのか、と無数の可能性もある。

本人が自覚していないものもあるのだ。

この個性がなにを秘めているのか夢を膨らませながら、高鳴る心臓を抑えて彼は家路に着いた。

だから、このときの緑谷出久は自覚していなかった。

この個性は決して飛行能力なんかではなく。

夢と憧れにしがみついた、未練が生み出したこの個性の名は――

――『ワン・チャン・ダイブ』。

\*

家に帰るなり、個性が発現したことを親に報告した。

泣いて喜んだ。彼自身、そして個性がないことで悩んでいたことを知っていた母も。

翌日は病院に検査に行こうと約束した。

翌朝——彼は、飛べなくなっていた。

その日は抜け殻のようであった。

個性発現はなにかの間違いで、夢でも見ていたみたいに、何事もなくなっていた。

しかし夢ではなく、母も彼が浮いていたことを覚えていた。

夢ではない。

けれども、現状飛べないのだから、状況は変わらない。

ぬか喜びさせられた分だけ、落胆は跳ね返ってくる。

輪ゴムを両手で引っ張って、わーすごい僕もこんなに延ばせるようになったよ、と喜んだ直後に片手を離して手を痛める。そんな感覚。

虚しい。ただひたすらに虚しい。

無個性の事実が突如現実として去来した。

だから、緑谷出久はしぼんだ風船のごとく落胆していた。

空気を入れた風船だからこそ、しぼんでしまったあと虚しくなるように。

あるいは、風船を両手で引っ張って、わーすごい僕もこんなに延ばせるようになったよ、と喜んだ直後に片手を離して手を痛める。そんな感覚。

あまりにもひどいその様を見た周囲は、昨日無個性だと馬鹿にしたのが原因だと思い込みクラス全員でごめんなさいをした。

爆豪本人でさえも責任の欠片を感じ、

『チッ、なんで俺が……。オイデクウ！……その……。悪かったよ

……。でもなあ!? だからってこの俺に——おい、テメエ聞いてんのか!? この俺が！ 謝ってやってんだから！ ああああああ！』

それさえも上の空になるくらい、彼はタバコの吸い殻同然の佇まいであった。

死んだ目が虚空を見つめ、朝からずっと微動だにしなかった。

教科書さえ出さないのだが、あまりにも凄惨な佇まいを教師も口出しできず。

その日の授業が終わった瞬間に立ち上がり、家へと身体が向かい始める。帰り際、教師が休んだ方がいいと声を掛けてきたのにも気づかない

いまま、学校を後にする。

そして帰宅中。ろくに足下も見ない彼は階段を踏み外す。頭から落ち、緑谷出久の意識は暗転した。

「あれ、僕は……」

気づくと、周囲に人が集まっていた。

どうしたんだろう。抜け殻同然の状態から我に返った緑谷出久は、不思議に思いながら起きあがる。

「き、君、大丈夫なのか!?!」

見知らぬ青年が慌てて駆け寄る。

「あ、はい。あの……何かあったんでしようか?」

「なんだ……! 階段の下で倒れてるもんだから、てっきり落ちたのかと。ま、まあ大丈夫ならいいんだ。あ、救急車いらさないみたいです。お騒がせしました……君、記憶にないだけかもしれないから、何か異常を感じたら病院にいくんだぞ!」

いい人だった。そういえば、気を失う前の記憶が曖昧だった。

(僕はただ普通に帰ってて……じゃあやっぱり、転んだのか?)

順当に考えて、その可能性が高かった。

帰路に戻って少しした頃、ふと彼は思い出す。昨日の宙に浮いていた一件。今はもうできないぬか喜びの個性を。

現実として去来する。

倒れたことで有耶無耶になっていた精神状態が、昼間のものに戻っていく。

情けなくてやるせなくて、無力を痛感しながら、家路を歩み始めた

矢先――

――彼の身体が、自転車のごとくその場を駆け抜けた。

「……ん?」

彼自身、何かがおかしいと首を傾げる。

その挙動を見ていた道行く人が囁く。

「なんだあの子、一瞬で5メートル歩いたぞ!?!」「競歩の個性か?! あんな速度で歩けばそりゃ転ぶに決まってる」「カサカサカサカサカ



サーってゴキブリみたいな！」

「……」

言われてまた、歩き出す。一瞬で、景色が変わる。

それは、個性のそれだった。

昨日の興奮が、蘇る。

それから、個性を発動しないように意識しながら家に帰った。

その歩行速度は自動車と変わらず、人にぶつかれば跳ね殺すことになるだろう。

駐車場で試してみるに、その個性は『競歩』。歩いているとき限定で、ものすごい速度で進める。

走るより歩いた方が速いという冗談のような個性だ。

たったそれだけが、その足の動きはもはや人の身体の駆動ではなく、エンジンや馬力で表すものに近い。

ただ『競歩』と侮らず、その馬力、足の駆動を別の用途に使えば応用ができるだろう。

無個性の彼はどんな個性にも希望を見いだせた。

そして翌日——彼の歩行速度は元に戻った。

\*

「ふむう……日替わりの個性か……そんなの聞いたことないのお」

医者と言った。

「しかし、元々個性がどうして発現するのもかも解明されておらんからの、緑谷出久くん、君はこれまでにない特殊な個性かもしれないぞ」

そうして、暫定的に下された個性は『日替わり個性』。

日替わり定食ならぬ、日替わり個性。

日替わりと言いつつ、その日はまだ何も超常的なことはできずにいた。そもそもどんな個性が発現しているのかもわからない中、今日の個性を断定するのは難しかった。無意識の今、もうすでに発動しているのかもしれない。

こんな、微妙なものだが、ともかく個性を確信できた緑谷出久の顔は晴れやかだった。

そして時が過ぎ――

――彼は、緑谷出久は国立雄英高等学校の実技試験会場にいた！

異常なまでの行動力！

彼曰く、気づいたら身体が動いていた！

緑谷出久。今日の個性は不明。個性の発動条件は不明。個性の発現条件の不明。

よくもまあ、こんな個性で雄英を受けようと思ったものだ。

あれからやったことと言えば、筋トレのみ。個性があるという事実が彼の希望、動力源となり、付け焼き刃以下であるが多少の底上げを實現した。

「でけデク!!」

背後から怒鳴るのは幼馴染みの爆豪勝己。

「かつちゃん!!」

「俺の前に……ちつ、消えやがれ」

「へ?」

そう吐き捨てて爆豪勝己は彼の横をすり抜けた。

罵詈雑言浴びせられると思っていた彼は情けなく構えていたのだが、拍子抜けである。

こんなことが度々あった。実のところ爆豪勝己はいつかの抜け殻状態を危惧し、彼を避けるようになっていたのである。

(ビビっちゃうのコレもう癖だ……)

緑谷出久には、そのことを知る由もない。

震える足のまま踏み出すと、見事に足をもつれさせる。

――これだよ!

自虐的に心の中で呟く。そのまま勢いよく頭から地面へ――

――ぶつから、なかった。

身体が浮いていた。

(やった、今日は個性が発動してくれた!　もしかして僕の個性は転

ぶことで発現するのか!?)

なんて、思うものの。

「大丈夫？ 私の『個性』。ごめんね勝手に。でも転んじやったら演技悪いもんね」

朗らかに笑う少女がいた。どうやら彼女が個性で身体を浮かせたようだった。

「緊張するよねえ」

「……」

口が動かなかった。同年代の異性を前にした緊張、というのもあるのだが、自分の個性じゃないとわかった途端に気分が沈んでいく。

念のためジャンプしたり、手を振って羽ばたこうとしたものの、彼は飛行の一切ができなかつた。

——そしてそのまま、試験は始まった。

(どうしよう!? このままじゃ……)

試験は仮想的の機械を破壊した数をポイント制で競い合うというもの。

しかし、現状では無個性そのものである彼に仮想的を倒す手段はない。

(いや諦めちやだめだ。何か方法はあるはず。仮想敵の材質は鉄だ、殴る、無理。蹴る、無理。爆発させる、無理。溶かす、無理。落とす穴に落とす、そんな時間ない。火を吹く、父さん……。ビーム、出ない。オールライトになる、できたら苦労してない)

不味い。どんどん敵が減っていく。

他の受験者が次々に仮想敵を破壊していく。周囲を見渡せど、彼のように慌てふためくものなど一人もいなかった。

どころか、仮想敵が見当たらなかった。

「どうやら、この一帯の仮想敵は終わったみたいだな……!」

眼鏡を掛けたガタイのいい少年が呟いた。

「どうしたんだ君、傍目に何もしていないようだが……危ないから避難した方がいいぞ。妨害目的なら帰りたまえ」

避難を進められた。

そして彼はものすごい速度で走り去っていった。

一度、緑谷出久も似たような移動をただけ悔しいものがあつた。

(くっそ……僕だって、やりたくて立ち尽くしてるわけじゃ……!)

何かしなければ、そんな思いに突き動かされ、緑谷出久は手近な建物に登った。

先ほど、この一帯は終わったと言っていた。なら、次に狙う場所を決めてから動くのは合理性に欠ける選択じゃないはずだ。

しかし彼、素の身体能力は、ちよつと運動始めたクソナード。全く持って猛る要素はない。

よつて、ビルに登るのにも一苦勞である。

結果として不合理。多少の思考あれど身体がなければ空論である。

——時間をかけて階段を登った彼が見たのは、そのビルよりも大きな仮想敵の姿だつた。

ポイント加点0、おおよそ破壊不可能のお邪魔ギミック。アトランティスの謎におけるこうもりである。

迫り来る圧倒的脅威。見下ろせば他の受験者は逃げていく。

そしてビルの屋上にいる暫定無個性の緑谷出久に逃げ道はない!

(マズイマズイマズイまだ0ポイントどころか逃げ場すらない!!)

慌てふためく中——ふと視界に入ったのは、仮想敵の前に横たわる人影。

人相がわかる距離ではなかったが、その髪の色は見覚えがあつた。

今朝、転びそうになつた彼を案じた少女だつた。

その瞬間——

——身体が勝手に動いていた。

ビルの縁に足を掛け、飛び降りた。

\*

試験会場を映すモニター、そこへ視線を向けるのは、この受験の審査員。

一同が注目していたのは一人の少年。

「おお！ 飛んだぞ！ すごいガッツだ！ これは救助ポイントが——へ？」

沸き上がり、そして一同が啞然とする。

少女を見るなりそこへ飛び降りた少年は——そのまま地面に叩きつけられた。

「……!!？」

「何、あれ」

「お、おい、ちよつと待て、死人……不味くねえか？」

「いや試験会場で自殺するやつがどこにいる。きつと彼の個性ゆえの行動だ。取り乱すんじゃない」

「あ、あれ、血じゃねえか？ 血だまり出来て——やべえ現地と連絡を……」

青ざめていく試験管。

「——待て！」

誰かが叫んだ。

モニターでは仮想敵が進行を続けている。少年は砂埃に隠れ、転んだ少女もろとも仮想敵が踏み進もうとする。

「何だよ、仮想敵に安全装置はついている！ はずだから少女に心配はない！ だが少年は——」

「そうじゃない。様子が——」

次の瞬間、試験会場に、赤い線が現れた。

言うなれば、赤いレーザー。それは巨大な仮想敵を貫き、僅か一発で機能停止に追いやった。

それは液体。もつと言えば、血液。

発射下は少年、もつと言えば、先ほど地に伏した少年、緑谷出久の、口。

流れ星のごとく突き抜けたそれは、緑谷出久の口から放たれた血のレーザー。

このとき、彼に発現したのは『自分の体液を操る』個性。

その個性を発現させたのは、彼本来の個性。

無個性だった彼の執念が生み出した、決して受け継がれない、今後表舞台に語り継がれることのない唯一無二の、最低最悪にして最狂の個性。

『ワン・チャン・ダイブ』

個性を発現させる個性。

一日に一度、身を投げることで疑似的に生まれ変わり、その日限定で個性を得る個性である。

『考えるより先に、体が動いていた』

そんなワンチャンダイブによって、緑谷出久は個性を得る。

——これは無個性だった彼の無念と未練、後悔と執念が、最高のヒーローへと成り上がらせる物語である。

## No. 2 はりさける体操服

——考えるより先に、体が動いていた。

巨大仮想敵を前に逃げ場を無くし、窮地に立たされていた緑谷出久。

迫る身の危険、個性は発動しない、獲得ポイントはゼロ。このままではヒーローになる夢は潰えてしまう。

彼はそんな状況にも関わらず、倒れた少女を見るなり身を投げ出した。

「ああああああー！」

当然、彼の身体は落ちていく。

身動きのできないまま降下した彼を、砂煙の先で待っていたのはひび割れたコンクリートの地面だった。

嫌な衝撃を感じるとともに彼の意識は闇に飲まれる。

飛び降りただけ。何とも滑稽な最期だ。

無力感と空虚感に苛まれながら暗い闇の中へ沈む最中に、どこか、遠くのように近いどこかから、光の存在を感じ取る。

それは力。彼の中で生成されつつある、希望の光。

緑谷出久は夢中で、光に手を伸ばした。

「ああああああー！」

無我夢中で、とにかく身体を起こす。

そして感じた力を、感覚のまま一点に集中させた。

唸りを上げる彼の口元に、赤い流動体が収束していく。

次にそれは、直線上に放たれ、仮想敵を貫いた。

朧気な視界の中で、仮想敵が停止したのを確認すると同時に彼の身体も動きを止めていた。

少女を救いたいという想いが彼を身体を突き動かしていた。それが完遂された今、糸が切れたように力が抜けていく。

「まだ……終わってない……せめて、1ポイントでも——」  
緑谷出久は譫言のように言い、そのまま意識を失った。

\*

巨大仮想敵の出現は会場に大きな変化を与えた。

これまで率先して戦闘を行っていた者は誰一人例外なく戦意を失い、敵に背を向けた。

それもそうだ、その敵を破壊することは至極困難で、仮に破壊したとしても得する要素など一切ない。

あの場の誰もが逃げの一手を選んでいた。

そんな中で、突如として会場を貫いた赤いレーザーは、仮想敵を停止にまで至らせた。

飯田天哉はその光景に思わず足を止めた。

天を突き上げるような、流星のごとき赤。その発射地点に立ち尽くすのは、一人の少年。

試験中にも関わらず、動転した素振りを見かね避難を勧めた少年だった。

そしてその傍らには、倒れた少女。それを庇うような立ち位置で、彼は立ち尽くしていた。

一瞬で、悟る。

(まさか！…あの状況で助けようとしたのか!?)

驚愕。あの仮想敵を一撃で破壊した個性もさることながら、メリツト皆無の救助を実践したであろう彼に。

彼の身体が倒れていくその瞬間、試験終了の合図が告げられた。

「——お疲れ様々お疲れ様々ハイハイ、ハリボーだよ、ハリボーをお食べ」

唐突に現れた老婆がグミを配り歩いていた。

雄英高校の看護教諭、『治癒力の活性化』の個性を持つヒーロー、リカバリーガールだった。

リカバリーガールが倒れた少年を見るなり呟いた。

「おやまあ、これは……貧血だねえ」



(貧血!?)

老婆が彼に治癒を施す余所で飯田天哉は戦慄する。

貧血。血が不足している状態のことを指す。血で連想したのは、先ほどの赤いレーザー。

「あの赤は、血の赤だったのか……?」

思わず口にする。すると、同じくそこを取り巻いていた誰かが口を開いた。

「血!? あれは……血のビームを撃つ個性……!?!」

「俺見たんだよ、あいつ、確か開始直後から個性を発動する素振りがないから……?」

「……じゃあなんだ、立ち尽くしてたのは、リスクの大きい個性だったから……?」

「なんて燃費の悪い個性なんだ……」

その場の誰もが彼に注目していた。

純然たる個性の破壊力と、その代償の大きさに。

そして飯田天哉は、彼が人を助けるために身を挺したという事実

\*

一週間後。いつぞやと同じく抜け殻と化していた緑谷出久のもとに届いたのは、合格通知だった。

筆記の点数は十分、実技は0。そしてそれを帳消しにする救助活動ポイント!

完全に落ちたと思いこんでいた彼は両手を上げて喜んだ。盛大に喜んだ。

「おめでとう、出久……っ! お祝いしなくちゃ! 今夜はケンタツキーフライドチキンよ!」

しかし、手放して喜んではいられないのも事実。

歓喜によって薄らいでいた問題が現実として去来する。

ヒーロー養成学校である国立雄英高等学校。その学力偏差値は驚

異の79。しかし、ヒーロー育成の面で見ると、学力よりも重要なものがある。

それは、個性。

個性があるからこそ、ヒーローはヒーローと呼ばれる。

ヒーローになるための資格、大前提、必要不可欠なもの、それが個性。

緑谷出久、彼の個性は――

（――『日替わり』。こんな不確定な個性で、これからやっていけるのか……?）

彼の個性は極めて特殊なもので、その日ごとに変わるというものだ。

それも発動条件――個性が個性を使用可能にする条件も不明、という謎多き個性。

しかしあの実技試験を通して、彼はなんとなくその答えにたどり着いていた。

（初めて発動したのは、ビルから飛び降りたとき。次は階段から落ちたらしいときだった。そして……実技試験も僕は、ビルから飛び降りた。それらにおける共通点からして――）

ケンタツキーフライドチキンにかぶりつきながら彼は答えを出す。

（――僕の『個性』は、飛び降りたときに発動する……!）

理屈は不明だ。どんなメカニズムで即席の『個性』がつくられるのかなど、彼にはわかりもしない。だがそもそも普通に生まれたときに授かる『個性』自体、あまり解明されたものではない。だから細かいことは捨て置く。

（仮説を立てるなら、飛び降りた際の危機に対して体の細胞がなんとかしようとして解決しようとし、結果として『個性』を急造するに至る）

それこそ正に、幼馴染が口にした『ワンチャンダイブ』。

強力な個性が発現することを信じて飛ぶのだ。

（僕の『日替わり』……いや、『ワンチャンダイブ』はランダム性の強い個性だ。良い個性のときもあれば当然悪い個性もある。どんな個

性が来ても、使いこなせるようにしなくちゃいけない！)

入学まであまり時間はない。その間に彼が出来ることと言えば、個性の研究と、基礎体力の向上だった。

まずどんな個性を引いてもいいように、想定できる個性の使い方を考えておく。どんな『個性』も使い方次第。かつて『無個性』だった彼は、どんな『個性』でもいいから使えるようになりたいと渴望していた。

そんな彼だからこそ、どんな『個性』だろうとも魅力があると信じている。

そして地味だが一番大事なのが基礎体力の向上。今まで『無個性』を言い訳に努力をしなかったのがたたり彼はもやしに毛が生えた程度の体力しかない。もやしは元々毛みたいなのがついてるから実質もやしだ。そんな基礎体力——もとい運動能力では、折角作戦を思いついても実行できない。

試験のときにも痛感したことだ。目の前の『個性』に縛られてはいけない。基礎の体力の備えがあつて初めて『個性』は真の力を引き出せるのだ。

緑谷出久は本気だった。頭と身体、僅かな期間にも関わらず能力を劇的に延ばし、以前とは比べものにならないほどの基礎力を得た。

——もしこれが、強力な『個性』であつたならばそうはいかなかつただろう。

強力な『個性』であればあるほどに、それは慢心につながる。『個性』で全て解決するのだからとそれ以外を疎かにしてしまうのだ。

例えば。彼の憧れるオールマイトのような、万能にして最強格のものであつたならば、彼は『個性』の存在にかまけて自分を最後まで追い込むことはできなかつたはずだ。

元『無個性』で、『個性』に目覚めた今でなお『個性』に頼りきれない彼だったから、強い信念を抱けたとも言える。

\*

来たる、春。

「出久！ 超カツコイイよ」

緑谷出久は雄英の制服に身を包み、晴れて高校生となった。

国立雄英高等学校。広大な敷地に膨大な生徒数のマンモス校。

しかしその中で、ヒーロー科は僅か2クラス、計36人しかない。

彼のクラスは1-A。やたらに大きな扉を開ければ、個性的な『個性』を持つであろう個性的な面々が机を並べる。

中でも——緑谷出久の幼馴染である爆豪勝己と、試験中に避難を指示した眼鏡の青年が言い争っていた。

「机に足をかけるな！ 雄英の先輩方や机の制作者方に申し訳ないと思わないか!?!」

「思わねーよ。てめーどこ中だよ端役が!」

机に足を乗せた悪人面が幼馴染。堅い口調で注意する眼鏡の青年はいわゆる堅物。

眼鏡の青年は飯田天哉と名乗った。

飯田天哉は緑谷出久に気づくなり、彼を賞賛した。

「君はあの実技試験の構造に気づいていたのだな。俺は気づけなかった！ 君を見誤っていた。あのとき、上から避難などと言ってすまなかった。」

そして人を助けるためだけに、あんな危険な個性を使うだなんて……！ 悔しいが君はいくつも俺より上手だった!」

急な褒めに戸惑う彼は、直後に声を掛けた少女にも驚くことになる。

「あー！ そのモサモサ頭は!! ゲロビームの!!」

「ゲロビーム!?!」

実技試験の日、転びそうな彼を助け、そして転んだところを彼に助けられた少女だった。

「吐血！ 吐血！」と呟き「おええ……」という顔をし、あの日の緑谷出久を示す。かわいくない顔だ。

彼女は麗日お茶子という名前であった。

\*

教室に現れた緑谷出久を、彼はただ一人睨みつけていた。爆豪勝己。その視線に込めるのは苛立ち。

実技試験から一週間ほどが過ぎた頃。雄英の合格通知が彼らの中  
学にも通達され、爆豪勝己と緑谷出久は職員室へ呼び出された。  
爆豪勝己は教師の労いの言葉に欠片ほどの誇らしさも感じなかつ  
た。

彼の意識が向かうのは、隣で「奇跡だ」と囁かれる緑谷出久。

「どんな汚え手使やあ無個性が受かるんだ、あ!!」

「っ…………!!」

緑谷出久の胸ぐらを掴み、怒鳴る。

「史上初！ 唯一の雄英進学者。俺の将来設計が早速ズタボロだよ！  
他行けっつったろーが!!」

自分の思い描いた将来図に現れたノイズ。道ばたの石ころと同然  
だったはずの相手が、知らぬ間に同じ舞台に立とうとしていた。

沸き上がるは怒り。焦燥感。

思い通りにならなかつたことへ。

そして次の緑谷出久のとつた行動もまた、思い通りでないもの。

緑谷出久は彼の腕を掴み、

「君のおかげだよ…………！ あの日君が言ったんだ『——そんなヒー  
ローに就きてんなら効率いい方法があるぜ。来世は個性が宿ると信  
じて…………屋上からのワンチャンダイブ!!』って…………！ かつちゃん  
…………ありがとう。」

だから…………僕は行くんだ！」

それは、彼が何気なくいった悪口。緑谷出久が抜け殻になるほど  
ショックを受けた悪口。

緑谷出久は、それに対し「ありがとう」と——

「ちっ、ついにクソナードの頭がイカれたか…………」

無駄な時間だったと、爆豪勝己は彼を離した。

(俺が馬鹿にした次の日、あいつは消し炭以下のゴミ同然の状態だった……！　なのに急にお礼を言った！　ぜってー頭がイカれてんだ)　一度頭を下げたことを後悔し、そしてそれは怒りに変わる――。

\*

緑谷出久が麗日お茶子と会話(一方的)をする中、一人の中年がそれを遮った。

廊下で寝袋で寝る、そして話しながら食事を摂る、という社会人として明らかに失格な中年は言う。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

彼こそがこのクラスの担任だった。

非常識な担任は、非常識にも彼ら1―Aの生徒を入学式に出さず、グラウンドに放り出した。

始めるといふのは個性把握テスト。『個性』を使用した体力測定だ。中学までの体力測定は、個性使用禁止が常。そんな少年少女たちにとって個性の解禁というのは、好奇心そそり心躍る、魅力的な行事に映る。

しかし担任教師は意地悪く。その様子を見るなりに、

「雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは先生側も然り」

そして彼は、成績最下位を除籍すると言い放った。

非常識だ、理不尽だ、横暴だ、職務放棄だ、スクールハラスメントだ。そんな生徒の批判に相澤消太は言う。

「この国は理不尽にまみれてる。そういう理不尽を、覆していくのがヒーロー。」

放課後マックで談笑しなかったならお生憎。これから三年間、雄英は全力で苦難を与え続ける――

――Plus Ultraさ。全力で、乗り越えて、来い」

生徒たちの顔が引き締まっていくの見るなり、どこか嬉しそうにした。

「こっぴつからが本番だ」

測定が始まり、まず小手調べとばかりに生徒たちを眺める中、一人の生徒が手を上げた。

「せ、先生！ トイレに行つてきてもいいですか!？」

「……ダメだ。ヒーローには小便よりも優先しなければならぬことがある」

「で、ですが! ……っ! もし敵の目の前でヒーローが漏らしたらヒーロー失格ですよね!? それくらい行つてきてもいいんじゃないでしょうか! あと行かせないと虐待です……」

「……行つてこい」

顔を真つ青にして必死に弁明されれば、こちらが折れるしかなかった。

その様子に周囲も哀れみの目を送っており、そこで許可しなければその生徒の威厳もろとも担任としての威厳もなくなっていただろう。その生徒の名前は緑谷出久といった。

\*

周囲の生徒が個性を發揮していく中、緑谷出久のみが個性を使わずにいた。

いや、使えずにいた。

(マズイ……! きつと皆は個性を活かして普通じゃない記録を出してくる。対して今の僕は『ワンチャンダイブ』が発動していないから『無個性』も同然! このままじゃ除籍されるのは——)

考えるだけで視界が真つ暗に染まる。自分の顔が青ざめていくのがわかった。

そこで彼がとつた行動は——

「——せ、先生! トイレに逝つてきてもいいですか!？」

そして許可を得た緑谷出久は、駆けた。

なんでもいい、とにかく全力で、校舎へと。

——考えるより先に、体が飛び降りていた。

校舎の上層階から窓を開け、緑谷出久は必死に飛び出した。

Plus Ultra。担任教師が掲げた、その言葉どおりに。

\*

相澤消太が生徒を見渡していると、背後から声が聞こえた。

「先生、戻りました!」

「遅いぞ緑谷。早く測定を——」

そこに立っていたのは、全長4メートルほどのゴリラだった。

「——誰だお前は!」

「はい!・緑谷です!」

とつさに彼は個性を使う。

個性『抹消』、視た者の個性を無効化する彼の個性だ。

常時発動の異形系以外は抹消できるといふ対個性に特化した希少な個性。

全長4メートルのしゃべるゴリラ、それが個性ならば、間違いなく分類は異形系。相澤消太の個性では消せないタイプであった、この発動は無意味のはずだった。

しかし——発動直後に現れたのは緑谷出久だった。

「!・あなたは……抹消ヒーローレイザー・ヘッド!」

一発でヒーロー名を当てられる。しかしそんなことはどうでもよく、重要なのはその個性だった。

本人確認はしたので、測定に参加させる。再び巨大なゴリラに変身した彼を、注意深く観察する。

(ただの異形系でなく、任意で姿を変える、『ゴリラに変身する』個性……!?)

そんな個性、生徒の名簿にはなかった。

(緑谷出久……こいつの個性は確か……『日替わり』!!)

日毎に個性が変わるといふ異例の個性。相澤消太は、単純に体の器官の構造が変わるだけかと思っていたが、見当違いであることに気づく。

異形系にまで関与する、その個性の秘めた可能性に——。

驚愕する相澤消太の視界の先で、全長4メートルのゴリラが暴れ回り、測定の記録を次々と塗り替えていた。





## No. 3 服着しよう？

爆豪勝己は唾然としていた。

目を剥き口を開けたまま、目の前の光景をただ呆然と眺めていた。個性が解禁となった身体測定。三者三様十人十色の各々が、各々の個性を如何に活かし如何に大きな記録を出せるか試行錯誤し悩む中。

突如乱入した巨大ゴリラは、人間を越えた身体能力で暴れ回り高記録を叩き出していたのだ。

そして全ての計測を終えるなり、全長4メートルのゴリラは2メートルにも満たない学生のサイズへと収縮し――

――全裸の緑谷出久へと姿を変えたのだ。

「ど、どーいうことだ、よ……」

爆豪勝己にとって、緑谷出久は道端の石ころも同然の存在であった。

だが、先ほどまで緑谷出久は石を越えて岩、道を転がる岩石。視界に入り込むどころか、視界の全てを引つ掻き回していたではないか。(ついでこないだまで、道端の石っコロだったろーが!!)

顔を歪め内では悪態を吐くも、体が動くことはなかった。

石ころに対して、少しでも怖じてしまったことが腹立たしかった。

「デク……このクソナードがあああああ!!」

明後日の方へ叫ぶのみ。緑谷出久に面と向かって言えなかった自分がとにかく腹立たしかった。

――ちなみにその日、校舎の周辺に張り裂けた体操服が見つかるのだが、まったくの余談である。

\*

除籍はウソだ合理的虚偽だ。担任の撤回にクラス中が興奮めした後に、緑谷出久は服を着た。

そして帰りのホームルームを終えた教室。

(たまたま活かせる個性でよかった……)

緑谷出久は胸をなで下ろす。

個性はいくらでも存在する。その中からゴリラになる個性を引き当てるのはなかなか幸運だ。

単純に身体強化という面でもそうだが、ゴリラというのがミソだ。これが下手に鳥だったとしたら、彼は羽ばたくことさえできなかっただろう。緑谷出久は当然、これまで普通の人間としての挙動しかとったことがない。つまり、発現する個性が異形系だった場合、身体の動かし方すらわからないのである。

今回のゴリラでさえ、できるだけ大人しく動いたつもりだが身体がブレて仕方がなかった。

(ゴリラでよかった……)

緑谷出久がこれまでの人生の中で一番ゴリラに感謝をしていたそのとき。

「全く、相澤先生にはしてやられたな」

緑谷出久に声をかけたのは、飯田天哉だった。

「合理的虚偽とは……俺は『これが最高峰！』とか思ってしまった。鼓舞する為とはいえ、教師がウソをつく必要……あったのか？」

「あるでしょ!!」

「……。しかし君、今日のはいったいどういうことだ!? 君の個性は『血のビーム』じゃなかったのか!？」

「えっと、それは——」

その疑問は、飯田天哉が実技試験で見た緑谷出久の個性に起因する。

「あ、私も！ 気になった！」

そこへ混ざってきたのは麗日お茶子。

「君は∞女子」

「麗日お茶子です！ えっと飯田天哉くん、緑谷……クソナードくんだよね！」

「クソナード!!?」

静かな教室に、緑谷出久の声が反響した。

「え？ だって爆豪って人が『デク……このクソナードがあああああ

「ああ!!」って」

「あの、本名は出久で、クソナードはただの悪口……」

「間違えるならデクの方じゃないのか」

「え——そうなんだ!! ごめん!!」

麗日お茶子は快活に謝った。そらくクソナードの意味もよくわかっていないのだろう、悪気は感じられない。

「でも『クソナード』って……『頑張れ!!』って感じでなんか好きだ私」  
「クソナードです」

「緑谷くん!! 考え直すんだ!!」

「考え直す必要……あるかな」

「あるでしょ!!」

入学式のその日にクソナードがあだ名になりかける彼の青春も末よ。

「で、君の個性についてだが……」

「——お、緑谷の個性の話!? 俺らにも聞かせてくれよー!」

飯田天哉の言葉を遮り、そこへ3人の生徒が話に割り込んできた。

「いや正直にすげえと思ったよおめー! 俺あ切島鋭児郎。皆、緑谷のこと噂してたんだ!」

「私、芦戸三奈! すごかったよ——! 緑くんの結果、2位! 反復

横飛びの『体が収まりきらない』がなければ1位だったもんね!」

「俺、砂糖!」

切島鋭児郎は赤い髪のDQN染みた男子生徒。芦戸三奈はどこか異形系の敵染みた女子生徒。砂糖こと砂糖力道はタラコ唇の大男。

「緑谷の『巨大ゴリラ』の個性!」

「む、『血のビーム』じゃないのか!」

説明しろ。集まった皆の顔がそう訴えていた。

DQNと堅物に絡まれ、他にも集まる個性的過ぎる面々。そこでクソナードがとれる行動と言うのは、短く返事をして黙りを決め込み嵐が去るのを待つのみである。

しかし、そこで彼は一步踏み出す。

「じ、実は……僕の個性はさっきの変身能力じゃないんだ。

僕の個性は『日替わり』。一日ごとに個性が変わる個性で、さっきのは今日限定で、多分『巨大ゴリラになる』個性」

『日替わり』!? そんな個性ありかよ?」

「な……」

緑谷出久が個性を言うと、教室内が僅かにざわついた。

「もつと詳しくいいか!」

「うん。その代わりじゃないけど……みんなの個性も教えてくれると助かるんだけど……!」

緑谷出久、彼は普段からおとなしい少年で、内面はクソナード。ややコミュ障である。そんな彼にとつて、初対面の相手に囲まれてここまで言えたのは大きな進歩。ヒーローになるからには、コミュ障は直さなくてはいけないものなのだ。

緑谷出久の話に、ある者は興味本位で近寄り、ある者は聞き耳を立て。教室中が『日替わり』というその珍妙な個性に関心を寄せていた。「僕の個性『日替わり』は、一日——いや一定の周期で個性が変わる個性。発動条件を満たすと、その日限定で個性が使えるようになるんだ。身体が浮いたり、自動車並の速度で歩けるようになってたり、血を自在に操れたり、全長4メートルのゴリラになったり」

「それってかなり強い個性じゃないの!? 今言っただけでも幅がかなり広いよ! なんでも出来る万能の個性なんじゃ……」

「……いや、全然万能じゃないよ。どんな個性か選べるわけじゃないから使えない個性だったりするし、使えるようになった個性が何なのかから探っていくかなくちゃいけないし、第一その使えるようになる条件自体、よくわかってないんだ」

緑谷出久は若干の虚偽を混ぜ込んだ。さすがに、ほぼ初対面の相手に、自分の個性が身投げに近いなどとは言えなかった。

「ふーん、お前も苦労してんだな……」

「うん……。だからさ、どんな個性が来てもいいように色々な個性を知っておきたいんだ。だから君たちの個性も教えてくれると参考になるんだけど……」

「ああ、そういうことならいいぜ。俺の個性は『硬化』。名前のとおり

身体を硬化させる個性だ！生半可な刃物なら傷つかないし、向こうの方が勝手に折れる！」

切島鋭児郎の腕が硬質化し、鋭利に尖る。

「硬化するだけじゃない……形状まで変わってる……すごい個性だ！単純な防御力、それを攻撃にも使える。プロでも通用するシンプルな個性じゃないか！形状を変えられるなら先述にも変化が出るし、戦闘以外にも応用が効きそうだ」

「おお……ありがとよ」

どこか照れたように切島鋭児郎が頬を掻く。

「では俺の番だ。君だけに語らせてだんまりなのは卑怯だからな！

俺のは『エンジン』。足にエンジンに酷似した器官があり、それを動力に使える！」

飯田天哉が足を指す。ふくらはぎの部位が不自然に膨れており、それがエンジンらしい。

「足が速い——つまり脚力が強いってことだね。僕も歩行限定で速くなったことがあるんだけど、これって走る力を戦闘の攻撃に応用できないかな？足を動かす勢いだけでも威力になるだろうし」

「走行以外の応用か……中々面白い！考えてみよう」

そこから謎の流れが生まれ、集まった生徒が自己紹介を始めた。

「私はねー『酸』！身体中から溶解液を出せるよ！溶かせる！」

芦戸三奈の手に流動体が僅かに滲んだ。

「酸っていうと色々な種類があるぞ……！溶かすのは硫酸を代表する性質だね。酸は調整次第で劇物だから、気体化すれば広い範囲の制圧にも使える！欠点は人質があるときに巻き込むことだけど……。とにかく、粘度が弄れる流動体は強いよ！酸の性質が付随すれば尚更、戦闘に用途がある。戦闘じゃなくても、溶解以外に寄せればいくらかでも道はある。いい個性だ！」

酸の定義が正直よくわかんないけど……そのまま『酸』なら、H—|酸素として扱えたりしない？体内で分子を調整できれば普通の

水まで練成できそうだけど……」

「いきなり難しいのキタ！ そんなの考えたことなかったなー、うん、今度試してみるね！」

「俺は糖分10gにつき3分間パワーが5倍になる！ 使いすぎると脳機能に支障がでるがな……」

砂糖力道、個性『シュガードープ』。

「5倍……5倍!!? それってかなり強くないか？ 5倍って……定義がわかんないけど、全身の能力が5倍に跳ね上がるとして、そこから打ち出すパンチっていうのは腕力だけじゃなく足や腰、体重移動やら全身を使って打ち出すものだよ。だからつまり、パンチの威力としては実質5倍なんか目じやないほどの倍率になってるわけで……。砂糖君は体格もいいから元の筋力を少しあげるだけでも発動時の力はかなり膨れ上がる……。パンチに限らず一挙一動が5倍以上の力になるわけだよ。これってオールマイイトに匹敵する個性じゃないのか……?」

「おお、そう言われれば我ながらすごい個性に思える……」

「わ、私は!?!」

麗日お茶子。個性は触れたものを無重力状態にする『無重力』。

「それって万有引力や慣性がなくなってるってことかな……。！ それって、大きい箱を無重力状態にしたときは中身も無重力になるの？

だとしたら無重力空間をつくれるってことで、炎を小さくしたり電気を流れなくしたりも視野に入る……。そもそも巨大なものを無重力のまま投げて敵の頭上で落とせばそれだけで致命傷だし……。何にせよ、簡単に無重力状態って言うけどそれは地球の法則を無視させる能力を『物』に付与させてるわけだから、もはや人のできることじゃないはずだよ！」

「人を越えちゃった!? 何気なく使ってるけどそういうことだもんね……」

緑谷出久は、それぞれの個性に対し早口でまくし立てた。どれもこれも、考えるだけで可能性の広がるすごい個性だ。

無個性の彼はまず自分の認識できる範囲、理屈に変換してしまうのだが、それだけでも可能性はいくつも浮上する。

個性自体、解明されたものではない——ゆえに理論でできそうでも不可能であったり、理論上不可能であってもなしえるものが多い。それは『個性』の認識——本質が間違っていたり、あるいは『個性』を使う本人の自覚の有無が可能性を変えているというのもあるためだろう。

できると思っただけでやること、できないと思っただけでやることでは、個性が実現させるかも変わってくるはずだ。逆にできると思っただけでやることも個性の範囲を越えれば不可能なものにもかわりがないが、だがこうして可能性をふくらませておけばいずれどこまで出来る、出来ないの線引きがはっきりするだろう。

そういう意味ではこうして『個性』を考察しておくことは、『不確定』である個性を急造していく緑谷出久の『ワン・チャン・ダイブ』のためになるはずだ。

緑谷出久の探求心に火がついたとき、ふと視界に一人の少女を捉えた。

あろうことか、話しかける。

「今日の身体測定で1位だった八百万さんだよね！ 測定ごとに道具を創り出してみたいんだけど、どんな個性なの？」

「わ、私……？ まあ、いいですけど。私の個性は『創造』——」

八百万が個性について語るそばから、緑谷出久はその『個性』について考察を始める。

「すごい個性だ！ なんでも創れるなんて、名前どおりに『創造』！ プロでもこんな強い個性なかない！ でも創り出すものの構造を完全に把握してなくちゃいけないのか……実際に個性を発動する土壇場で物の構造をちゃんとイメージする冷静さが必要だ。それをモノにしてるなんて……八百万さん自身の能力も高い……」

他人の個性を聞くのは彼の想像力を膨らませた。





「私の個性は『創造』です。物の構造さえわかればなんでも創り出すことが出来ますの。生物以外ですが……」

そして緑谷出久という生徒は、同じ言葉を言う。

「すごい個性だ！」

想像したとおりの反応に、八百万は目を顰めた。

彼女の個性はぱつと見万能、ぱつと聞き完璧。今まで多くの人間が口をそろえて便利な個性と称した。だが本人にとってはそうではない。物の構造がわかればと簡単に言うが、それは分子構造を含めて初めて完全に創り出すことができるのだ。万能であるが容易ではない。

これまでの積み重ねた知識があつてこそその個性なのだ。

だから、簡単にすごいなどと言う緑谷出久が癪に触れる。

しかし——次に続けられた言葉は八百万の想像していたものではなかった。

「——なんでも創れるなんて、名前どおりに『創造』だ！ プロでもこんな強い個性なかないない！ でも創り出すものの構造を完全に把握してなくちゃいけないのか……利便性の高いものほど構造は複雑になっていくのが普通だ。実際に個性を発動する土壇場で物の構造をちゃんとイメージする冷静さが必要だし……それをモノにしてるなんて……八百万さん自身の能力も高い……」

意外だった。緑谷出久の考察は彼女の苦勞を見抜く。

驚く八百万。その顔を見るなり、緑谷出久は逃げるようにしてその場を去っていった。

先ほどまで緑谷出久と話をしていた切島鋭児郎らがあっけにとられていた。

「な、なんだったんだあいつ……無駄に個性に詳しかったぞ……まるで個性博士だな」

「私なんか正直、何言われてるのかわかんなかったもん！」

「俺のパワー5倍をああまで考えると……」

一様に抱く印象は、理屈っぽいやつ。

「——でもさでもさ——」

「自分の個性を褒められるのって、ウレシイ！」  
残された面子が盛り上がった。

個性というのは、生まれたときに授かるものだ。ただの異能力超能力ではなく、文字通りにその人の特徴を表すのが『個性』というもの。それを理解されて、肯定されて、嬉しくないはずがない。

先まで緑谷出久を卑下していた八百萬百でさえ――

(……)

——どこか口元が、緩んでいた。

\*

翌日。ケンタツキーフライドチキンを啜えながら登校した緑谷出久は、教室の扉の前に立ち尽くしていた。

(やってしまった……)

悔やんでいたのは、昨日の放課後の蛮行。

クソナード全開。やはりあだ名がクソナードになるのは避けられないのか。

「……！」

助けを求めるようにケンタツキーフライドチキンの骨を握り締め、扉を開けた――

「――よ、緑谷。おはよう。おいクラスメイトお!! 個性博士が来たぞ！」

切島鋭児郎が言うと、数名の生徒が押し寄せた。

「昨日のさ、お前が『個性』を真面目に考えてるのが伝わってきてよかった! 俺のは『テープ』で――」

「――すごい! それなら地獄からの使者 蜘蛛男みたいなことができるじゃないか!」

個性的な彼らは、どれも良い個性で、同時に良い奴だった――。

ヒーロー育成が名物である雄英高校。ヒーロー科はもちろんヒーローの育成を目的とする科ではあるが、基本的に高校であることに変わりはなく、普通の従業が大半だ。

その普通の授業をプロのヒーローが教えるというのはヒーロー好きの彼にとつて魅力の塊も同然だった。

お昼に訪れた食堂でさえプロのヒーローが勤めており、ケンタツキーフライドチキンをかじりつつも厨房を気にしてしまった。

そして——時間が過ぎ、待ちに待った『ヒーロー基礎学』！

「——わーたーしーがー、普通にドアから来た!!!」

教室に現れたその人物に、緑谷出久は驚愕した。

「オ、オールマイト!!?」

それは彼がヒーローを夢見るようになってきたきっかけの人物。

「あああ、あのオールマイトがなんでここに……」

周りを見回せば、沸き上がるクラスメイトたち。そこに緑谷出久のように驚きを押し出す者はいなかった。

「今年から先生するって本当だったんだ!」

誰かの言葉がざわめきから漏れてきた。

察するに、今年の新任としてオールマイトがいたらしい。

(知らなかった……! あまりにも自分の個性が嬉しくて……勉強や身体を鍛えるに精一杯だったせいで、去年まではともかく新任の先生は全く気にしてなかった……!)

今明かされる驚愕の事実。

画面の向こうに憧れていた、生ける伝説本人が目の前にいた!

そしてオールマイトの指導の元、行われることになったのは戦闘訓練。  
練。

緑谷出久たちは戦闘服に着替えて演習場へ向かった。

「緑谷、お前その格好……」

コスチュームを着た緑谷出久を見て、切島鋭児郎が声を上げた。

「お前それ、オールマイトの色違いじゃねーか!!」

緑谷出久のコスチュームは母の手製だ。それは緑谷出久の欲望を忠実に再現した、オールマイトとお揃い!

「お前本人の前でよくそんな格好できたな……」

「僕もオールマイトがいるなんて知ってたらこのコスチュームは持つ

てこなかったよ……」

「違うのは色とサイズか。リスペクトのしすぎは逆に失礼だからな！

それじゃもはやパクリだし……」

「うるさい！ ああああああー！」

訓練の内容は、屋内での対人戦闘訓練。

2人1組で敵とヒーローに分かれて戦闘をシミュレートするとい  
うものだ。

緑谷出久は麗日お茶子とペアを組み、爆豪勝己と飯田天哉とのペア  
と戦闘を行うことになった。

形式は、爆豪勝己の組が敵役で屋外に閉じこもり、それをヒーロー  
役の緑谷出久の組が検挙しに行くというものだ。

建物への進入に成功したところで、パートナーである麗日お茶子に  
緑谷出久が提案する。

「まず僕が屋上に行って飛び降りるよ」

「なんで!？」

緊張のせいか口走った。

「あ、いや、僕の個性の発動条件っていうか……実は、高いところから  
飛び降りないと僕の『日替わり』は発動しないんだ……」

そう、緑谷出久は本日、個性を取得していない！

無個性のまま戦闘訓練に来てしまったという危機感が現実として  
去来する！

そこへ——爆豪勝己が姿を現した。

すぐさまこちらへ腕を振り落とし、個性を発動させた。

緑谷出久は麗日お茶子とともに爆破を辛々回避する。

回避には成功したものの、コスチュームのマントが焼け落ちる

「デクこら、避けてんじゃねえよ」

「麗日さん、ここは僕が引き受けるから、別行動にしよう……!」

いくらかの攻防の後に麗日お茶子と別れ、緑谷出久は爆豪勝己と1  
対1になる。

それは幼馴染との因縁の対決。

緑谷出久は、長い間爆豪勝己を観察し続けてきたことを活かして優位に立っていく。

「なんで当たたらねえんだ……!!」

「かつちゃんは……大抵、最初は右の大降りなんだ。どれだけ見てもたと思ってる……!! すごいと思ったヒーローの分析は全部ノートにまとめてるんだ！」

君が爆破したノートに!!」

「——だからか!? だから個性も使わずに逃げるのかよ!!? ムカツクなあ!! ならよ——

——避けようのない広範囲爆撃ならどうだよ!?!」

「——え」

直後、爆豪勝己の両手から巨大な爆発が起こり、建物の4分の1を破壊した。

緑谷出久は爆発に飲まれ、ボロ雑巾のように吹き飛んだ。

階数は2階。床は破壊されており、緑谷出久はなす術もなく落ちていった。

地面と接触する直前、意識が途絶える寸前に、彼が思うことは。

(——君に、勝ちたい!!)

そして彼は、絶命した。

「何寝てんだデクウ! てめエの個性、見せてみろよ!! 『日替わり』だか知らねえが、ただのクソナードのてめーに何ができんのかよオ!!」

爆豪勝己の言葉を受け、緑谷出久は起きあがる。

『ただのクソナード』じゃない……!! 『頑張れ!!』って感じのクソナード』だ!」

猛る。そして彼はコスチュームの腕の部分を捲った。

爆豪勝己によって吹き飛ばされ、目覚めたときから腕に疼きを感じていた。

その疼きは間違いなく個性! 実戦だったならば確実に窮地であるこの状況で、彼はようやく個性に目覚める!

突きだした腕——その肌の表面に亀裂が入り——

——1枚、紙が出てきた。  
紙。

植物の繊維を平らになるよう絡ませたもの。

一般的に、家庭に流通している筆記が可能なタイプ。

紙。ただの紙きれ。

今日も彼が授業で使った、あの馴染み深い紙だ。

その個性は『製紙』。紙を身体からつくりだす。

——緑谷出久は爆豪勝己の個性によって爆死した後、自身の個性が  
チヤで爆死したのだった。

## No. 4 猛れ『頑張れ!!』って感じのクソナード

緑谷出久に発現した個性は、『製紙』だった。

創り出した紙を——丸め、爆豪勝己へと投げつける。

丸めた紙は爆豪勝己の眼前にて爆破された。

「——おいデクウ……それがためエの個性か？」

爆豪勝己が、歯を剥き出しにして嗤った。

(マズイ、この状況でこの個性は……マズイ！)

緑谷出久は爆豪勝己に背を向け走り出した。逃走。

「待てやクソナード!!」

爆豪勝己の攻撃を何とかかわしながら逃げていく。

(紙!? よりによつて紙だつて!? かっちゃん個性は『爆破』だぞ!?)

これじゃすぐに燃やされるじゃないか！)

逃げる——と見せかけ、曲がり角で振り返り、追尾する爆豪勝己に向かつて腕を突きだした。そして個性を全力で発動する。

すると掌から大量の紙が勢いよく吐き出された。さながら高速印刷機の排出口のごとく。

逃走に見せかけた奇襲、虚を突かれたような爆豪勝己だったが、それもあつけなく爆破されてしまう。

(ダメだ！ 割と出せるけど、紙じゃダメだ！ 紙の創造だなんて——)

——八百万さんの劣化もいいところじゃないか！)

個性『創造』、八百万。あらゆるものを創ることができる彼女なら、紙を創るぐらい容易いことだろう。劣化も劣化、完全劣化。八百万の八百万分一程度の性能の個性である。0.000013%スマッシュだ。

圧倒的不利。しかし考えることはやめない。

憧れのオールマイトが見ているからというのものもある。だが、それよりもただ純粹に、この幼馴染に勝ちたいという思いがあった。

(考えろ、考えるんだ！ どんな個性にも使い道がある！ 状況が不利なだけで、決して弱い個性じゃない！)

しかし、紙を造るのみ。造りだした紙を自在に操れるわけでもな



く、ただ生み出すのみ。

(八百万さんはなんて言ってた!? 今の僕の上位互換の、あの個性は!?)

昨日の会話を思い出す。

八百万万の『創造』と、今の緑谷出久の『製紙』は異なる個性だ。しかし、物を生み出す点としては同じ系統。そこにヒントを求めろ。

——物の構造さえわかればなんでも創り出すことが——

「……………」

可能性は、見えた。

「どこ行きやがったクソナードオ!!」

屋内という性質を活かし、また爆豪勝己が破壊したことによる構造の変化を利用して緑谷出久は撒くことに成功する。

彼を探す爆豪勝己の慟哭が轟いた。いる階層事自体が違うことを確認する。

ここで緑谷出久は麗日お茶子と合流。

「飯田くん、上の階にいたよ! 私個性対策に部屋のを片づけてて……………」

「……………」 そっか飯田くんも麗日さんの個性を知ってるもんね、対策はしてくるか……………」

爆豪勝己は対策なしに真っ直ぐ緑谷出久に向かってきたわけだが、飯田天哉は違う。見た目と印象通りに真面目な彼はこの訓練にも忠実に取り組むだろう。

まさかとは思いが、敵という設定に従って卑劣な手段も用いるのかもしれない。

(その中で重要になってくるのは僕の個性。こればかりは飯田くんも対策はできていないはず……………)

日によって変わる個性。この訓練における一番のイレギュラーと言えるだろう。

爆豪勝己が開始直後に特攻してきたことを見るに、2人の連携はと

れていないと思っただけ。初日にも険悪だった彼らだ、爆豪勝己が折れないのは目に見えているので、おそらくは相談なしにこちらへ直行したのだろう。

よって、爆豪勝己の連絡で飯田天哉に個性が伝わることはないはず。

思考しながら、緑谷出久は腕から紙を出し続ける。

「あー！ それって今日の個性!？」

「え？ ああ、うん。多分『紙を造り出す』個性」

「よかった、使えるようになったんだね！」

紙を造り出す個性。そこへ考慮していくのは、昨日の八百万の言葉。

緑谷出久の腕から出るのは、極一般的な紙。A4サイズの一番流通しているコピー用紙と同等のもの。

(これは多分、僕の『紙』のイメージがコピー用紙だからだ。なら考え方を変えて——)

次に彼の腕から出たのは、B4サイズの内紙。

(そうだ、やっぱり僕の『紙』に対する意識が反映してるんだ！)

八百万の物を作る条件は、構造がわかること、であった。『物を創り出す』個性を自分のイメージ——認識で制御しているのだ。この『製紙』も同様、紙限定ではあるが、サイズだけなら応用が効く。

(さすがに原料の『木』としては出せないか……)

「えっと……何してるの?」

緑谷出久の足下に散らかる紙切れを見て麗日お茶子が首を傾げた。

「あ、ごめん。この個性がどこまで応用が効くか試してたんだ。でも大きさや多少の強度は弄れても、相手は『爆破』、すぐに燃やされるし……」

やはり紙という材質が一番ネック。

(俗に『燃えない紙』というのもあったはず……でもその構造、成り立ちを考えるとあれは『紙』に薬品を擦り込んだ結果……いけるか……?)

おそらくそれは無理だろう。緑谷出久は独りでに首を振った。

薬品を投与している時点で『紙』の範疇を越えている。八百万百なから擦り込む『難燃剤』といった薬品の分子構造を理解することで創造できるのだろうか、緑谷出久には無理だった。そもそも普通の紙と不燃紙の違いが目視で区別が付かない。

緑谷出久が『製紙』の個性を生まれたときから使い込んでいたならば話は別だったかもしれない。経験と『紙』への理解、追求が深まった状態ならば不燃紙を造るにも至ったのかもしれないが、一朝一夕どころか一時間にも満たない彼にそこまでの自由度はない。

理論で挙げることができても、出来ないことがある。使い込み成長した個性でようやく出来ることがそうだ。

この個性の弱点が新たに一つ。発現した個性を大きく成長させることは出来ない——。

(単純すぎて気付きすらしなかった！)

しかし、知識を蓄えておくことは無駄ではない。備えは可能性を広げ、戦術を考えることに繋がる。

そして彼は実技試験の教訓を元にその戦術を実行できるよう身体作りも行っている。

(個性を100%引き出せずとも、5%、いや8%、いやそんな税率程度じゃなくて……基礎分として50%は引き出せば、十分戦術に組み込める！)

後の半分は応用。その個性の熟練者がたどり着く境地。

数時間でたどり着けるような生半可なものではない。

麗日お茶子の『無重力』と、『製紙』のサイズと多少の強度、それを考慮して——麗日お茶子へ、作戦を伝えた。

\*

爆豪勝己は一度上層へ戻る。

この訓練の要である『核兵器』。それを回収することがヒーロー側である緑谷出久の勝利条件であり、避けては通れない道。

結局はそこで待ちかまえるのが緑谷出久を見つける最も合理的な手段。

核兵器のある手前の階層に——緑谷出久は、いた。

否。待ちかまえていた。

「どういうつもりだデク……!!」

「麗日さんが核へ向かった。僕はここで、君を止める!!　そして僕は、君に勝つ!!」

その目には微かに涙が滲んでいて、身体は震えているように見えた。

しかし緑谷出久がこちらへ告げるのは、宣戦布告。

歯を食いしばったその顔は、緑谷出久が『無個性』だったはずの頃から度々浮かべていた顔で——爆豪勝己は、それが無性に腹立たしかった。

「その面やめろやクソナード……上等オだ、てめエが俺より下だつてこと、証明してやる……!!」

もう一度、特大の爆発を起こそうと構えたとき、爆豪勝己の無線に通達が入る。

『待つんだ爆豪少年！　悪いが次それを撃ったら強制終了で君らの負けとする。屋外での大規模攻撃が愚策というのはもちろん。そして君の行る場所を考えるんだ！　上の階のすぐそこには核があるんだぞ!?!』

突如差し込まれた横槍に舌を打つ。

『……緑谷少年チームへの肩入れのようだから忠告しておくが、その場所に誘ったのは緑谷少年の方だ』

「……!!」

目の前の緑谷出久を、睨みつける。

爆破封じ。個性でも武力でもなく、ルールを利用した個性封じ！

回避不能の大規模攻撃はもう使えない。

「クソが……ああああああ!!　じゃあもう、殴り合いだ!!」

ルールによる爆破封じは、大規模のもののみ。爆豪勝己は爆破の勢いを利用して飛びかかる。

しかし先の宣戦布告とは裏腹に、緑谷出久はこちらとは逆の方向に駆けた。

「結局逃げんのかよ!?!　ああ!?!」

激情のまま後を追う。

そして曲がり角において——またもや緑谷出久は紙を多量に噴出した。

「またそれか！　また目隠しか！！　いくら紙キレを出しても無駄だつーの！！」

一度やられた戦法を、彼はまたしても難なく爆破する。爆炎の先にあつたのは白——緑谷出久を覆い隠すほどの大きな紙。

「んなもんで隠れた気になってんじゃ——」

——違う。

爆豪勝己はその類稀なるセンスで、横をすり抜けていく緑谷出久に気づいた。

爆破という派手な攻撃と、身を隠す大きな紙によって緑谷出久の拳動から意識がそれていた。

いや、目隠しに爆破を使わせることによって、意識を逸らさせたのだ。

冷や汗を浮かべながらも、爆豪勝己はそれに気づくことができた。咄嗟にも——渾身の力を込めて腕を振るう。

——馴染んだ動きからの、右の大振り。

次の瞬間、爆豪勝己の視界が回転した。

彼は床に叩きつけられた。思いがけない衝撃に息が詰まる。

「言ったよね——君は大抵、右の大振りなんだ」

「——っ！！」

身体を無理矢理に勢いよく起こし、前のめりになる。すると次は背中に衝撃が走る。

緑谷出久が馬乗りになる。

「てめッ……っ！！」

怒りを口に出した瞬間、爆豪勝己の周囲に煙が吹き付けられた。そして数枚の紙が散らばる。

「——『個性』を使わないで！！」

緑谷出久が叫んだ。

「かっちゃんも、知ってるよね——粉塵爆発」

即座に理解する。散布されたのは煙ではなく、粉。粉塵爆発、それは大気中の粉塵が引火し爆発を呼ぶ現象。爆豪勝己が『個性』を使うということは——当然、大規模の爆発を呼ぶということだ。

それは爆豪勝己自身を飲み込むだろう。そして、上階の核までも——

「……デクウウウウウウウ!!」

暴れる爆豪勝己その口元に緑谷出久の手が当てられ——

——直後、爆豪勝己の口内に何かが詰められた。

「!!??」

「今君の口に詰めたのは、紙。昨日、僕の個性について聞いてたよね？」

『日替わり』。今日の僕の個性は『紙を造り出す』個性。今はできるだけ柔らかい紙にしたけど——全力で厚紙を造りしたら、どうなっていたか——わかるよね……!!?」

爆豪勝己の身体が硬直する。

紙を出す勢いは目隠しの時点で見ている。決して弱い勢いではない。厚紙を、その速度で流し込まれることは——すなわち死である。悪寒が走る。道端の石ころでしかなかった緑谷出久の言葉によって、確かな恐怖が現実として去来する。

「~~~~!!」

声にならない声とともに、とにかく抵抗を試みたそのとき。

『爆豪少年、君の負けだ』

無線にオールマイトの声が流れた。

『君の身体にはもう——確保テープが撒かれている!』

「……!!」

己の敗北が現実として突きつけられる。

そして——緑谷出久の属するヒーローチームの勝利が告げられた。

\*

「むぎむぎ戻ってきたか……だがしかし! 君の……お前の個性ではこの部屋においてなす術はない!!」

麗日お茶子が核の部屋へ戻ると、コスチュームの下では悪人面を浮

かべたであろう飯田天哉は綺麗に掃除された部屋を見せつけた。

その様はまるで学芸会の劇。思わず吹き出しそうになるのは演技が悪いもんね。

しかし飯田天哉は愚策だった。核から離れない為とはいえ、彼女を一度返してしまったのは失敗。

麗日お茶子への策は講じたものの、詰めが甘く結局は愚策である。綺麗に清掃された部屋に、ゴミが落ちる。そのゴミは、紙くず。

「出久くんがくれたんだ！ 出久くんの——今日の個性!!」

「彼の個性!?!」

飯田天哉が、紙に視線を集中する。

この訓練においての一番の不確定要素が、飯田天哉へ今断片的に明される。

麗日お茶子の腕に抱えられたのは、筒上に丸められた身を覆うほどの大きな紙と、大小様々の紙。緑谷出久が呟きながら無心に出していたものだ。

まず麗日お茶子は紙くずを、上へと投げる。

「何を——?」

飯田天哉がその動きを注視する。

数枚は彼女の個性によって滞空するのだが、大抵のものは『無重力』が適応されずに地面に落ち行く。

麗日お茶子の個性は、五指についた肉球、五つ全てで触れなければ作用しない。

飯田天哉が気を取られている隙に、大きな紙を開き、無重力状態にして投げる!

「なっ!?! 本命はこっち——これは、目隠し!?!」

大きな紙にとって麗日お茶子の全身が隠れる。飯田天哉は咄嗟に左右を見る。選択しはどちらか。どちらか一方から彼女が出てくるのか、咄嗟に対応できるように意識を集中させる。

——しかし!

麗日お茶子が選んだのはどちらでもなく、上!!

「自身も浮かせられるのか!!」

消耗の大きい麗日お茶子の隠し玉。見事に飯田天哉は予想を裏切られる。

空中にて『個性』を解除した麗日お茶子の身体が、核に触れようとする。

「させるわけ——」

上を見上げていた飯田天哉が振り返ると——

——その視界を紙が覆った。

最初に投げた紙のうち、無重力になっていたもの。

麗日お茶子が身体を降ろすために個性を解除したのと同時に、最初に投げた紙も重力に従い始めたのだ。

「んな!!?」

駆け出すのが遅れる。

飯田天哉の個性は『エンジン』。走力が強化される個性だ。その走行速度であれば追いつける距離だった。

本来なら、追いつけるはずだった。

初めに緑谷出久の個性で思考を逸らされ、次に上に注意を引かれ、左右に意識を振られ、彼女の個性に予想を裏切られ、また上を向かされ、振り向き、視界を覆われる。

それだけの動揺の上で、咄嗟に判断ができるか?

十全の踏み込みができるか?

万全の走行ができるか?

——できない。

それでも飯田天哉。韋駄天のごとく核へと向かうが——タッチの差で、麗日お茶子が先に核へ触れ——

——ヒーローチームの勝利を、オールマイトが告げた。

個性の反動で、重度の吐き気を催した麗日お茶子は保健室へ運ばれた。



そこには彼女のパートナー、緑谷出久の姿もあった。

「やったね……麗日さん！」

緑谷出久は全身にいくらかの擦過傷があるものの、どれも軽傷だ。しかし横たわったまま力なく笑うのみだった。

「出久くんの作戦のおかげだよ……！」

麗日お茶子も横たわったまま、両手を固めて小さくガッツポーズをとるものの、自身の吐き気と緑谷出久への心配に顔を曇らせる。

見た目はそれほど酷くない。コスチュームの欠損は激しいが、身体の傷は命に関わるようなものではないように見える。

——まさか、身体の内部、特に臓器関係に傷を負ったのではないか。

案じる麗日お茶子の意に反し、リカバリーガールが告げたのは『極めて軽度の栄養失調』。

「……要は空腹だねえ。フライドチキンだよ、フライドチキンをお食べ」

「フ、フライドチキン……!? それって、ケンタツキーですか!? ケンタツキーフライドチキンですか!!?」

「—— そうだよ」

「ありがとうございます!!」

緑谷出久もまた、麗日お茶子と同じく吐き気に伏していたのだ。

もともと、彼女の場合は口に食べ物など入らない吐き気、緑谷出久の場合は喜んでケンタツキーフライドチキンを食べる吐き気なので。

\*

ケンタツキーフライドチキン。それはただのフライドチキンに非ず、あのケンタツキーのフライドチキンであることが重要なのだ。

「……」

「あ、麗日さん！ ごめんね。今日の個性のせいなんだ」

言葉を失っていた麗日お茶子へ、緑谷出久は食事の手を止めた。

「今日の個性は『製紙』。紙を身体から出せる個性なんだけど——どうやら脂肪かなにかを紙に変換してみたみたいなんだ！」

爆豪勝己に確保テープを撒いた直後。張りつめていた緑谷出久の

意識は緩み、力が抜けていった。

「どんな紙が出せるのかを試すのに個性を使い過ぎたんだ。無から何かを生み出すなんて普通ありえないのに、僕は無限に出せる気でいた。もう少し速く気付けなければよかった。あるいは——八百万さんにもっと聞いておくとか」

「八百万さん？ 昨日話してた——何で？」

「八百万さんは今の僕『製紙』の完全上位互換だから。もしかすればこの欠点に近いものがあつたかもしれない」

そう、『個性』を知ること、こういつた欠点も予測できる。

昨日の八百万百との会話でデメリットまで聞き出していれば、気付けた範囲なのだ。

「本当、ギリギリだった……。僕は結局、かっちゃんに勝っていないんだ。『規則』を盾に『個性』で誤魔化して……。最後なんて虚勢に近かった」

必死だったとはいえ、いささか無理のあつた勝利だ。

爆豪勝己の口に押し込む程度の柔らかい紙を造つたが最後、もう個性を使う余力はなかった。

粉塵爆発にしても、実際爆発するのに必要な細かさだったかも不確定だった。あれはあくまで紙を限界まで小さくして造りだしたに過ぎない。

だから、虚勢。あのまま爆豪勝己が動きを止めでもしなければ、緑谷出久は簡単に振りほどかれていたかもしれない。

ギリギリ。半ば脅しての勝利である。それも爆豪勝己があのまま構わずに爆破していれば無為に帰していたし、ちらつかせた『死』にも動じなければ、今ごろ緑谷出久には敗北が現実として去来していただろう。

爆発は不確定。紙を詰め込むのも到底出来やしない机上の空論。体力的にも倫理的にも。

あくまで妄想を垂れ流したに過ぎないのだ。

「結局、あのとき僕は……かっちゃんを信じたんだ。かっちゃんなら、僕が言った妄想も現実にも構えると思つたから。すごい奴なんだよ。

嫌な奴だけど。荒いようで、咄嗟の判断はできて——」

—— 緑谷出久が抱いたのは、敗北感。

『試合』に勝った。『勝負』でも勝った。だがそれは『試合』だったから。爆豪勝己が優秀だったからこそ—— 付け込んだ勝利。

「今度は—— 今度こそ、堂々と、かつちゃんに勝ちたい!!」

「出久くん……」

その為に必要なことがある。勝利しつつも苦い、そんな余韻そつちのけに現実として去来するのは、彼の『個性』について。

彼の『日替わり』—— 『ワンチャンダイブ』に対する認識は、飛び降りたときに発動し、『個性』を発現させるといふもの。

しかし緑谷出久はこれまで—— 意図して発現させたことはないのだった。

\*

一方で、訓練の様子を見るモニタールーム。

「すつげえ緑谷……! 『紙を造る』個性で『爆破』に勝つちまった……!」

緑谷出久が属するヒーローチームの勝利を受けて、部屋中が沸き上がっていた。

特異な個性の持ち主であることと、昨日の個性に対する熱弁もあり、緑谷出久はクラス中の注目を集めていた。

「さて、講評の時間だ! 良い点はたくさんあるんだが、今回は致命的に悪かった点もいっぱいあった。わかる人!!?」

オールマイトの問いかけに、八百万百が挙手。

「まず爆豪さん。私情丸出しの独断専行。敵も徒党を組む設定なのですから、飯田さんと少しでも話し合うべきでした。そして屋内での大規模攻撃も愚策です。」

緑谷さんも同様、爆豪さんの足止めのような立ち振る舞いでしたが、あそこで麗日さんと一緒に二人係で核回収に向かえば成功率は上げられました。待ちかまえたのは完全に彼の私情です。

麗日さんは中盤に緩みがありました。そして核に触れた段階で動

けなくなるようでは実際の現場において失敗でしかありません。

そして飯田さんも、色んなことに気を取られすぎている様子でした。最初から核を持ったまま逃げ回れば麗日さんは触れることができなかつたはずですよ」

まくし立てる八百万百に一同が静まり帰った。

「さ、さすがだね、八百万少女。くう……!」

「常に下学上達! 一意専心に励まねばトップヒーローになど、なれませんので!」

「じゃあ今戦の良かったところをまとめてベストを決めるとすれば、誰だろうね……!?!」

「それは、敵という役割を全うしていた飯田さん——

——と、不利な個性で立ち回った緑谷さんのどちらか、でしょうか」

こうして、緑谷出久の初訓練は幕を閉じた。

\*

戦闘訓練の終盤。

爆豪勝己は、敵チームとして敗北した。いや、チームの敗北だけでなく、彼は確保テープを巻かれ個人としても敗北を喫した。

他ならぬ、緑谷出久の手によって。

道端の、石ころによって。

「認めねエ……俺は……負けてなんか……っ!」

「——かっちゃん」

「!?!」

名を呼ばれ、振り返るとそこには緑谷出久の姿があつた。

「……なんだよ、ああ? 何だよ、俺を見下すな——」

「これだけは、言っておきたいんだ」

緑谷出久は、真っ直ぐにこちらを見ていた。

いつもの、下ばかり向いた緑谷出久ではなかつた。

——幼い記憶に残る、頼りない顔ではなかった。

「かつちゃん、僕の個性は——」

——君から授かった個性なんだ」

何を言っているのか、わからなかった。

「君がいたから、僕は今日、君に挑むことが出来た!! 君のおかげで僕はここにいます。君のおかげで——努力することが、できたんだ!!」  
何一つ、要領を得ない。そんな緑谷出久の告白に、爆豪勝己は何一つ理解できなかった。

「……僕はまだ、この個性を使いこなせていない。まだまだ、わからないことだらけだ。今日だって、ギリギリだった。君が優秀だったから——かつちゃん、君に勝てたのはかつちゃんのおかげなんだ。

次は——次はもつと、胸を張って、君に勝って——君を越えるよ」  
そこで理解する。

そうか。

これは。

宣戦布告なのだ。

今まで爆豪勝己が繰り返してきた暴虐に対する、当てつけ。

これまで緑谷出久を下に見て、虐げていたことを反骨精神にここまでのし上がってきたという、宣告。

そして完全に越えてやるぞ、見返してやるぞという、宣戦布告……  
!

「……そういうことかよ——そうだ、俺は今日てめエに負けたんだ！  
正真正銘、真っ向から、てめエの策略に負けたんだ！ 俺を越える？  
クツソ!! 言いたい放題言いやがって!!」

立ちこめる感情は、怒りではなく、悔しさ。

巻き上がる衝動は、侮蔑ではなく、不屈の闘志。

「こっからだ!! 俺は……!! こっから……いいか!? 俺はもうお前には負けない! 追いつきもさせない! こっから俺はお前引き離して……ここで! 一番になってやる!!!」

拳を固める。気持ちを固めるように。

「ここには俺より上かもしれない奴がたくさんいる!! 俺はもう、誰にも負けねえ!!」

——デク! お前にもだ!!」

道端の石ころが、いつの間にか、人の形になってすぐそこまで来ていた。

爆豪勝己が抱くのは焦燥感と——対抗心だった。

## No. 5 いいぞガンバレ非常口!

早朝。緑谷出久が立ち尽くしていたのは、彼の住むマンションの屋上。

見下ろすのはコンクリートの地面。

彼は飛び降りることが——できなかった。

この距離から飛び降りれば間違いなく怪我を負う。もやしからごぼうにスキルアップした緑谷出久もただでは済まない。

最悪、死ぬ。

「……飛べ、飛べよ……っ!」

だが——冷静な思考では、到底飛び出せるものではない。

もし個性が発現しなかったら? もし個性が発現する前に息絶えてしまったら?

——これまでの全てが無駄になる。

飛べるわけがない。今の彼に、この世界へ別れを告げる意志はないのだから。

実技試験の一週間後、緑谷出久のもとに合格通知が届けられた。

それからというもの、かれは個性『日替わり』を活かすための特訓を始めた。

どんな個性だろうと活かすための知識と、知識を活かすための基礎体力の向上。そして——個性『日替わり』を効率よく発動させるための研究。

しかし——緑谷出久は入学までの間、個性を発現させていない。

発現に『落下』が関係しているのは察していた。

だから、まずは50cmの段差から始めた。毛も生えていないもやしでも難なく着地できる高さだ。

検証は10cmずつ増やされていった。安全と判断できる高さは一通り試した。しかし何も起こらなかった。最後はこの屋上からも飛び降りた。最悪の事態に備えてトランポリンを置いて、数えること

数回飛び降りた。日を変えて飛び降りた。時間も変えた。早朝だろうと深夜だろうと試した。

しかし、変化なし。

その行為が何を生み出したかと言えば、無駄な時間と労力、そして何度もマンションから飛び降りるワンチャンダイブ亡霊少年の怪談だけだった。

『発動条件』は『飛ぶ』こと。だが——それだけではない。

それを緑谷出久はまだ、掴みあぐねていた。

身体テストも、所詮はただこうするしかないと必死に飛んだ結果だ。戦闘訓練も同様。発現するときは一様に夢中で、発現する瞬間に立ち会えていない。

冷静な頭で、狙って意図的に発現した試しはないのだった。

\*

——オールマイトの授業はどんな感じですか？

『実戦を交えた素晴らしい授業ですわ』

——『平和の象徴』が教壇に立っているということで、様子などを聞かせて！

『様子!? えー……と筋骨隆々!! です!』

——教師オールマイトについてどう思ってます？

『最高峰の教育機関に自分は在籍しているという事実殊更意識させられますね。威厳や風格はもちろんですが他にもユーモラスな部分等、我々学生は常にその姿を拝見できるわけですから。トップヒーローとは何をもつてしてトップヒーローなのかを直に学べるまたとな』

——オールマイト……

『どこから飛べばいい? どうすればワンチャンある? マンションからは駄目だった。ビルならよかったのか? でも一度階段を転げ



落ちたのもいけた。校舎から飛び降りたときでもいけた。何が違う？ かつちゃんに言われて身投げしないと駄目なのか……？ 僕はどうすれば新しい自分……』

——ちよ、今の不味くない!? カメラ止めて！ 何、いじめ!? いやこれはむしろスクープ……!」

\*

オールマイトが教師として就任したことが公に告知され、雄英にはマスコミが押し寄せていた。

今まで平和の象徴が教壇に立つということは伏せられていたし、情報統制、報道規制もされていたのだが、さすがに生徒と関わる以上公にしないわけにもいかず。

(……どおりで知らなかったわけだ)

いくら緑谷出久が身体向上に必死だったとはいえ、オールマイトが教師になると報道されていればいやでも目に付いたはずだ。

朝のホームルーム、担任の相澤消太が持ち出したのは学級委員決めの話題だった。

立候補者大多数ということで全員参加の投票制。

そして多くの票を集めたのが——

——2票、八百万百。2票、緑谷出久。

「あの……辞退させていただけませんか？」

教室の前で、緑谷出久は言いずらそうだったけれども、まあ言った。

「何言ってるんだよ！」

「せっかく選ばれたのに！」

「そうだけ、自分で入れた以外にも一人、確実にお前に入れたやつがいるんだし——」

「ごめん、ぼ、僕はまだ学級委員なんて器じゃないし……それに、まだ自分の個性をものにできてないから、しばらくはそっちを優先したいんだ。『個性』の知識と、身体づくり！ ヒーローになるためには足りないものがたくさんあって——」

そう、緑谷出久はまだまだ自分のことで精一杯。他人をまとめる学級委員になどかまけている時間などないのだ。コミュ障を引きずつて、声が小さくなりがちなのもあるが。

「じゃあ緑谷、今日中に代役立てておけ。お前が任せられる、信じても良いやつにな」

相澤消太がいい、ホームルームは終わる。

緑谷出久が辞退する理由は他の生徒たちにも刺さり、俺を学級委員にしろと殺到する者はいなかった。

\*

そして飯田くんが非常口マークになった。

\*

「学級委員には飯田くんが良いと思います！ ……事実、僕は最初飯田くんに投票しましたし」

最初から緑谷出久は学級委員になるつもりはなかった。

そしてわずか数日の付き合いではあるが、飯田天哉が誠実な人間であることは理解していたし、飯田天哉ならば信頼して安心して任せられると思っていた。

そして本日。食堂にて非常口マークに擬態して見せた飯田天哉はまさに喋る非常口マーク。卒業後もこれで食っていけるであろう才能を感じさせ、非常口マークこそが飯田天哉の天職であると考えられた。

食堂の非常口マークだからなおさら、すぐそこで食っていける。

あの光景には緑谷出久もケンタツキーフライドチキンを食べる手を止めたものだ。

それだけ人の心を動かしたのだから、飯田天哉には非常口の天性の才——緊急時に人をまとめる才があると判断したのだ。

「あ！ 良いんじゃないね!! 非常口飯田なら大丈夫夫!!」

「うん！ 大丈夫夫!! いいぞガンバレ非常口！」

「大丈夫夫!! 飯田くんならどんな非常時も非常口になってくれる気

がする！」

——こうして、飯田くんが委員長になったっていう話。

その事件のきっかけは、雄英のセキュリティ導入校門が破壊されたことだ。

そこからマスコミが進入して警報が鳴り響き、校内は混乱の嵐となった、という拍子抜けするような話。

笑い話になってしまいうような、あつけない顛末。

——この事件は後に起こる大事件の始まりだったんだけど、この時の僕らには知る由もなかったんだ。

\*

数日後。多少は親睦を深めた1―A一行は、ヒーロー基礎学にて人命救助訓練をするための移動でバスに乗っていた。

「私思ったことを何でも言っちゃおうの緑谷ちゃん」

「あ!! ハイ蛙吹さん!!」

「梅雨ちゃんと呼んで」

隣に座る蛙吹梅雨。個性は『蛙』。彼女曰く蛙っぽいことは大抵できる。個性の影響か、どこか蛙のような雰囲気を持った少女だ。

「あなたの『個性』、スマホアプリのガチャに似てる」  
「!!?」

緑谷出久は面食らう。

せっかく発言した自分の個性が、ゲームの要素の一つに揶揄されてしまうのは心外だった。

「そそそそ、そうかな!? で、でも僕は生身の人間だよ!? ま、まさかゲ、ゲームのガチャと一緒になわけな」

「待てよ梅雨ちゃん。ガチャは一日一回じゃねえぞ。課金すりや何回でも引ける。似て非なるアレだぜ」

「似てるのは否定してくれないの!?!」

どこか必死に否定する緑谷出久へ、切島鋭児郎が口を挟んだ。

「しかしやつぱすげえな緑谷。あれ毎日変わる個性を即興で使ってるんだろ？ 爆豪との対決は自分の物にしてたじゃねえか！」

「あれは……。でも結局は僕一人の力じゃない。麗日さんと、それにかつちゃんや僕の意図を見破ったからこそ勝てたんだし……」

「なんだそりや。そうだ、今日の個性ってなんなんだ？」

その問いに――突如、緑谷出久の『個性』の悩みが、現実として突きつけられる。

「……今日はまだ、わかんないんだ。ほら、ケンタツキーフライドチキンを早食いする個性だったらケンタツキーフライドチキンを食べるまでわかんないし！ ただのフライドチキンじゃ判別できないし!!」

「そうだな……。どんな個性か自分でもわかんないんじゃない……」

「うん。そういう意味じゃやっぱりみんなみたいに『自分』の個性が定まってる方が活かしやすいよ。僕のはその日限りだから個性を成長させることすらできないし――」

本日も飛べなかった緑谷出久は、事実上『無個性』同然。

気を紛らわすように話を逸らし、膨らませ、それからバス内の話題はそれぞれの『個性』に集中する。

「蛙吹さんの個性って今は何ができるの？」

「ケロ。水中の行動と、舌を20メートル、壁に張り付いたり、跳んだり毒を分泌したりかしらあと胃を出して洗ったりできるわ」

「おお！ 本当に『蛙』だ！ じゃあ大きく鳴いて音の攻撃……いや、蛙が大きく鳴くのは求愛行動でオス特有の行動だったと思うから、蛙吹さんはできないのか……。でも意志疎通ならワンチャン……」

蛙は皮膚呼吸もできるんだっけ？ あとは……体色も緑から白ないし灰色くらいまで変えられたような。メラニン色素がどうこうだっけか」

「緑谷ちゃん……詳しいのね、ケロ」

心なしか嬉しそうな蛙吹梅雨。

「蛙は中学の授業でも触れてたからね、受験のときに興味本位で……。でもそういうのも『個性』研究に役立つんだなあ」

個性とは億兆というほぼ無数の可能性がある。だから、どんなもの

だってありえるのだ。日常の何気ない雑学が個性を追求していくヒントになる。

全てが無駄にならない。その億兆の可能性を秘めたのが緑谷出久の個性であり、彼の蓄えた知識が全て力に変わるのだ。

ケンタツキーフライドチキンには部位によって名前があり、

手羽が『ウイング』。

胸が『キール』。

肋が『リブ』。

腰が『サイ』。

脚が『ドラム』。

この知識だって『鳥』に関係する個性への備えになるかもしれない。ケンタツキーの創始者である『カーネル・サンダース』の『カーネル』な名前ではなく名譽による称号というのも忘れちゃいけない。

尊敬すべき偉人の本名は『ハーランド・サンダース』。

きつと、役に立つ。

「いやそれは立たないと思うぜ」

「うるさい！」

閑話休題。

「ところで気になってたんだけど、葉隠さんって『透明人間』の個性？

それとも『透明化』の個性？」

「私!? 私は常時発動の異形系だよ！」

「やっぱり! ということは相澤先生にも無効化されないってことだけだ。なおさら隠密行動に向いてるぞ……ちなみに服は透けないみただけで、食べたものは透けてるみたいだね。ということは小物程度なら口に入れて運んだり……問題は熱感知と液体をかけられたときか……足音も消せないし。いやいや見えないのはそれだけで戦闘に生かせる。ただ装備がな……まあ単純に格闘技能をつけて『見えない格闘家』っていうのも普通に強いかもしれない。髪の毛って抜いたら透明化消えるかな? 消えなければ髪の毛の繊維で服を造れば……いや! 大きい布を造ればなんでも透明化……?」

「わあ、本当にどんな個性でも使い方考えるんだ!」

到着したのはUSJ。スペースヒーロー『13号』がつくった、災害における人命救助訓練施設。

正式名称は『ウソの災害や事故ルーム』。

創設当初から「不謹慎だ」「本当に災害にあつた人への冒瀆だ」「津波だけでも取り壊せ」「某アミューズメントパークと略称が被っている。これは業務妨害だ」と批判の声が絶えない日々付きの施設だ。

「えー、始める前にお小言を一つ二つ……三つ……四つ——1000000つ」

(急に桁が変わった……)

13号の小言。

「みなさんご存じだとは思いますが、僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます。僕はこれを救助に使っていますが——これは簡単に人を殺せる力です。

皆の中にもそういう『個性』がいるでしょう。この授業では、そんな『個性』をどう活用すれば人命救助に役立てることができるかを学ぶものです。

君たちの力は決して、人を傷つける為のものではない、救けるためのものだと心得て貰います」

(……そうだ)

緑谷出久、彼は無数の可能性のある個性であり、その性質上、使えない個性、応用の利く個性が発現することがあれば、時として危険性のある個性に巡り合わせてしまうこともあるだろう。

もしそのとき、自分の個性が原因で人を傷付けることになってしまえば、取り返しの付かないことになってしまいかもしれない。

ヒーローを目指す自分が、敵になってしまふのかもしれない。

そんな——可能性も、重々にあるのだ。

(そんなときのためにも、僕は備えておかなきゃいけない)

個性を活かし力にするだけでなく、個性を制御し抑制する必要があるということも、忘れてはいけないのだ。

13号の語りに気づかさせられる。

敵を倒すことがヒーローの真髄ではない。人を救うことが、ヒーローの本来の目的。

(やること……いっばいだ……!!)

緑谷出久が浮かべたのは笑みだった。

そのとき――

「かたまりになって動くな!!」

――相澤消太が叫んだ。

次の瞬間、何もなかった空間に闇が現れ、そこから不気味な形相の人間が姿を見せた。

「13号!! 生徒を守れ。あれは――敵だ!!!」

個性が人を傷つける為のものではないと、確認した矢先に。個性で人を傷つける者『敵』は、現実として去来した。

「どこだよ……せつかくこんなに、大衆引き連れてきたのにさ……オールマイト……平和の象徴……いないなんて……」

――そして、起きる。

――覚えているかな? 飯田くんが非常口になった時に書いた――

――『後に起きる大事件』。

「子どもを殺せば来るのかな?」

## No. 6 ゲームオーバー

突如現実として去来した敵。

担任教師の相澤消太の指示通り一かたまりになった生徒たちを襲ったのは、敵が現れたときと同様の闇であった。

闇は生徒達の大多数を飲み込み――

――そして緑谷出久が放り出されたのは、山岳ゾーン。

の、上空!!

「――ああああああ!!」

高さにして緑谷出久の住むマンション屋上かそれ以上。初めは遠く見えた地面が、あつという間に距離を縮めていく。

(なんだコレ!? なんだコレ!!?)

過ぎるのは死のイメージ。

緑谷出久をこの場に移動させたのは敵の個性『ワープ』。その個性においてもつとも効率的な攻撃手段の一つが、この落下死である。

方法は簡単、とにかく地面より高い位置にワープさせるだけ、という単純明快。――ちなみに他の手段としては、爆弾を対象の近くに送りつけるというのがある。

皮肉にも、人の命を救うという授業に対し、敵という人を傷つける者が現れた。そして早々にして、緑谷出久はその命を散らそうとしていた。

(――こんな! こんなあつけなく! ……いやだ!!)

心の内にて叫んだそのとき。

「掴まれ!!」

誰かの声があった。緑谷出久は必死にその声へ手を伸ばし――差し出されたものを掴んだ。

それはテープ。

「君は――!!」

声の主はクラスメイト、瀬呂範太であった。

瀬呂範太。個性『テープ』。両肘のロールから片面が粘着質のテー



プを射出し、巻き取ることのできる個性だ。

幸運か、緑谷出久たちが放り出されたのは高台のすぐ横だった。瀬呂範太は片肘のテープを高台に張り付け、もう一方を緑谷出久へ伸ばしたのだ。

テープを掴み、安心感を得る緑谷出久だったが、そばでもう一人の少女が重力のまま落ちていくところだった。

「お……ええ、ええ……っ!？」

「耳郎さん!! 手!!」

「——み、緑谷!？」

少女の名は耳郎響香。同じクラスメイトであると判別するなり、緑谷出久は咄嗟に手を伸ばした。

無事、耳郎響香の手を掴むことができた緑谷出久。

瀬呂範太はテープを巻き取ると、高台の上まで全員を引き上げた。

——ここで命を落とすことがなかったのは、今の緑谷出久にとって幸か不幸か。

「ふう。ありがとう瀬呂くん！」

「おうよ!! こないだ緑谷が言ってた使い方だぜ! 地獄からの死者——」

「助かったよ……えつと、緑谷と、瀬呂」

緑谷出久に続いて耳郎響香が礼を言う。

「……多分敵の仕業だよ。あの黒い靄、敵もそこから出てきたし、物質を移動させる『個性』……」

「ったくよ! 落ちる横に崖があったからテープを張り付けられたんだけど、どうせなら最初から崖の上に飛ばしてくれよ!!」

「まあ、だから敵なんだし……」

敵。突如現れたその存在に緑谷出久はどこか引っかかりを覚える。

「本当に、敵なのかな……?」

「何言ってるんだよ緑谷。相澤先生も言ってた。それに——オールマイトを消すとか、なんとか」

「……」

突然の事態すぎて理解が追いつかない。

実技訓練が始まろうとしていたところでもあり、そういうシチュエーションの訓練ではないのかと、勘ぐってしまうのだ。

本当に、敵なのか。その疑いは残念ながら、逃避に分類されるもの。訓練であつて欲しい。敵の襲撃も災害の一部だと、そういう訓練であつて欲しい。また合理的虚偽であつて欲しい。

そんな、逃避。

緑谷出久の疑念が逃避でしかないことを裏付けるように、

「……!!」

何者かが、こちらへと迫つてきていた。身の丈ほどの大剣を構えた大男。大男は走る勢いのまま振るつた。混乱した頭ながらも、緑谷出久は紙一重に交わす。

剣閃が地を抉つた。その攻撃は明らかに、命を奪うものだった。

「訓練だと思いたいけど——どう見ても、敵だよ緑谷……!!」

耳郎響香が言った。言葉にしたことによつて、緊迫が現実として突きつけられる。

敵が大剣を持ち上げた。こちらへ向けられるは殺気。その男が敵であることは間違いなかった。

——それだけではない、男の他にも、敵が集まってきた。

そして彼らは実際に、こちらに個性を向け、そして戦いを始めようとしている。

「戦うしかない……みたいだね……!」

「ああ……!!」

(嘘だろ!?! まだヒーロー科の一年目だぞ!!? 本当に——)

耳郎響香と瀬呂範太が身構えた。緑谷出久は——まだ、身体より頭で考えてしまう。

(何で……何で……。敵の目的はオールマイト……? オールマイトを消す——殺す!?! そんなこと——)

緑谷出久は困惑する。

初めて面と向かつて対峙する、本物の敵の存在に。

そしてその目的が、自分がヒーローに憧れたきっかけ、目標である生ける伝説『オールマイト』を消そうというものであり、その動きに

自分が巻き込まれているということに。

「いやでも、まさかオールマイトに勝てる敵がいるわけ……」

「緑谷！ 今はそれどころじゃない。それは一端置いて後にしよう――」

耳郎響香の声が緑谷出久の思考を打ち切る。緑谷出久の視界の先では、敵が大剣を振り上げていた。

「――っ!？」

どう動けばいい。敵の武器は大きく、避ければ他の仲間当たるだろう。かと言って、受け止められる重量じゃないことは先の一撃で明白だ。

そして何より、身体が、動かない。

動揺を重ねる緑谷出久の脇を、何かが伸びた。

それは敵に突き刺さり、何かの衝撃を与えその場に崩れさせた。

「ほら、ボサっとしてないでさー」

「……ごめん、ありがとう……っ」

耳郎響香だった。個性『イヤホンジャック』。耳たぶから伸びるプラグから体内の音を衝撃波として放つことができる個性。

緑谷出久の脇を伸びたのはコード。相手に直接突き刺し、衝撃を直に流し込んだのだ。

「なるほど……面白い個性だ。挿したものの音を聴いたり、逆に流し込んだり。……そのブーツはまさかスピーカー!? イヤホンの音を空気中に放てるのか! なるほど、音の波状攻撃、広範囲を攻められる技だ。欠点は波状だから密集した今じゃ僕らも巻き込まれる……でも高音低音にできるとしたら用途は増えるぞ。だって音を放つって事は空気を振動させるってことだから、自由に音程をいじれば物を動かすことだって……」

「この状況で咄嗟にそこまで分析できるのはすごいけど! 今本当そういうのいいから!!」

現実に戻される。だが、緑谷出久の思考の大半を占めたのは個性に対する探求心。

恐怖は薄らぎ、気分は不思議と昂揚していた。

「ありがとう耳郎さん……っ！」

ここでようやく、緑谷出久は身構えることができる。

普段の自分、個性について考えるなり没頭してしまうという、癖のようなものが良い方向に働いたのだった。

身体中に意識を集中する。

別段、沸き上がるものや違和感はない。

(……ダメか。あの高さなら発現してもいいと思ったんだけどな……)

あてにしようとしていたのは、自身の個性の発動。高所からの落下というのが条件ならばクリアしたはずなのだが——途中で減速したのがあだとなったか、緑谷出久の思惑は外れ、個性らしきものは感じられなかった。

(感覚じゃわからない個性って可能性もあるけど……でも！今は『個性』に頼るんじゃダメだ……！)

次に緑谷出久が知識から引き出すのは、体術について。使い勝手の悪い個性のときに備えて調べ、考案した接近戦の戦法。

先日の訓練にて爆豪勝己を相手にその片鱗を見せたが——しかし今回は違う。訓練ではなく、敵相手に容赦なく行う実践用の動き。

——この一ヶ月、入学が決まってからずっと思い描いてきた、無個性でもできる対敵用の戦い方。

(成果を今、出すとき!!)

緑谷出久はまっすぐに、敵を見据えた。

\*

「——この状況で咄嗟にそこまで分析できるのはすごいけど！今本当そういうのいいから!!」

いきなり個性の考察を始めた緑谷出久へ、耳郎響香は抗議の声をあげた。

すごい。この一瞬で理解し、用途まであげてくるのは本当にすごい。けれど、今は止めて欲しい。

切実に、耳郎響香はそう思った。

「ありがとう耳郎さん……っ！」

そう礼を言うなり——緑谷出久の雰囲気が変わった。

先まで迷いしかなかった表情が、今でははつきりと敵を睨み臨戦態勢に入っていた。

「緑谷あんた——」

言葉を遮るように、新たな敵がこちらへ駆けた。どう対処すればいいか、耳郎響香は個性である、耳たぶから伸びるコードを構えるのだが、それより早く緑谷出久が踏み出していった。

緑谷出久は何かの武術でも連想させるような俊敏な動きで敵に近づき、その懐に手を伸ばした。

直後——敵は僅かに痙攣したかと思うと、膝をついた。

「緑谷、それ……」

瀬呂範太が緑谷出久の手を示す。いや、正確には手でなく、その手に握られたもの。

耳郎響香も気付く。

「緑谷それ——スタンガン!!」

そう彼の手に握られていたのは、まごうことなき非殺傷性個人携行兵器、スタンガンであった。

非殺傷であればゴム弾でもスタンガンということがあるが、この場合のスタンガンは一般のイメージどおりに電気をを用いるものだ。

「あんたなんでそんなの持って……」

「これ? 一応学校のコスチュームの一部として支給された中に入ってたんだ」

そういえば、緑谷出久は先日の実技訓練とは違うコスチュームを身にまとっていた。以前はいかにもヒーロー然——というかオールマイトの色違いおいう痛々しいものであったが、今回は学校に支給された、地味だが身軽そうなもの。その腰に撒かれたベルトにはいくつかのポーチが付けられており、何かを携帯しているのはまあ、わかる。

それが、スタンガンであるとは。

「あと火薬とか……サバイバルナイフとか……非常食のケンタツキーフライドチキンとか……使えそうな物は一通り要望に書いておいたから」

ある種の脱帽を感じる。それらの物品は『個性』を持っていれば軽視してしまうもの。超常を身に宿すからこそ、蔑ろにしてしまう普通の武器。

『個性』が定まっていない緑谷出久だからこそ、用意できたものだ。

「……」

耳郎響香が口を閉じると、瀬呂範太が緑谷出久の肩を揺さぶり、

「——いやいや！ スタンガンもそうだけどよ、今の動きなんだよ!？」

爆豪戦でも思ったけど、お前なんか武術でもやってんの!？」

「ううん。でも使えそうな動きは取り込んで——」

耳郎響香が呆気にとられ、緑谷出久と瀬呂範太が会話する間にも敵は集まり、気付けば周囲を囲まれていた。

「げ、こいつら何、全員敵ってわけ……?」

それぞれが、敵と距離を離そうとする。囲まれている状況でのそれはつまり、中心に寄るということで、逃げ場を失うということであった。

背中も付きそうな距離、耳郎響香は小声で囁く。

「ねえ緑谷、あんたの今日の個性って、何……?」

「……ごめん、まだわかんないんだ」

内心で舌打ち。可能性が一つ減る。

圧倒的に敵が多い中、正直に戦うのは愚策であった。

何か派手な個性で牽制できれば御の字、切り抜けられれば最良といったところ。この場で一番不確定な緑谷出久の個性に期待してみたが、しかし期待はずれ。一人の個性分可能性が減ったのだった。

——と。耳郎響香はこのとき緑谷出久をあなどっていた。ほぼ『無個性』であるゆえの軽視。しかし『無個性』であるがゆえに生まれる緑谷出久の思考を、あなどっていた。

考えれば考えるほどに危機感は肥大化し、嫌な汗の滲む中、彼は言った。

「ねえ瀬呂くん、耳郎さん。作戦があるんだけど、いいかな?」

緑谷出久が短く伝えると、耳郎響香は頷いた。瀬呂範太もまた同意を見せた。

じゃあいくよ。そう呟いた緑谷出久は、悪人のような表情をつくり、

「——クツソがああ!! もうこうなったらヤケだ!! 俺もろとも爆死しやがれえええ!! ああああああ!!」

やら演技がかった叫びを上げながら、緑谷出久が投げたのは球体。導火線に火の点いた、球体。

「これは——爆弾!!」

「マジか!! このガキやりやがった!!」

敵の一団がどよめく。

爆弾。そう称された球から吹き出たのは、煙。

「今だ耳郎さん!」

「了解!」

耳郎響香はプラグを地面に突き刺すと、最大出力で衝撃を放つ。

ここは山岳地帯。それも見ようでは崖とも言えるような場所。とてもじゃないが、地盤がしっかりできているとは言い難い。

3人を中心に、地面に亀裂が入っていく。

その周りには敵が集まっているのだ。その重みに絶えきれず、場は崩壊する。

「瀬呂くん!!」

「おうよ!」

地面が崩れ落ちていく中、瀬呂範太が崖のまだ無事な部分へテープを張り付ける。この山岳ゾーンに放り出されたときと同様にして、耳郎響香たちは落下を免れる。

「よかった、うまくいった!」

崖の上に戻るなり、緑谷出久が腰を卸した。

この作戦を提案したのは緑谷出久だ。一度可能性から切り捨てた彼が、敵に囲まれた状況を打破する策を出し3人を窮地から脱出させてみせたのだった。

「やったな緑谷。煙玉なんて實際役に立つんだな!!」

「まああれはただのはったりだけどね……。敵の混乱を誘えばよかつただけだし、あとは足下を煙で覆うことで地面の倒壊を予想させるべくできたら……」

緑谷出久の語りは、まるで知識があふれ出しているように感じられた。

事実、緑谷出久は個性に対しても深い理解を見せ、すぐに応用まで考え出す。それは普段からそれ相応の用意があるからこそできる思考だ。

——個性『日替わり』。その個性を活かすためとはいえ、簡単にできることではないはずだ。

「緑谷あんた、すごいよ。見直した。正直、ウダウダ言ってるだけの男だと思ってたけど、よくあんなの一瞬で思いついたよ」

耳郎響香は半ば独り言のように言い、すぐによそを向いた。

\*

山岳ゾーンで敵を振りまいた緑谷出久たちは、この訓練の開始地点まで戻ってきた。

そこではオールマイトと異形の敵が怒濤の連打を繰り返しているところであつた。

異形の名を脳無。尋常でない筋力を持ちながら、衝撃を全て吸収するという規格外の怪人。

激しい攻防の末に、オールマイトは脳無を吹き飛ばし無力化することに成功する。

オールマイトはボロボロになりながらも迫力を損なうことなく、勇猛にも敵を挑発する。

敵は幾ばくか迷う素振りを見せたあと、あろうことか戦闘を続けることを選んだ。

敵も愚かだと、その場の誰もが似たようなことを思ったはずだ。平和の象徴は負けない。必ず敵を打ち破り、正義を貫くと。

その場の全員が疑わなかつた——



——ただ一人、緑谷出久を除いて。

(笑って……ない?)

これまで長い間、憧れの姿を動画で見続けてきた彼には、それがどうしても不安でしかたなかった。

オールマイトは何時如何なるときでも笑みを絶やすことはなかった。どんな災害にも、無敵の笑みを浮かべ人々を救った。

どんな敵に対しても、戦いの後には笑っていた。

しかし——そのときばかりは、その光景がイメージできなかった。過ぎるは、不安。根拠のない、不安。

嫌な、予感。

そのとき——

——考えるより先に、体が動いていた。

誰もが見守る中、緑谷出久だけは飛び出していた。

普通の少年の、普通の実力の走りだ。

だが誰も、止めることができなかった。絶対のヒーロー、オールマイトの戦闘に横やりを入れるなど、あまりにもそれは異質であり、誰もが理解できずただ見ていることしかできなかった。

現れる闇。迫る敵。動かないオールマイト。割り込む、緑谷出久。

「——なんだ、お前」

敵の大将と、目が合う。

「ただの子どもが、邪魔するな」

そして、死柄木弔の手が、緑谷出久の首に触れた——。

## No. 7 正義（オールマイト）

オールマイトが駆けつけたときにはすでに、レーザーヘッドと13号という二人のプロヒーローが戦闘不能の傷を負わされていた。

生徒は大きな傷こそないものの、恐怖を与えられたことに変わりはない。

『平和の象徴』ことオールマイトは、憤りを感じずにはいられなかった。

それは敵にか、いやそれだけじゃない、生徒の危機に居合わせない自分への苛立ちでもあった。

オールマイトは全力で拳を振るった。手刀で薙いだ。しかし――

――オールマイトへあてがわれた敵は、それらを受けつけることはなかった。

怪人――改人『脳無』。異形のそれはオールマイトの攻撃を受けようとも、微塵たりともダメージを負う様子はなかった。

激しい拳の応酬が続く、平和の象徴と、それを破壊しようという者の戦いは激化していった。

オールマイトは通勤時に本日の活動限界を迎えていた。しかし、まだ確かに身に宿っている『ワン・フォー・オール』を信じ、全力で力を使い続けた。

そこへ周囲の生徒が介入する余地はなく、結局、彼は一人で戦い続けた。

限界まで打ち合った末に、オールマイトは最後の力を振り絞り、限界を越えた力で脳無を吹き飛ばし、無力化することに成功する。

しかし――ならば初めから、限界を越えていけばよかったものの。

限界を感じてこそ限界を越えるという選択肢が出るというものだが、それでも初めから限界を越えておくべきだったと言わざるを得ない。

――オールマイト自身が、そう思わざるを得ない状況が、このあと訪れる。

力を出し切ったゆえに動かない身体。

これ以上戦闘を続けられれば、全力を出す前にはトウルーフオームに戻ってしまうだろう。

敵の首謀者はまだ動ける状態だ。オールマイトは敵に引かせるために虚勢を張るが、意に反し敵はこちらへ踏み出した。

敵の首謀者、死柄木弔。

触れた者を『崩壊』させるという、恐ろしい個性の持ち主だ。そしてその側近である黒霧は『ワープ』という個性の中でも極めて特異かつ強力な個性。

どこから襲いくるかわからない破壊の手、という脅威がオールマイトを襲おうとしていた。

そこへ、ある者が横やりを入れた。

ある生徒が、割り込んだ。

平和の象徴と、それを破壊しようという敵。その間に——ただの生徒、緑谷出久が割り込んだのだった。

オールマイトへ向けられるはずだった死柄木弔の手は、緑谷出久の首に触れ——

——緑谷出久の頭が、地に転がった。

それまで言葉を発することなく、ただ傍観していたのみだった生徒から、悲鳴があがった。

\*

闇。

真つ暗な世界。

それは死後の世界か、あるいは全てが消えゆく無なのか。

緑谷出久はただ力なく、漂うだけだった。

漂っているのかさえわからない。

ただ緑谷出久はそこにあつたとも言えた。

右も左も、上も下もわからない闇の中で、緑谷出久は想う。

まだ死にたくない。まだ僕はヒーローになっていないと。暗い闇が応えるように、光を差し出した。

諦めきれないのだろうか？　まだ終われないのだろうか？

そう問いかけるように。

……、  
……。

\*

「どうだ平和の象徴……目の前で子どもを殺された気分は……？」

死柄木弔は嘲るように言う。

オールマイトは、静かにこちらを睨んだ。怒りを全面に押し出した顔。絶望とは違った反応だが、その怒りの源にあるのは絶望に変わりはしないはずだ。

まず一矢は報いたと、どこか勝ち誇る死柄木弔のすぐ横で――

――緑谷出久は起きあがった。

「……は？」

死柄木弔の口から間の抜けた声が漏れた。

「へ……？」

答えるように、緑谷出久が間抜けな声を出した。

動こうとしていたオールマイトに間が空いた。

緑谷出久、五体満足でそこにあり。解体マジックに失敗したのと同然だった体と首はいつの間にか繋がっており、何事もなかったかのように起きあがった。

緑谷出久の安否に対し、喜びの声も憤りの声も上がるなかった。

その場にはただ、沈黙があった。

戸惑い。おまえさつき死んだやん、と。誰もが啞然とするしかなかった。

そんな中、静寂を切り裂いたのは銃声だった。

死柄木弔の腕に銃弾が突き刺さる。

射線の先には、立ち並ぶプロヒーローたちがいた。軽く見積もっても、容易に勝てる相手ではない。

混乱する中、死柄木弔が選んだのは撤退だった。

「つてえ……」

黒霧の『ワープ』の個性で逃げおおせた死柄木弔は、横たわったままぼやく。

「両腕両脚撃たれた……完敗だ……。脳無もやられた……。平和の象徴は健在だった……！ 話が違うぞ先生……」

先生。そう呼ばれた男は、音声のみで否定した。見通しが甘いと。それだけ告げた。

「そうだ……あんなの聞いてないぞ……。あの子ども、『不死身』の個性かよ……？」

あるいは、『超再生』か。

死柄木弔の脳裏に浮かぶのは、確かに首を崩したはずの少年、緑谷出久だった。

\*

「1-Aクラス委員長飯田天哉!! ただいま戻りました!!!」

声を張り上げたのは名乗りのとおり飯田天哉。一人この場から脱出し、救援を呼び戻ってきたのだ。

雄英に所属する教師——ヒーローたちが立ち並ぶ。

「……さ、さすが非常口!」

「飯田!! お前こそ俺らの非常口だぜ!!」

謎の気まずさを振り払うように生徒たちが沸き立った。

そして勝ち目がないと見たか、敵は撤退。こうしてウソの災害や事故ルームを襲った敵——敵連合との最初の戦いは幕を閉じた。

「16……17……18……。よし、全員無事か……!」

刑事である塚内直正が生徒を数え、頷いた。

ヒーロー科とはいえ、生徒が敵と対して負傷者ゼロというのは褒めるべきことだろう。

オールマイトはいつものように笑うものの、しかし釈然としなかった。

(全員無事と……言えるのか……?)

彼の視界の先では、緑谷出久と学友が会話をしている。

「緑谷、お前さっき……」

「ああ、うん。そのことなんだけど……今日の個性、みたいだね。正直取れたときも自分でもわかってなくて……『頭がとれる』個性、かな？ 本当——よくわからない個性だよ……今日は」

「なんだよそれ!! ちよつと取ってみてくれよ」

「不謹慎よ……」

本当に何事もなかったような素振りだ。

だがオールマイトは見ている。目の前で、首を崩壊させられた緑谷出久を。転がり落ちる頭を。

「緑谷少年、少し話をしないか?」

雄英に着くなり、オールマイトは緑谷出久を引き留めた。

雄英の一室。一対一でオールマイトと緑谷出久は向き合う。

「助かった——と私は君に礼を言わねばならない。今日は午前中からいくつか事件解決に回っていてね、実は学校に出勤したのが午後なんだ!!」

その上での脳無といったか——。私もいくらか消耗していてね、あのまま戦闘が続いていれば厳しいものがあつた!」

「そそそそつそんな!! でもさすがオールマイト!! 事務所の活動を停止してるのに事件に向かうなんて! そうだ! あのせつかくの機会だからササ、サインを……!! 僕あなたのファンで——」

緊張と興奮が入り交じったような緑谷出久の様子に、オールマイトは豪快に笑ってみせる。

いつも大衆の前で示す笑顔だ。

そしてそれを潜め、やや声のトーンを落として。

「君は今日、あの状況でどうして飛び出したんだい?」

あくまで明るいまま。しかし、真面目に問う。

「……っ。ごめんなさいオールマイト。あなたの邪魔を——」

「いや違うんだ。責めているんじゃない。……だが確かに無謀ではあった。君の今日の個性が君を——私を救ったわけだが、しかし相手の個性に君の個性が通用しなければ君は本当に死んでいた」

『首がとれる』と、緑谷出久は候補に上げていた。しかし首がとれる前に頭を触られていたり、とれた後に身体を触られていたら取り返しがつかなかっただろう。

「だからこそ、聞いておきたい。なぜあのとき——緑谷少年。君は飛び出したんだ？ あのとき、私と敵の間に入り込もうとする生徒はいなかった。入り込める生徒はいなかったんだ」

「わから、ないです。ただ、必死で。あのとき、あなたの顔が笑ってなかったから……気づいたときには、飛び出して——」

「——!!」

その答えに、オールマイトは戦慄する。

オールマイトは、この社会における平和の象徴であり、絶対のヒーローだ。世間は彼の敗北を認めないだろうし、予期すらしらない。

今日だってそうだ、オールマイトの到着に場の生徒は安心した素振りをした。

戦闘に加わろうとしなかったのも、絶対彼ならば勝つという信頼があったというのもあるのだろう。

しかし、目の前の少年は、オールマイトを案じて動いたという。

(私が、信用できなかつたからか?)

オールマイトは首を振る。緑谷出久は自分のファンを名乗ったばかりではないか。

ならば——

(——私が笑ってなかつたから? 私の危機を——察したから?)

つまり——助けを求めていると、察したから。

助けを必要としている人を感じとり、すぐさま飛び出したのだ。

「……そうか。君もそうなのか……」

「？」

「今日は本当に助かった。でもだからと言って、自分から命を投げ出すようなマネはしないで欲しい。——君はきつと、いいヒーローになる」

「！……はいっ！」

そう締めくくって、緑谷出久を帰す。

オールマイトは一人部屋に佇み、今日の出来事を思い返す。

緑谷出久。彼は今日、確かに死んでいた。死柄木弔に触れられ、首を崩壊させていた。しかし、緑谷出久は生きている。

そこに『個性』が関わっているのは間違いないが、それは『首がとれる』ではないだろう。

謎の多い個性だ。その個性への言及もしたかったが、それよりも大事なことを、緑谷出久は語った。

(『考えるより先に体が動いていた』……か)

トップヒーローの多くが、学生時の逸話と結びつける言葉だ。

それと同じ理由で、あろうことかトップヒーローであるオールマイトを助けようとした少年。

緑谷出久もまた、それを動機とした。

不意にドアが開き、誰かが入ってきた。

「……オールマイト、久しぶり！」

「！ 塚内くん!!」

その人物は塚内直正。今回の襲撃に駆けつけた刑事であり、オールマイトの友人でもある。

塚内直正は、生徒が軽傷者数名、教師二人が命に別状なしと語った。「三人のヒーローが身を挺していなければ、生徒らも無事じゃあいら

れなかっただろうな」

「そうか……しかし、一つ違うぜ塚内くん。生徒らもまた戦い、身を挺した!!」

敵も馬鹿なことをした!! 1-Aは強いヒーローになるぞ!!」

オールマイトの宣言に、塚内直正は頷いた。そして問う。



「——君の後継者は、この中にいそうかい？」

君が教師になると決めたのは、新しく入ってくる一年生も見極めるため、だっただろう？」

「……ああ」

オールマイトは——八木俊典は、先ほど相まで話していた少年を思い浮かべる。

個性『日替わり』という謎多き少年だ。おそらくは、今日の『頭が取れる』個性は嘘である。崩れる様を直に見ていたオールマイトにそれを信じることはできなかった。

真意の知れない少年。それでも、ヒーローに必要なものを持っているのには違いない。

緑谷出久。『ワン・フォー・オール』の後継者候補としてその名を連ねた瞬間だった。

「——あの、すいません、きっきのその……サインを貰えればと」

突如開かれたドア。オールマイトへ、ノートを持って戻ってきた緑谷出久が言った。

どんな神経をしているのか、真意が知れない少年だった。

\*

高ぶった気分で帰路についた緑谷出久。

敵の襲撃があつたにしては異様に明るい。疲労のせいやや身体が重いのも、まるで気にならない。

それもそのはず、今日彼は憧れのヒーローオールマイトと二人きりで話す機会を設けられ、その場で「いいヒーローになる」と太鼓判を押して貰えたのだ。それがたとえ社交辞令のものだったとしても、緑谷出久は喜びへと変換するであろう。

十年以上、ヒーローになれないと思っていた彼が。自分の力でたどり着いたこの場所で、憧れの人物に肯定してもらえたのだから。

それに、直筆のサイン（『出久少年へ』の文字付き）まで手元にあるのだ。

有頂天にうっきうきの彼は道すがらケンタツキーフライドチキン

を購入し、そのまま普通に帰宅し、普通に食事を終え、普通に就寝しようとしていた。

風呂上がりに何気なく体重計に乗り150kgと表示されるまで、普通だった。

「……!?」

150kg。およそ緑谷出久三人分の重さだ。

機械の故障を疑うが、思えば身体が重い。

（太ったとか、筋肉がついたとか、そういうわけじゃない。機械の故障でもなければ、ケンタッキーフライドチキンの食べ過ぎでもない——）

そこで緑谷出久が思い至るのは、一つしかなかった。

「まさかー」

意識すればするほど重く気怠い身体を、半ば引きずりながらマンションから降りる。

辺りに誰もいないのを確認すると、地面へ足を勢いよく落とす。

するとコンクリートが砕け、緑谷出久の足が僅かにめり込んだ。

「体重が、重くなってるんだ……」

その行き着くところはつまり個性。今日の個性が、体重の増加に係ると言えた。

試行錯誤すること数十分、重さは身体の部位ごとで調整できることに気づく。言ってみれば『体重を調整する』個性。

初めはただ重いのみ。クソナード三人分の体重というだけだったが、意識すれば二人分や一人分と変動できることがわかった。体重を倍化させる、それが緑谷出久の今日の個性だった。

それに行き着いて、緑谷出久は言葉を失う。

今日。彼は高所から落ちた。それが『日替わり』——『ワンチャンダイブ』の発動条件だと、緑谷出久は思っていた。

飛び降りたことによる精神状態の変化が個性を生み出すと、とりあえず仮定していた。

しかし——思い出す。今日高所から落ちたのは。一度のみ。その際緑谷出久は瀬呂範太によって救われている。『テープ』を通じて、引

き上げられているのだ。

(体重が何倍になっている状況で引き上げた……？ そんなはずはない)

だから、この『個性』が発現したのはその後。地盤を崩した際の二度目の落下は大した高さを移動してないのでまずないはずだ。

それ以外に、特筆できるきっかけがあるとすれば――

初めに思い浮かんだのは、歓喜。オールマイトに応援の言葉を貰い舞い上がっていたこと。

しかし、今までと比べれば全く以て関連性のないものだ。

ならば。

「――死？」

呟いて、一気に恐怖が沸き上がった。

今日、特筆できる事柄と言えば。敵とオールマイトの戦いに割り込んだこと。

敵の首謀者に、触れられたこと。

頭が、落ちたこと。

「……!!」

あのとき。初め、緑谷出久は周囲が何を言っているのかわからなかった。頭が落ちただの、首が切れたただの言う周囲に緑谷出久は「わからない」としか返せなかった。マンションからであればもう落ちすぎているくらいなのだが、関係なかった。

頭が落ちたと言われても、自覚がなかったのだ。もしそれが無意識下に起こったことならば、それは『個性』と考えられるのが今の緑谷出久。

だから、『頭がとれる』個性とした。しかし、今緑谷出久が発現しているのは『体重の増加』。

頭は、自発的にとれてはいない――。

気づいてしまえば、すぐに全てが繋がった。

(あの日！ 僕に『日替わり』が発現したあの始まりの日！ 僕は死ぬ

ために飛び降りた。でも、死ななかった！)

それが、間違い。

(僕はあのとき、死んでたんだ……！)

階段から落ちたときもそう、実技試験も、身体測定も、戦闘訓練も

！ 僕は――)

――死んでたんだ。

翌日。襲撃の影響もあり、臨時休校。

休みであるのにも関わらず、緑谷出久の気が休まることはなかった。

深夜。緑谷出久が訪れたのは、とあるビルの屋上だった。

始まりの日。爆豪勝己の言葉を真に受け、身を投げた、始まりの場所。

一日中、考え事をしていた。

ケンタツキーフライドチキンも喉を通らないほどに、一つのことを考えていた。

個性『日替わり』。またの名を『ワンチャンダイブ』。

飛ぶことによつて個性を得るその個性の実体は、『死ぬことによつて個性を得る』個性だった。

それは、この世の理に反するものだ。

自らの命を対価に力を得る。

それは、生きとし生ける者全てを冒瀆する、倫理に反する個性だ。

そんなもの、人が持つていい個性じゃない。

憧れたヒーローとは真逆の力だ。ヒーローの掲げる正義や思想、イメージとは対極の力だ。

許されない力だ。

屋上の縁に立つ。

見下ろした街並みは小さく、夜の闇はまるでこちらを吸い込むかのようだ。

そこへ踏み出すことなど、到底できやしない。

できるはずがない。生きているのだから。

身体の震えが止まらなかった。この先に踏み出すことが、『個性』を得ることにイコールだとしても、わかっているにしても、実行できるはずがなかった。

そのとき——風が、吹き抜けた。

「あ」

緑谷出久の身体は、投げ出される。

瞬間的に死を直感する。

間違はなく死に至る高さだ。おそらく一度死んでいる高さだ。

人は死ななければいけない高さだ。

「ああああああ!!」

そして、意識が闇に飲まれる。

死。それは生きるものには避けられないもの。それは、死にゆく者には避けられないもの。

緑谷出久がこのまま死を受け入れられる人間ならば、死ぬことができただろう。

真つ暗な闇は緑谷出久の意識に問う。諦められないのだろうか。

死ねない理由があるのだろうか。為したいことがあるのだろうか。

緑谷出久は手を伸ばす。

それは彼にとって希望の光。

それは絶望の末にようやく見出す希望の光。

それは、絶望が生み出す希望の光。

「……っ!!」

緑谷出久は意識が戻るなり身を起こした。

そこはビルの下、人気のない路地裏である。

初め飛び降りた場所と同じ、路地裏である。

身体の内、力を感じる。それを、掌に集める。どこからともなく

光が集まり、緑谷出久の掌に球体を形取っていく。

今にも弾けそうなそれを、空に向かって放り投げる。

それはビルよりも高いところで爆発的に輝いて飛び散る。

真っ暗な夜空が、一瞬だけ真っ白に染まる。

このとき彼に発現したのは、『光を集める個性』。元無個性に発現した、個性。

——死ぬことで、個性を得る。

それは、決して正しいとは言えない力だ。

それでも、緑谷出久の、想いが為した力だ。

「——それでも僕は、ヒーローになるんだ……!!」

執念が、彼を立たせる。無念が、彼を呼び覚ます。

——これは、そんな彼がヒーローになる物語。真っ黒な闇を、真っ白な光へ。絶望を希望に変える物語である。

## No. 8 どういうことよ お茶子さん

緑谷出久の朝は早い。

早朝4時頃に起床。マンションの屋上へ向かう。そして一日一回のワンチャンダイブに身を捧げる。

それから小一時間ほど、自身に発現した『個性』の解析に努める。登校時間も早い。移動方法は足による走行。遠回りすることで調整し、毎朝数十キロのランニングを経て学校へ向かう。

授業が終われば個性の研究。クラスメイトの話を聞くのはもちろん、時には他クラスや上級生も訪ねる。ヒーローを目指す者の集う雄英だけあって、多種多様の『個性』の持ち主が在籍しているのだ。それを活用しないでどうしよう。

下校はもちろんランニング。ケンタツキーに寄るのは日課だ。

帰宅後も、『個性』を活かすための体力づくりや勉強。発現した『個性』についても、考えられる範囲の応用を試す。

場合によっては『無個性』同然になってしまう緑谷出久だ。これだけ必死でやらなければ、ヒーローにはなれない。

また、緑谷出久には『無個性』を理由に努力を放棄していた時期がある。その時間を取り戻すために、彼は人一倍の努力をしなければならぬのだ。

もう、努力しても意味のない『無個性』ではないのだから。

言い訳は、できない。

とまあ、ここ最近で特に。自分の追い込みを始めた緑谷出久だが、それには理由があった。

\*

時は遡り……：雄英高校、1—A教室。

「まだ戦いは終わってねえ」

満身創痍の相澤消太が言った。つまるところ、俺たちの戦いはまだこれからだ！ 未完！

というわけではなく。

「雄英体育祭が迫ってる！」

「クソ学校っぼいの来たあああ!!」

ということだった。

\*

雄英体育祭。それはクソ学校っぼいの。オリンピックが廃れた個性社会において、『かつてのオリンピック』に変わる大規模クソ学校っぼいの。全国のトップヒーローまでもがスカウト目的に訪れるクソ学校っぼいの。

クソ学校、っぼいの。

進路さえ左右するクソ学校っぼいのだ。もちろん緑谷出久にとっても重要なクソ学校っぼいの。なんとしても、いい成績を残さなくてはいけない。

クソ学校っぼいのはもう二週間後にまで現実として去来している。あまり時間はない。それまでに自身の個性の探求と、あらゆる個性への研究を進めなくてはいけない。

体力づくりもまた然り。

その日の放課後、緑谷出久たちは白いおじさんの元を訪れた。笑顔で迎えるおじさんは上から下まで余すところなく真っ白だ。黒尽くめならぬ白尽くめ。見た目は子供頭脳は大人な名探偵とは相反する真っ白。

それは異形系に非ず、それもおそらく、どんな個性も持っていない。しかしおじさんは個性がなろうと人々の笑顔を作り出すことができる。

緑谷出久にとって、彼はオールマイトと並ぶ巨匠だ。

彼の名はハーランド・サンダース。

そして緑谷出久が訪れたその場所はケンタッキー。

ケンタッキーフライドチキンには、ただのフライドチキンにはない魔法がかかっている。

外はカリカリ中はジューシー。溢れ出す肉汁に誰もが発狂――



「——キエエエ!!」

「ど、どうした緑谷!？」

「んあうん。……ああ。えっと、上鳴くんの個性は『帯電』だっけ。電気、いい個性だと思うけど……」

緑谷出久がケンタツキーを訪れた名目は、作戦会議。

体育祭に備え、クラスメイトとともに個性の応用について話し合おうというものだ。こちらは多種の個性を知ることができ、向こうには個性の応用を提案する。両者に得がある。

「いやそうでもねーんだって。俺のは『発電』じゃなくて『帯電』。纏うだけ。それも操るわけでもねえから、細かい電圧調整も思った場所に撃つとかのできねえんだよ」

話し相手は上鳴電気。個性について訪ねると、その欠点を打ち明けた。

「……それだと電気機器は使えないか」

「それだけじゃねー。使い過ぎると、その……ショートする」

「轟くんするのか……注意だね。じゃああまず使い方だけど、何かこう……金属チエーンみたいなのを武器にすればいいんじゃないかな。それに電気を流せば狙いはつくと思うよ。あくまで流すだけだから、むやみに放電するよりは節約できるはず……」

「お、いいじゃんそれ!! 電気なしでも武器になるし!」

「それからさっき言った電気機器だけど、コストチューム要望に電圧変換器みたいなのをつけられないかな? それなら自分で調整する必要ないし。どこでも電気が使えるって重要だと思う。電気を動力源にしてるものって多いから、下手に電気を撃つより安定するし用途も増える。家の電気製品だけでもバリエーションは多いでしょ。電気って機械を通せば光、熱、動力、音いろんなエネルギーに変換できるから、一口に電気だけじゃない。いつそパワードスーツみたいなのを使えば自分を動力源にできるわけだし……」

「お、おう……。そういうの、パツと出てくるってすごいよな……」

上鳴電気は圧倒された様子の後、どこか考える素振りを見せた。それを受け、緑谷出久は他のクラスメイトの方を向く。

「峰田くんの個性はなんだっけ？」

「……」

次なる話相手は峰田実。峰田実は無言のまま、頭から球体をもぎ取る。そしてテーブルに押しつけた。

「超くつつく。体調によっちゃ一日たつてもくつついたまま。オイラ自身にはくつつかずにプニプニ跳ねる」

「くつつく……！なるほど、粘着性のある球体か。瀬呂くんの『テープ』と同系……巻き取る使い方は使えないけど、球体だから粘着面積が広いのと、粘着力、分離する手軽さで差別化してく感じか……」

「……本当に馬鹿にしねーんだな」

「？　なんで。いい個性だよ。どういう原理でくつつくのかは知らないけど、取って地面に置くだけでもう罠になる。個性が相手に割れる前は奇襲に、割れた後は牽制に使える。上鳴くんにした話じゃないけど、ロープの先端につければ瀬呂くんと似たような使い方もできる。自分にくつつかないのを利用するなら、クッションみたいな用途でもいける……数が必要だけど。防がれやすい個性だけど、応用は効くし。というか戦闘に限らず、救助で見ても——」

「緑谷、おめえ……」

「あれ？　というかコレ危険な個性だぞ。敵の顔に張り付いたら呼吸困難になるんじゃない……。下手にその辺——車道とかに落としたら大惨事だ。電車の線路とか特に。ちなみにこのテーブルにくつつけたのはどうするの？　まさか取れないとか……」

「……」

店には一日程度で取れると説明して謝った。

「障子くんのも応用の効く個性だよね！」

「……そうだな。緑谷ならどう使う？」

障子目蔵。個性『複製腕』肩から生えた触手の先端に身体の部位を複製できる個性。

「やっぱり目や耳を複製して視覚情報、聴覚情報の収集が基本だよね。索敵に使える。腕を生やせば攻撃のリーチも伸びるし。触手全部か

ら腕を出して通信交換したみたいになれば相手を押さえ込むのにも使える。ちなみに複製っていうけど、痛覚ってどうなってるの？なければ強引な使い方でもいいわけだから、壁や無茶な攻撃も……いや無痛覚でもビジュアル的にマズいかな。障子くんはどう使ってる？その辺も参考に教えて貰えると……」

「いいぞ。俺の使い方を聞いた上でのお前の意見を聞いてみたい」

そんな流れで。真面目な会話の後に談笑もしつつ、程々の時間で解散。

放課後ケンタで談笑した後。

帰宅すると、次は自分の『個性』の探求に移る。

指で壁を叩く。すると、通常よりも鈍い音を発した。通常の人体と壁の接触では聞かないような音だ。

(なるほど……わかりにくいけど、これは『骨を硬質化させる』個性だ。どおりで見た目じゃわからないわけだ)

『ワンチャンドライブ』によって発現した個性はランダムであり、緑谷出久自身でさえ自覚するのに時間がかかる。パツと見て判る異形系が一番わかりやすい。何かを身体から発する類であれば違和感を感じるので、個性を発動しようとすれば、発動だけはできる。やつかいなのが視認できず、感覚でもわかりにくいもの。

本日のような、人体の内部が強化されるものは気づきにくい筆頭だろう。

(骨……うん。骨だ。これはどうだろう、骨だけ強化されてても、皮膚と肉は弱いままじゃ少し困るな。その辺はコスチュームでカバーすべきなんだけど、僕の場合は道具で備えるにも限界があるし……)

そうした日々をくり返し。

彼は毎日屋上へ通った。命を絶つ方法はたくさんあるが、その大半は痛みと苦しみを伴う。一番容易なのがこのワンチャンドライブだった。

銃による全弾込めたロシアンルーレットも候補に上がるが、銃は手に入らないので度外視。

(さすががこっちちゃん。合理的だ……)

ある日は『足の長さを伸ばせる』個性。

「緑谷さあ……なんか身長伸びた？」

「足だけ伸びたよ」

攻撃のリーチが伸びる程度だった。

ある日は『髪がわかめになる』個性。

「うわっ、何この臭い!!」

「ごめん。僕の個性なんだ……」

磯の香りが教室に蔓延した。

ある日は『全身が真っ黒になる』個性。

「教室に犯人がいるんだけど!!」

「半年間すいませんでした!!」

「僕としては真っ白の方がよかったんだけど……」

ある日は『恐竜になる』個性。

「緑谷……!! お前恐竜って……緑で小さくてなんか丸くって……ほ

とんどガチャ<sup>ピ</sup>オンじゃねーか!!」

「誰か赤い雪男連れてこい!」

「切島くんがいいよ! 赤いし!」

ある日は『皮膚が硬くやすりのようになる』個性。

「服ズタズタだなお前」

「骨が硬くなるのと一緒になれば最高だったんだけど……」

分析の末、『鮫肌』と断定。

ある日は『眼球が飛び出る』個性。

「目玉出てる!? グッロ!!」

流星に用途がなかった。明らかに爆死していた。

——そして二週間はあっという間に過ぎ。

——雄英体育祭、本番当日!!!

(これでよかったんだらうか……)

入場直前にも関わらず、緑谷出久は浮かない顔で俯いたまま。

本日の緑谷出久の『個性』は——未定!!

彼はその日、まだワンチャンドライブしていなかった。

無個性そのもの。素の人間である。

(いや、これでいいはず……!)

二週間、『ワンチャンドライブ』の探求に力を入れた。

飛び降りる場所も自宅のマンション以外にも、例のビルや学校の屋上とバリエーションを増やした。

そうしてわかったのは、本当にランダムだと言うこと。使えるものから使えないものまで幅広く、場合によっては『無個性』と変わらな。い。どころか何の『個性』が発動しているのかさえわからないことも多々あった。

そこで緑谷出久が重要と考えたのは、発動した『結果』ではなく、『過程』。

命を落とすということは、無論肉体に傷が付いているわけだが、しかし発動後はそれが消え去っている。これまでのを思い返しても、死に至った時の傷は治っていると見ていいだろう。もちろん治るのは肉体のみで服はそのままだ。

記録や上級生に聞くなどして過去の体育祭を調べた結果、『無個性』では命を落としかねない内容があった。

ならば、下手な個性のまま挑むよりも渦中での大事に備える方が賢明だと判断したのだ。

コスチューム使用不可というのは誤算だったが、それでもにわかには鍛えた身体はある。もう、もやしではない。屈強なもやしだ。毛が生えた程度ではない。毛みれの屈強なもやしだ。

努力の成果は、確かにある。

——緑谷出久。暫定『無個性』。  
数々の『個性』の使い手が犇めく祭典に、単身、挑む。

第一種目は障害物競走。

緑谷出久は良いスタートこそ切れなかったが、しかし確実に進んでいった。

やることは、走り込みによって力を付けた足で、駆けるのみ。第一関門のロボットは、半ば漁夫の利を得るような形で走り抜けた。

第二関門も同様、ここから落ちれば個性が得られるんじゃないのかなという欲望を跳ね退け無事通過。

しかし『無個性』。悲しいかな『無個性』。  
切り抜けたのみで、先頭との差は大きい。

最終関門。開けた場所に出た緑谷出久。視界のずっと奥に、先頭である轟焦凍と爆豪勝己の姿があった。

到底追いつけない距離だ。

(遠い!! でも——!!)

緑谷出久は、足に力を入れる。身体に喝を入れる。

(諦めちゃだめだ!! これ以上距離を広げないよう——)

意気込み大きく踏み出す緑谷出久の足下で、かちりと、嫌な音がした。

「——あ」

そして緑谷出久は、爆死する。

## No. 9 策柵作

地雷というのは本来、爆発による殺傷を目的にしたものではなく、破損した地雷の破片で負傷させるのを目的とした兵器である。

一撃で命を奪うことなく、意図的に生存させることで負傷者を足枷にするという残虐性極まりない、非人道的兵器。

しかしこれは体育祭。戦場のものとは異なり、爆発の方に重点が置かれる。当然威力も押さえられており、身体が浮き上がる程度である。

『おおーっと、早速踏み抜いた奴が出たぞ!! イレイザーヘッド、おまえのクラスだ!!』

先頭を走る轟焦凍、空中からそれを追う爆豪勝己。そして——  
——ただ宙を舞う緑谷出久。

緑谷出久の身体は軽く飛ぶ。そしてその身体が落ちる先は——まあ当然というべきか、地雷原だった。空中で体勢を立て直せない以上避けることはできない。

地面に着くなり爆発。ぼろ雑巾そのものの体で宙に投げ出される。それが繰り返され、爆発に次ぐ爆発の末。

緑谷出久の身体はついに、先頭の2人に追いつく——!!

「!!? デク!!!」

「な……っ?!?! どっから!!!」

空から現実として去来した緑谷出久。

無造作に投げ出された緑谷出久の身体に、爆豪勝己と轟焦凍は混乱するしかない。

構えているわけではない。着地する様子もない。こちらを伺う素振りもない。叫び声も上げない。ただ地面に転がりその身体を跳ねさせる。

その様はまるで、魂のない人形。舞い降りた、降り立った、そんな表現とはほど遠く、降ってきたという言葉が似つかわしい。

本日の天気、晴れときどきクソナード。

「あいつ……」

「……っ!!」

動揺の末、思わず歩を緩める二人。

魂のない人形。それはつまり、死体のそれで――。

二人の意に反し、緑谷出久は何事もなかったように起き上がり、走り出した。

『緑谷なんとまさかのぐっぽう抜きでトップを独走!!』

ちよーつと待て!! おいイレイザーヘッド!! あいつおまえのクラスだろ? なんなんだ!? あれだけ爆発してケロツとしてるぞ!!

あいつだけなんか違う次元にいるだろ。男塾かよ!!』

「……」

「……」

ほんの数秒。いや、数秒にも満たない時間であるが、二人は唾然としたまま緑谷出久の背中を見送ってしまう。

我に返るなり、轟焦凍と爆豪勝己は後を追う。

しかし焦りゆえか。爆豪勝己の爆速ターボが暴発し、二人は更に後れをとる。

「クソデクがあ……!!」

苛立ちの籠もった声が、爆音に微かに紛れた。

『さアさア序盤の展開から誰が予想できた!? 今一番にスタジアムに帰ってきたその男――緑谷出久の存在を!!』

スタジアムは緑谷出久を歓声で迎えた。

「なんてタフネスなんだ!」

「あの爆発でもまるで堪えていない……増強系か変形系か……興味深い!!」

「二位三位と結構差がないか? 普通に足速いし……化物かよ」

観客が口々に語る。

第一種目、障害物競走は緑谷出久の名前を多くの人々に刻み込んだ。



\*

地雷によつて身体が跳ね飛んだのは覚えている。  
しかしいつの間にか意識と記憶も飛び——気づけばゴールを目前  
としていた。

後ろから迫るのは爆豪勝己と轟焦凍だった。緑谷出久は額に汗浮かべとにかく逃げるように走った。必死こいて走った。そして——

——気づけば一位になっていた。

(夢中だったけど、一体なにがあつたんだ……?)

息を整え、そして状況を整理して思い至るのは、地雷を踏み続けて運良く先頭に飛ばされたという、虚偽としか思えないような現実。

そして、ボロボロの体操服。それに反して傷の無い身体。察するに、『ワンチャンダイブ』が発動しているということ。

(マジか……第一種目で死んだのか……)

雄英体育祭、恐るべし。ただのクソ学校っぽいのと侮ることなかれ。超人社会仕様の競技は、場合によつては命を奪う。

第二種目に勝ち上がる上位42名がゴールし。

戦々恐々としていた緑谷出久へ告げられたのは、第二種目の騎馬戦の内容と、自身に課せられた1000万ポイントという枷だった。

「1000万……?」

呆然と呟く。第一種目の結果に応じて持ち点が変わるのだが、二位の轟焦凍でさえ205ポイント、三位の爆豪勝己は200ポイントという、緑谷出久のみ桁外れのものとなっていた。

ルール説明の18禁ヒーロー曰く、Plus Ultra。205から1000万に飛ぶのはPlus Ultra過ぎるだろう。5%から1000000%に飛ぶくらい横暴だ。

のし掛かる重圧。寄せられる視線、対抗意識。

心臓は鼓動を早め、冷や汗が頬を伝う。僅か身体が震え、拳には力が籠もる。

逃げてしまいたいような状況だが、これは緑谷出久が憧れていた舞台。

夢見て、望んで来た舞台だ。  
怖じるくらいなら、切り抜ける策を捻り出す方が先。

チーム決めの交渉タイムが始まる。

(僕の『個性』は……。ダメだ、わからない……。！)

感覚でわかる『個性』ではないようだった。騎馬戦開始までの時間もない中、割り出すのは難しいだろう。よしんば割り出せても試す時間は皆無。

(僕の個性はアテにならない。僕以外……。誰かの『個性』を頼るしかない……。！)

今の緑谷出久に『個性』はない。コスチュームが禁止されている以上、スタンガンやケンタツキーフライドチキンもない。

しかし彼には——知識がある。

緑谷出久はこれまでクラスメイトと『個性』について語り合ってきた。その都度考察し、応用法も模索してきた。

誰の『個性』をどう活かせば勝ち抜くことができるのか。思いつく的には、そう時間はかからなかった。

騎馬戦のルールを踏まえ、緑谷出久はその作戦の最重要人物の元へ向かう。

「あ、いた。……よかつたら、僕と組んでくれないかな——

——峰田くん！」

\*

『3!!』『2!!』『1……!』

『START!』

第二種目開始に伴い。生徒たちは他チームの鉢巻きを取るために動き始める。

ある者は先手必勝とばかりに手近な騎馬に迫り。ある者は慎重に周囲との距離を図り。ある者は目標を定めて様子を伺い。

その大半はまず、この騎馬戦の肝になるであろう緑谷出久の騎馬へ目を向けるのだが、そこには異様な光景があった。

『第一種目をまさかの手段で首位をかつさらった緑谷!! 第二種目でも早速何か奇抜なことを始めたぞ!!』

なんと緑谷出久は騎馬役。そしてその上では、鉢巻きの付いた黒い謎の塊が小刻みに震える。

そして——緑谷出久は、上半身裸だった。

上半身裸の男が先導する騎馬には黒い異物が蠢いている。

ある種の変態騎馬に、誰もが動きを止めた。

「妙なことでんじやねーぞクソが!」

できるならば関わりたくない、そんな雰囲気を放つ騎馬へ、勇猛にも真っ先に向かったのは爆豪勝己の騎馬。

しかし、その騎馬も目前で足を止めてしまう。

「……ダメだ! これ以上近づけねえ!!」

爆豪勝己の騎馬である切島鋭児郎が叫ぶ。上ばかりに目の行く緑谷出久の騎馬だが、その足下には不気味な流動体が撒かれており踏み込むことができなかった。

「これ……芦戸の『酸』だ!!」

「チツ!」

爆豪勝己はすぐさま飛ぶ。下がダメなら上と言わんばかりに、爆破を利用して飛び上がるのだが、それを迎え撃つかのように小さな黒い球体が爆豪勝己の目の前に現れた。

「……! しょうゆ顔!」

「瀬呂なつと!!」

爆豪勝己のとつさの判断で、瀬呂範太が『テープ』を用いて彼を引き寄せた。危なげながらも、爆豪勝己は騎馬上へ戻る。

『おおおおお!!? 騎馬から離れたぞ!? 良いのかアレ!』

『テクニカルなのでオツケー!!』

どこか気楽な実況と審判のやり取りだが、競技場では気の抜けない盤面が続く。

「あの黒いの……間違いない、峰田だ!!」

切島鋭児郎が指し示す。

黒い塊——それは峰田実の個性『もぎもぎ』。粘着質の黒い球体が本人の服の至る所に張り付いていたのだ。

そして『もぎもぎ』が数個、太い紐のようなもので繋がれ円形になり、騎馬を囲うように浮遊している。

「なんだよアレ!! あれじゃ鉢巻きがとれないじゃねーか!!」

「あんなのアリかよ!!」

一応、鉢巻き自体は黒い塊の上に出ている。触れることはできるだろう。しかし、鉢巻きと峰田実の服とが張り付いているのでは取りようがない。

取れないこともないが——それには峰田実を半裸にすることが必要となる。

半裸の男子生徒の騎馬に乗る半裸の男子生徒という、18禁ヒーローに対抗するような状況になってしまうのだ。

その上、大量の『もぎもぎ』も付いてくる。誰も望まないアンハッピーセットである。

『おい審判! アレはどうだあ!!?』

この騎馬戦において禁則となっているのは、悪質な崩し目的での攻撃。これが攻撃かと問われれば違うだろう。崩しかと問われれば、違うだろう。

よって。

『鉢巻きを覆ってる訳じゃないし、とりあえずオツケー!!』

一層ざわつく競技場。

そして皆、峰田実の騎馬を目標から外していく。取れないことはない。しかしそれには多大な労力が必要だ。破格の1000万ポイントとはいえ、誰がそこまでして取りに行くものか。

しかし、やはりというか、爆豪勝己は諦めることはなかった。

「なら『個性』ごと焼き切ればいいだろうが!!」

足下の『酸』を爆風で片づけ、距離を詰める。あちらが『個性』で障害をつくるなら、こちらも『個性』で破壊すればいい。そして問題の黒い球体も『個性』である。であれば、過剰に攻撃しても問題はない。

爆豪勝己は、再度飛ぶ。

しかしそこへ黒い球体が浮かび、更には『酸』までもが牽制として発射された。

「……ッ!!」

「たまらず爆豪勝己は後退。」

間髪入れずに峰田実の騎馬へ飛ばうとするが——そこへ他の騎馬が手を伸ばした。

緑谷出久を相手に意地になっていた爆豪勝己の鉢巻きを、奪い取る。

「単純なんだよ、A組」

B組所属、物間寧人だった。

相手は一人ではないのだ。峰田チームの騎馬を攻略することのみに意識を向けることは許されない。

爆豪勝己は遺恨を込めて緑谷出久を睨みつけるも、すぐに物間寧人の方へ向いた。

\*

(よし、いいぞ……。みんな他の騎馬に狙いを変えた!)

緑谷出久は冷たい汗を垂らしながらも、口角を上げて見せる。

1000万という破格のポイントは、周囲を差し向けるための的だ。その鉢巻き一本で他の鉢巻きを全て集めた点数を越えている。わかりやすい、餌。

しかし。逆に言えば、それさえ死守すれば一位ということなのだ。

「峰田くん、相手が攻めてこないうちはできるだけ身体を動かして。これはどれだけ異様な印象を与えて、どれだけ引かせるかも重要だから」

「バイブみたいな感じでいいんだよな!!」

峰田実の『もぎもぎ』が異様な外見で人を遠ざけ、粘着力で鉢巻きの奪取を阻害する。そして投げつけるもよし、地面に落ちてもなおよし。

「芦戸さん、今空いたスペースに『酸』飛ばせるかな？ 牽制用に。粘

度が高いやつだとおそろいいんだけど……」

「お、陣地広げちゃう?! いいよー!!」

芦戸三奈の『酸』が周囲に撒かれ、相手を近づかせない。それを越えて迫る者には直接『酸』が撃ち出される。

「様子見て浮かせて、麗日さん。許容重量もあるし、あんまり無茶しないように……。あと、『もぎもぎ』自体には触れないように気をつけて」

「了っ解!」

麗日お茶子の『無重力』も同様に、『もぎもぎ』を浮遊させることで牽制に徹する。この際、浮かせるために触るのは『もぎもぎ』ではなく、複数の『もぎもぎ』を結ぶ紐のみ。

ちなみにこの紐というのは、ボロボロになっていた緑谷出久の体操服を、細長く破ったものである。その上体操服の切れ端を地面と接するあたりに貼ることで、地面に張り付くのも防止している。

攻めるでも、逃げるでもなく。

『緑谷!!.. 1000ポイント抱え込んでまさかの籠城だああ!!』

騎馬戦に設けられた十五分で、突破できない壁を作ってしまったばい。い。

乱戦という都合上、その騎馬を突破するのみに全力を費やすことはできない。周りが見えないものは先の爆豪勝己のように足下を掬われるだろう。

仮に横槍が入らずとも、緑谷出久以外の、他のポイントが無くては勝ち進めない者は焦りと供にある。そんな状態でこの防御に特化した騎馬を突破する策を立てるのは難しいだろう。

従って。

わざわざ時間を掛けて取りに来る者はいない。

訳の分からない奇妙な騎馬、有り体に言えば、ただただめんどくさい騎馬を相手取る必要も、暇も、余裕も、まるでないのだ。

爆豪勝己を含めた、わずかにいた1000万を狙っていた者が次々

と峰田チームから離れていく。その様、諦めるというより、どちらかと言えば呆れていた。

1000万ポイントという圧倒的な標的は、競技場の一角を『酸』で陣取る。徐々に激しくなっていく騎馬戦の中、緑谷出久の騎馬、峰田チームだけ孤立している。

(轟くんの騎馬は……いい感じに他と闘ってる。これで最後までいければいいんだけど——)

この作戦において、一番懸念していたのは轟焦凍の存在だった。

轟焦凍の『個性』による大規模攻撃の前にはどんな策も無に帰すだろう。だが幸運か、轟焦凍はこちらに興味を向けることはなかった。

気休めではあるが、内心で安堵する。

「オイ緑谷!! 本当にオイラたちこのまま勝っちゃうぜ!!」

「うん。峰田くんの『個性』のおかげだ。芦戸さんも麗日さんも、みんな『個性』してる。ここまでは普及点。でもまだ——

——これから、だ!」

——残り数分というところで、孤立していたこちらへ視線を向ける者が現れてくる。

『おおーっと!! 残り時間もない中、今まで峰田チームそっちのけで奪い合ってた連中が一気に向かったぞ!!』

残り時間の少なく、勝ち目も薄い騎馬ならば——特攻を仕掛けても不思議ではない。むしろそんな博打は、あつて当然だ。

ただ勢いだけの連中ならば、『酸』で牽制し、『もぎもぎ』で地面に張り付ける等で対処できた。

しかし——残り一分を切った瀬戸際で、その人物はこちらへ、飛ぶ。『こいつも行った!! 開始後に唯一1000万取りに行った男!! 爆

豪!! 特攻、いや、リベンジだ!!』

「やっぱり——来たか!!」

そして。それだけでは、ない。

別の方向では、『酸』が地面ごと凍っていくところであった。

轟焦凍の騎馬だ。案の定、地面に撒かれた『酸』も『もぎもぎ』も

簡単に無効化して見せる。これまで奪りに来なかったのは、単に奪った後の心配をしていただけの線もある。

騎馬である飯田天哉が声を張り上げる。

「奪れよ轟くん！——トルクオーバー！」

襲い来る爆豪勝己。迫り来る轟焦凍。両方を振り向く緑谷出久。

吹き出るような汗が、緑谷出久の焦りを表していた。

凍った地面に乗じて、漁夫の利を狙う者もしばしば。

『さあ囲まれたぞ峰田チーム！ これで奪られれば緑谷は脱落だ——！！』

挟まれるようなその状況で——

——突如。緑谷出久の眼前にて、爆豪勝己を遮るように火が燃え上がった。

「——！！？」

爆豪勝己は、爆破で勢いを殺すことで咄嗟に回避する。

轟焦凍の騎馬もまた、最高出力で駆け出そうところを中断。

ここまで一度たりとも、誰も予期していなかった事象。誰もが咄嗟に見るのは、緑谷出久。

個性『日替わり』。全てにおいて、イレギュラーの原因と考えられる男。

「……っ！！」

正体不明のその『個性』にたじろぐ一同。そして。

『——そろそろ時間だ。カウントいくぜ。エディバディセイハイ！ 10！』

プレゼントマイクの声を受け、両者すぐに立て直し、1000万ポイントへ手を伸ばす。

『9』

「——レシプロバースト！！」

「まだまだ!!! 一位は俺が——」

『8』

そして、緑谷出久は、叫ぶ。



「麗日さん！ いまだ!!」

麗日お茶子が、『個性』を発動させる。その五指が触れるのは――

――峰田実。

『7』

麗日お茶子――『無重力』。五指で触れた物体を、無重力状態にする個性。

この騎馬戦における奥の手。

残された数秒。1000万ポイントへ伸ばされた手は、どれも空を切り。

1000万ポイントを携えた黒い物体は、空中へと退避した。

『6』

勢いのあまり通り過ぎた轟焦凍の騎馬。轟焦凍がすぐさま、見上げる。

爆豪勝己が、上へ飛ぶために、地面に向かって爆破させる。

それと同時に、先ほどと同じくして、地面から火が燃え上がる。

爆発と相乗して、爆豪勝己がバランスを崩す。周囲を巻き込む爆風は、爆豪勝己の身体を峰田実から遠ざけた。

『5』『4』

「あの炎!! まさか緑谷の今日の『個性』……!!」

誰かが言った。

「このの、クソが……!!」

爆豪勝己が、歯噛んだ。

『3』

『2』

『1』

『――TIME UP!』

第二種目、騎馬戦。一位を飾ったのは、緑谷出久の騎馬、峰田チム。

1000万ポイントを死守し、予選通過を決めたのだった。

No. 10 親哀れ

「さあ崇めろ女子ども！ 騎馬戦1位のこの俺——峰田実サマをなあ  
!!」

峰田実がふんぞり返って凄んだ。

女子陣は顔をひきつらせ、

「いや全部緑谷の作戦なんですよ？」

「緑谷のおかげだし……何言ってるんだか」

「むしろすごいのは緑谷くんだよね」

「崇める必要……あるかな？」

「ないでしょ!!」

辛辣だった。

「いやいや。あの作戦は峰田くんあってのものだよ。峰田くんがいたからこそできた作戦なんだ！ 僕は崇めるよ！」

ありがたやありがたや。緑谷出久は合掌し感謝を示す。峰田実の頭の球体が、彼には大仏の頭のように見えた。

「緑谷ア……！ おめえは……おめえってやつは……。おめえだけは俺を……。……。」

……男子に崇められても嬉しくない」

「そっか……」

二人して肩を落とした。

第二種目の騎馬戦を終え、昼休憩。競技中の緊迫した空気とは違って変わり、彼らには学生相応の平穏な空気が戻っていた。

緑谷出久と峰田実も新しい体操服に着替え、18禁とはほど遠い学生相応の身なりだ。

「よかったよ緑谷—— 私『個性』も活躍できたし！ 誘ってくれてありがとね！」

「こっちこそ。かつちゃん誘いに行ってたのを無理に言ったのに……。芦戸さんの『酸』で競技場を陣取れたのは大きかったよ」

妙に高いテンションで言うのは芦戸三奈。じゃね！ と上機嫌のまま休憩へ向かっていく。

『酸』は強力な個性だ。この昼休憩の後に待つ最終種目にて敵対することがあれば、厄介な相手になるはずだ。

最終種目に備え。緑谷出久はクラスメイトたちと共に食堂に来ていた。飯田天哉は燃料であるオレンジジュースを蓄え、緑谷出久はケントッキーフライドチキンを屠った。

「最終種目、頑張つて結果を残さんとね！」

隣で意気込みを見せるのは麗日お茶子。

意気込むのはいいのだが——表情に野心が滲み出て、アレな顔になつていく。普段の麗日お茶子とかけ離れた、全然うららかなじやないアレな顔だ。

麗日お茶子が異様に張り切る理由を問えば、返ってきたのはヒーローを目指す動機だった。

ヒーロー業で稼ぐことで、親孝行するのだと。

「そっか……」

「出久くんは？」

「僕は最高のヒーローになるのが昔からの夢なんだ。オールマイトみたいなヒーローに。小さい頃に見たオールマイトの動画がきっかけで……」

言い掛けて、緑谷出久はどこか寂しそうに目を落とした。

（僕はオールマイトに憧れてヒーローになろうとした。でも僕はもう——オールマイトみたいにはなれない……）

不意に去来したのは、彼の『個性』のこと。

一日ごとに個性が変わる『日替わり』。その実態は、死と引き替えに『個性』を得るというもの。死神に魂を売るかのごときそれは——

——『正義』のイメージとは真逆、敵ライバルのようなイメージの『個性』。

憧れたオールマイトのような、全てを笑いで吹き飛ばすような快活な『個性』ではない。苦しみの末に力を得る、非人道的な『個性』だ。

これが自分の『個性』だと受け入れ、その力でヒーローを目指すの

だと決めた今でも。やはり心残りを感じてしまう。

それでも緑谷出久は、念願の『個性』だろうと言い聞かせるようにして首を振る。

元々、可能性がないとまで宣告されていたのだ。これ以上を願っては罰当たりだろう。

「すごいな出久くんは……不純な私と違って、立派な動機だ！」

麗日お茶子が目を細めて言う。

「——オールマイトみたいに、たくさんの人を助けるヒーローを目指すなんて！」

何気ないような、その呟きに。緑谷出久は、引っかけりを覚える。

(なんだろう、これ——)

些細なニュアンスだが、緑谷出久の語った動機と、麗日お茶子の受け取った内容に差違を感じた。取り立てるほどでもない、微々たるものだ。言葉の綾であろう。

(……あ)

けれども、緑谷出久は、気づいてしまう。

——僕は最高のヒーローになるのが昔からの夢なんだ。オールマイトみたいなヒーローに。

——立派な動機だ！ オールマイトみたいに、たくさんの人を助けるヒーローを目指すなんて！

些細な違いだが、気づいてしまう。

(僕は『ヒーロー』になりたかったんじゃないやなくて、『オールマイト』になりたかった——?)

汗が頬を、伝う。

(いやそんなはずはない！僕は『最高のヒーロー』を目指してて、『最高のヒーロー』っていうのはつまり『オールマイト』のことで、でも僕は『オールマイト』にはなれなくて、でも『最高のヒーロー』を目指してて……)

堂々巡り。思考せども、緑谷出久の中で『最高のヒーロー』と『オールマイト』はイコールで結ばれていた。

強すぎる憧れは感覚を麻痺させる。いや、感覚を錯覚させる。

緑谷出久にとって、オールマイトという存在は憧れであり、そしてヒーローを象徴するものだ。

『無個性』だからと、ヒーローになる夢を否定された緑谷出久。彼は手が届かないものだど理解した上で、それでもなお夢を諦めきれずにいた。

それは無自覚の内に、彼の『ヒーロー』への憧れを肥大化させた。

隣の芝は青く見える、そんな言葉があるように。自分にはないものほど、人は求めてしまう。

『オールマイト』に憧れて。

『オールマイト』みたいな『ヒーロー』になりたくて。

『オールマイトのように』とだけ、願いつづけた。

結果2つは置き換わり。

『オールマイト  
ヒーローになりたい』

それがいつしか、緑谷出久にとっての夢となっていた。

だから——ヒーロー個になる条件を得た上で、彼オにとつてのヒーローマになれないことを受け入れてしまった今、矛盾が生まれる。

「——『ヒーロー』って、なんだっけ……?」

その言葉の本質が、わからなくなっていた。

緑谷出久は——思考を振り払うように、ケンタツキーフライドチキンにかぶりついた。

「……ッ!!!」

その瞬間、緑谷出久は悲鳴に近い呻き声を上げる。

「出久くん!! どうした!?!」

麗日お茶子が案ずるようにのぞき込む。

「……痛い」

「え? え!?!」

痛いって……まさか騎馬戦で怪我!!?

医務室!!

リカ

バリーガールのところに……」

「い、いや違う麗日さん……。歯が……」

嫌な思考を押しつけるように噛みついたケンタツキーフライドチキンが、骨による100%スマツシユで迎え撃ったのだった。

「気をつけんとー！」

「う、うん……」

緑谷出久は顎をさする。医務室に行くようなダメージではなかった。というか、競技の負傷ならまだしも、こんな理由で医務室に行くなど滑稽の極みである。

——気づけば、先までの嫌な思考は吹き飛んでいた。

それは、『細かいことでウジウジするな』というケンタツキーフライドチキンからの叱咤のようである。

思わず苦笑いを浮かべ、前向きになることができた。

昼休憩が終わるとレクリエーションが始まり、同時に最終種目について説明も行われた。

騎馬戦を勝ち抜いた4チーム——総勢16人による、トーナメント形式で行う一対一のガチバトル。

組み合わせが発表された後。尾白猿夫に一回戦の相手、心操人使の『個性』に気をつけるとの旨を伝えられて。

それから、緑谷出久は轟焦凍に呼び出されていた。

「あの……話って……何？ えと……」

轟焦凍はまっすぐに、緑谷出久を睨みつける。

「トーナメント。見たよな？ 二回戦、おまえが勝ち進めば俺と当たる」

「——へ？」

「正直、おまえなんか眼中になかった。『日替わり』は不確定要素の多い『個性』で、動きが予測できない。でも、それは『個性』が手に着いてないってことだ。そんな急拵えの力なんか俺の氷でどうにでもなる」

「それは——」

轟焦凍が指摘したのは、『日替わり』の表向きの弱点だった。轟焦凍の言うとおりに、一日限定の『個性』では成長が望めない。どころか使うことさえ困難になってしまうものだ。

「客観的に見ても、実力は俺の方が上だと思う。だが——おまえはこの体育祭で、第一第二ともに一位を穫ってきた。俺の予想の上を越えて。だから……おまえには勝つ。それを伝えに来た」

緑谷出久は思わず、拳を固めた。強く。そして、震えていた。

『半冷半焼』。1—Aでもずば抜けた能力を持つ轟焦凍が、こちらを見ている。眼中になかったという轟焦凍が、こうして布告に来ていることに。

自分を視野に入れているということに、嬉しくも、恐怖を感じる。

「僕も負けな……」

「これは俺の私怨でもあるんだけどな」

僕も負けないと応えようとした緑谷出久を、轟焦凍は遮った。

そして唐突にも語られたのは、轟焦凍の『個性』についての成り立ちだった。

個性婚。遺伝の要素が強い『個性』を、人為的に組み合わせ生成しようという倫理から外れた行為。轟焦凍は、個性婚によって生まれたのだと語る。

「緑谷……おまえのそれは親譲りのものなのか？」

「……。いや、僕のは『突然変異』ミューテーションだけど……」

「そうか。ならおまえには関係ない話だったかもな」

「……」

「今日のおまえの『個性』は『発火』……だったか？　つまり、俺の親父と同じ『炎』の個性だ。」

——ここまで一位で来た炎おまえに。俺の『氷』で勝ち一番になることで、奴を完全否定する」

その宣戦布告には、緑谷出久の価値観を、遙かに越えた思いが込められていた。

「だから、私怨だ。時間とらせたな。——当たったときは、その『炎』で全力で来い」

そう言い残し、去っていく背中を、緑谷出久はただ見送ることしかできなかった。

自分が何になりたいのかを見失い始めた彼に、轟焦凍へ掛けられる言葉を見つけることはできなかった。

（僕の『個性』は——）

幕を開けた最終種目、ガチバトル。一回戦の競技場にて、緑谷出久と心操人使は向かい合う。

「知ってるかい緑谷出久。おまえ、一年じゃ有名人なんだ。一年でだけじゃない、学校中におまえの名前が浸透してる。一日毎に違う『個性』。個性自分を持たない男」

心操人使は試合が開始される前に関わらず、独りで語り出す。

「体育祭の話があった日から、俺たちヒーロー科以外のやつはなんどもヒーロー科に宣戦布告に行こうとしてるんだが、おまえを見て引き下がってる。

ある日は足だけ妙に長い奇人。

ある日はわかめの悪臭を放つ。廊下まで磯臭い。

ある日は犯人みみたいな黒づくめ。申し訳なくなる。

ある日はガチャピオンが教室にいるし。

ある日は喧嘩の後みたいなズタボロの格好で。

ある日は眼球が飛び出たゾンビ。

宣戦布告に行った奴が口々に語るんだ、1—Aには化け物がいる。全部——おまえだよな？」

緑谷出久は言葉を失う。それらは全て、間違いなく緑谷出久の『個性』だった。

「その化け物は、普段は見るからにオタク気質のもやしだ。コミュニケーションなのかオドオドしてて、でもそのくせ『個性』の話になると急に快活になる。典型的なクソナードだ。本人も『頑張れ!!』って感じのクソナード』を名乗っていたらしい」

『レディイイイイ——START!!』



「USJの件もあって、一年はヒーロー科の1-Aを打倒とするやつにあふれてる。だがそんなのお構いなしに、化け物は他クラスに『個性』の話を持ちかけてくる。そして解析をして、伸び代まで提案してくる。これから競う相手にしてはやりすぎだよな？ どこまで眼中にないってんだか。第二回戦でもB組の凡戸を勧誘してたよな？ どこまで空気が読めないんだ。それも断られた直後に芦戸のところに行く節操なしときた」

心操人は、明らかに煽っていた。

「化け物クソナード。なあ、どう思……っ!!?」

その挑発に。

緑谷出久は、突き飛ばすことで応えた。

「!!? お、おい、おまえっ、まだ話して——」

転倒を堪えたところへ、追撃。そのまま端まで追いやり。

最終種目、第一回戦は。ありえないほど単調に、片方が押し出して幕を閉じた。

「ふ……ふざけんなよ!! おまえ!! なんか言えよ!」

「うるさい! ああああああ!!」

緑谷出久は、叫びを上げた。

「答えると『洗脳』されるとわかってて、答えるわけないだろ!!!」

そして、緑谷出久の身体が固まる。

個性『洗脳』、発動——。

「……っ、な、なんなんだよおまえは!!」

——『洗脳』が、解除される。

「はは、どうだよ、こんな『個性』だ。こんな敵みtainな『個性』が俺だよ……! 俺は『洗脳』しかない。いいよなあ、おまえは何にでもなれて——」

自暴自棄のように吐き出された言葉が、相手の意図しないところで緑谷出久に突き刺さる。

——敵みtainな『個性』が俺だよ……!」

それは、緑谷出久も、また。

「……『洗脳』の発動条件が、問いかけに対して相手が答えることなら、弱みを突くのは間違った手段じゃない。人は譲れないものを指摘されたとき、嫌でも反応する。でも、あまりに露骨すぎちゃ返って手を警戒させてしまう……。僕だったらむしろ、シンプルに。正々堂々やろうなって言われただけで返していたかもしれないのに……」

緑谷出久が言うのと、心操人使は押し黙った。

背を向け、競技場から離れる。

しかし去り際に、口を開く。

「いっそのこと、試合の前に『洗脳』してしまえばよかったんだ。そうすれば、君は簡単に勝つことができた。でもそれをしなかったのは、それが君の中の『正義』に障ったからだろう？ 君の譲れないものだったから……」

緑谷出久は口を閉じる。それ以上は、紡げなかった。

去り際に、心操人使が言う。

「……クツソ。次は、負けない、いつか追い抜いて——覚えとけよ……！」

振り向き、頷いて。今度こそ競技場を降りる。

(何、言ってるんだ)

心操人使へ送った言葉を省みて、自虐に齒噛む。

譲れないもの。正義。

——『ヒーロー』とは。

(それがわからないのが——僕なのに)

\*

一回戦が軒並み終わり、二回戦。

轟焦凍は緑谷出久を見て、顔を引き締めた。

彼を突き動かすのは、父親への反抗心。

その二つを叶えるのが、ここまでを『一位』で来た『炎』。

父親と同じ『炎』を、母親の『氷』で下してこそ、父親への否定を完遂することができるだろう。

だから。

「さあ緑谷。使えよ」

試合開始の直後、轟焦凍は棒立ちのまま、告げた。

「……？」

「言っただろう？ 俺はおまえの『炎』を倒すのが目的だ。今『氷』でおまえに勝つのは簡単だ。でもそれじゃ意味がない」

侮っているわけではない。ここまで一位で駒を進めてきた緑谷出久の、知識と作戦自体は評価している。

だが、それ以上に轟焦凍にとつて重要なのが『炎』だった。

『個性』を使えと誘う轟焦凍。しかし緑谷出久は——『個性』を使うことなく、ただ接近してきた。

放たれた掌底を、轟焦凍は躲す。

「何のつもりだ……？」

緑谷出久はその問いに答えることなく、肉体での攻撃を繰り返した。

特別なものはない。ただの拳。ただの掌底。一撃一撃が、ただ繰り返されるだけの単調な攻撃。躲せないものではない。

特筆するならば、腕を振るう度に大きさに距離をとる戦法だろうか。やけにこちらとの距離を意識し、離れては近づき、また離れては別の角度まで回って攻める。

それはやけに低姿勢であり、爆豪勝己と麗日お茶子の対戦を彷彿させるが、別に空に何か仕掛けているようでもない。

(氷を警戒してるのか……？)

一度凍らされれば終わり。そう考えてのヒットアンドアウェイとするのが打倒だろう。

底姿勢なのは、地面を氷が伝うのに反応するためだ。

だがしかし、用いられるのはただの徒手空拳。『個性』の欠片もないもので、轟焦凍がわざわざ待っているものではない。

轟焦凍は無言のまま、緑谷出久の攻撃を躲す。緑谷出久はただ一人

で、暴れているだけだ。

空に何か仕掛けているのかと気にし、見上げる暇さえある。緑谷出久の攻撃はひとつ覚えというか、覚えたとというか、呆れるように単調だ。

それでも少しは付き合ったが、勝手に汗だくになっている緑谷出久を見て、限界を迎える。

「おい……ふざけてるのか？ 早く『個性』を使え。何のために待っていると……」

「ふざけてるのは、そっちじゃないか……！」

緑谷出久から返ってきたのは、思ってもないものだった。

「宣戦布告とか言っておきながら、結局僕なんか眼中にない。『炎』しか見てないじゃないか。なら君も『個性』を使うべきだ。そんなにいい『個性』を持っておきながら、使わないなんて、それこそふざける。君も『個性』を——『熱』<sup>ひだり</sup>を使えよ」

炎を要求する轟焦凍へ、炎を要求する緑谷出久。

「クソ親父に金でも握らされたか……？」

そう訝しむ。それなら納得していいだろう。こんな遅延をする意味を。

轟焦凍は戦闘において、左の炎を使わないと決めている。それは彼の理念であり信条。譲れないもの。

だが——

「使えよ。そんなに熱<sup>君のお父さん</sup>を否定したいなら——その炎ごと、僕の『個性』で打ち負かして上げるから……っ!!」

——その一言で、崩れる。

「……言ったな？ このクソ親父<sup>ひだり</sup>を……おまえは否定できるんだな!!?」

緑谷出久は、頷いた。

「なら……やってくれよ……!!」

自虐的に言った轟焦凍の半身から、堰を切ったように炎が溢れ出す。

その瞬間、観客席から沸き立つ声。

「——焦凍オオオオ!!」

世界一不快で、世界一嫌悪する、父親の声だった。

『熱』を受け入れたと勘違いし、狂乱する父親があった。勢いだけで、取り返しの付かないことをしたのではと、轟焦凍は思う。

悠長にも、思ってしまった。

瞬間。

爆発的に、火の手が上がった。

それは轟焦凍の周囲を取り囲むように。まるで、火の檻ともいえるように、燃え上がる。

「……緑谷!!」

轟焦凍の頬を、汗が滴った。

視界を埋める、火。炎。

それを発するのに、緑谷出久は動くことはなかった。

(ノーモーションで、この範囲攻撃……!?)

それも、轟焦凍を飲み込むことなく、その周りだけを。轟焦凍は戦慄する。

『発火』などという名前では生易しい。触れてもいない場所に炎を出す。それはもはや——父親の個性『ヘルフレイム』の、上位互換ではないか。

炎系最強とも謡われる『ヘルフレイム』でさえ、身体から炎を出すというものだ。予備動作もなしに、離れた場所に出せるものではない。

轟焦凍は、口元を綻ばせた。

「なんだよクソ親父。お前の『個性』なんか、大したことないじゃねーか……!」

炎で炎は消せない。これだけで『熱』は否定されたようなものだ。まさか上位互換をもって、父親を否定してくるなど、誰が思おう。「じゃあもう、『熱』はいらないよな……?」

轟焦凍は熱を止めると、氷を出す。炎の熱の中で、咄嗟に作り出せる範囲で巨大な氷を生み出す。

氷は、溶けてしまえば水だ。炎は消せる。

緑谷出久のいた方向へ、氷を使う。安直にも実行して——直後、炎が弾けた。

「!!!?」  
正面の空気が爆ぜる。

氷で身を守るも、身体は後方へ吹き飛ぶ。

なんとか場外へ投げ出されることは免れたものの、膝を突く。ノーダメージではない。しかしそれは炎の檻からも抜け出すということであり、不利ではない。

ここからどう立て直せるかで、挽回できる。

炎の無力は証明できた。あとは存分、氷で制圧すればいい。

炎が消えた際の蒸気が、競技場に蔓延する中。

『個性』を使う挙動に入る。そこへ——

——緑谷出久の掌底が襲った。

「はっ……くっ……」

横から、隙だらけの顔面へ、重い掌底が打ち込まれた。緑谷出久は正面にいたはず。そんな固定概念にとらわれていた。

それも、思っていたよりも遙かに重い。先の暴れていたときの身のこなしとは、まるで重みが違った。

誤算だった。幼稚に暴れていたのは、偽装。

どこまでが計算かは知らないが、少なくとも。これが、緑谷出久の作戦の結果だと思ひ知るしかない。

——無防備だった轟焦凍の身体は、場外へと落ちる。

「どうだよクソ親父。お前の『熱』を使ったからこそ、俺は負けたぞ……?」

轟焦凍は、笑う。自虐的に。そして、どこか満足そうに。

「この『熱』は、いらな……」

「——フザけるなよ、バカヤロー!!!」

怒鳴りつけたのは、緑谷出久だった。

「何が『いらぬ』だ!! 君の『個性』じゃないか!! 世の中には、『個性』がなくて苦しんでる人がいる!! ヒーローになる夢を諦めなきや

いけない人がいるんだ!!

僕がそうだった! この『個性』にかつちゃんが気づかせてくれるまで、僕は『無個性』のまま夢をバカみたいに見てるだけで、努力もなんにも出来ずにいた!! 『個性』がある悩みなんて、『無個性』の悩みと比べたら贅沢なもんだぞバカヤロー!!!」

緑谷出久が轟焦凍の襟首を掴み——すぐに離れた。

「僕だってこの『個性』に悩んだ。でも、それでも夢を諦めようとは思わなかった。君は、違うの? 夢見た『ヒーロー』に、憧れた『ヒーロー』に、なりたいんじゃないの? 僕は、僕のこの『個性』で『ヒーロー』を目指すんだ」

馬鹿みたいに必死に、阿呆みたいに喚いていた。

一方的に喚き散らかされた。

言っていることは確かに真つ当で。

全てが——馬鹿らしくなった。

「それだと俺が、ただのガキみたいじゃねーか……」

呟く。緑谷出久は、日によっては使えない『個性』になってしまう。それは『無個性』も同然で、轟焦凍のような優秀な『個性』には及ばない点だ。

そんな緑谷出久が、この体育祭では自分より上にいる。

『個性』を十全に使おうと模索し、自分と同じヒーローを目指している。

自分は、親を言い訳に『個性』を半分しか使っていない。そして、下だと思った人間に負けている。

情けないのはどちらか、明白だ。

一気に、身体の力が抜ける。それまで意識の外にあった、会場の歓声が現実として去来した。

「皆、本気でやってる。君は『熱』<sup>ひた</sup>も合わせて『君』で……」  
「わかったよ。考える」

轟焦凍は笑う。

左手に、小さく火を灯し。

「ありがとよ」

憑き物が落ちたような表情で。目を伏せ、口角を上げた。



## No. 11 いざ決勝

「さあ女子ども！ 傅かしずけ、跪ひざまずけエ！ 崇あがめろ、讃たたえろオ！ 準決勝出場のこの俺——峰田実サマをなア!!」

峰田実がふんぞり返って凄んだ。

「くっ、ここまできると馬鹿に出来ない……!」

「実際のところ、私たち女子より勝ち残り残ってるわけですし……」

芦戸三奈が悔しそうに拳を固め、八百万百が額を手で覆う。

「いや、塩崎にはセクハラ紛いに迫っての降参勝ちだし……」

耳郎響香が冷めた目で言った。

緑谷出久の次の試合、準決勝で対峙するその相手は——峰田実だった。

「……あれ?」

緑谷出久は疑問符を浮かべた。

峰田実は確かに、準決勝で自分と当たりうる組み合わせではあった。それはいい。

ただ、峰田実の一回戦の相手は——

「……え? 飯田くん? あれ?」

——飯田天哉。個性『エンジン』。高い機動力と、推進力を利用した足技による攻撃力を兼ね備えた優秀な『個性』。

トーナメントを見た限り、準決勝の相手は飯田天哉であると緑谷出久は踏んでいた。しかし予想を裏切り、準決勝に駒を進めていたのは峰田実。

緑谷出久が対轟焦凍に気を取られていた間に、いったい何があったというのか。

飯田天哉は、真っ白に燃え尽きたボクサーのような風貌で佇んでいた。

「緑谷君か……。俺は、踏んでしまったんだ。峰田くんの『もぎもぎ』を。盛大に転んだ俺は気を失い……。笑ってくれ! 転んだだけで医

務室の世話になったんだ!! すまない兄さん……俺は……ああああああ!!」

哀愁を漂わせながら、自棄気味に叫んでいた。

「一度緑谷の指揮で戦って調子に乗ったオイラに、死角はないのさア!!」

悪い意味で調子に乗りまくっていた峰田実。

天狗になる、という表現が比喻でなかったならば、峰田実の鼻は空を突き抜け大気圏を突破していたことだろう。

そんな峰田実も、緑谷出久と向き合うなり、真面目な顔つきになる。

「負けねえからな……いー」

緑谷出久は、真摯に頷いた。

準決勝までの僅かな時間。僅かなりともすぐには過ぎず、けれども決して長くはない緊迫した時間。

早々に準決勝の作戦を立ててしまい、若干時間を持て余した緑谷出久に、ふと去来したのは轟焦凍との試合での自分の発言だった。

『僕だつてこの「個性」に悩んだ。でも、それでも夢を諦めようとは思わなかった。君は、違うの？ 夢見た「ヒーロー」に、憧れた「ヒーロー」に、なりたくないんじゃないの？ 僕は、僕のこの「個性」で「ヒーロー」を目指すんだ』

——僕のこの「個性」で「ヒーロー」を目指すんだ。

——目指すんだ。

『目指してる』ではなく。

『目指すんだ』。

現在進行形でなく、未来形。言ってしまうえば、自分に言い聞かせるような。

あれだけ人に意見をおきながら、なんて曖昧な言葉だろうか。

(……僕はまだ——)

——『ヒーロー』が何かを、見出せずにいる。

思考から振り払うことはできる。だが、それは目を背けてはいけな  
いものだ。

『ヒーロー』を目指す以上、何になり、何を為すかというのはきちんと  
決めなければならぬ。

出口の無い迷宮のような思考のまま、準決勝は訪れる。

競技場の上まで来て。深くは考えないようにしながらも、つい口に  
してしまう。

「ねえ峰田くん。峰田くんは、どうしてヒーローを目指すの？」

「どうしたんだよ急に。……オイラがヒーローになりたい理由はな—

——モテたいからだよ」

モテたい。

真面目な顔の問いに、真面目な顔の返答。

しかしその答えに、緑谷出久は言葉を失った。

『START!』

試合開始のコールが告げられる。

「だからよ！ 緑谷でも負けない！ いや！ おめえだからこそ、オ  
イラは勝つ!!」

峰田実は熱り立つと、頭の『もぎもぎ』を引きちぎる。彼の頭をよ  
く見れば、微かだが血が滲んでいた。本人にその素振りはないが、限  
界も近いらしい。

言動こそ軽いが、意志も軽そうだが、しかし試合と目的に掛けてい  
る熱意は嘘ではない。

緑谷出久は無言のまま——上着を脱いだ。

『緑谷、脱いだ!! おいおいここは準決勝だぞ!!? 開幕で上半身裸！

峰田といい変質者対決はやめてくれよな!!?』

突発的に脱衣に出た緑谷出久。そのシニールな光景を誤魔化すべ  
くプレゼント・マイクが笑いに転換しようとするが、競技場の二人は

大真面目だった。

「モテたいからだよオオオオオオ!!」

呪詛のように叫びながら、峰田実は飛びかかるようにして、黒い球体を放った。

『もぎもぎ』を緑谷出久は——服で受け止めた。

触れたら張り付く『もぎもぎ』。その手っ取り早い対策は、触れさえしなければいいという単純なもの。

そこから間髪入れずに、『もぎもぎ』を重りにして体操服を峰田実の頭に叩きつける。

するとどうだろう、頭を覆う体操服は、自身の『もぎもぎ』により接着される。

「……オイ緑谷」

たったそれだけで——その厄介な『個性』は完封できるのだった。

『峰田封殺!! そんなのでいいのか!!? 緑谷そのまま峰田を抱え上げ

——場外へ降ろしたあー!!』

数十秒の攻防。緑谷出久は服を脱ぎ、被せたのみで、準決勝は終わりを告げた。

「あんな対処でいいのか」「でも実行できるだけでもすごくない?」「やっぱり緑谷頭回るなちくしょー!」

そんな賞賛の紛れる歓声の中、緑谷出久は競技場を後にする。

「峰田さんに勝ったのだな。おめでとう! 俺もあのくらい割り切った行動が出来ていればな……」

緑谷出久を迎えたのは飯田天哉だった。飯田天哉は悔しそうに言う。

悔しそうながらも、どこか笑みを浮かべた爽やかなものだ。

飯田天哉は、兄に良い報告ができないと冗談めかした。

プロヒーローである兄を目標に、飯田天哉はヒーローを目指しているとも、語っていた。

「……うん。でもこれが準決勝だっていうのもよかった。あのまま峰田くんがやけになって『もぎもぎ』を投げ続けてたらどうしようもな

かったから」

緑谷出久もまた、薄く笑みを浮かべて返す。

この勝利は、ここまでで峰田実が『個性』を消耗させていたからこそでもあった。

上限のある『個性』はそれこそが弱点である。『個性』の活用法だけでなく、余力調整もしていかなければならないのだ。

そんなとき不意に、飯田天哉の携帯が音を立てた。すまない、と飯田天哉は背を向け、携帯を耳に当てた。

そして。

次に飯田天哉が口にしたのは、早退するという旨と――

――兄が敵に襲われたという、悲痛な知らせだった。

飯田天哉の顔から、先ほどまでの明るさは消え去っていた。

\*

「――オイ待てや」

会場内の通路。爆豪勝己は、すれ違い様、素知らぬ顔で通り過ぎていく彼を呼び止めた。

「てめエ……何負けてんだよ」

相手は轟焦凍。

『半冷半熱』という強力な『個性』の持ち主で、この体育祭で一番の壁となると思っていた人物。

その轟焦凍は、第二回戦にしてまさかの敗退を決めた。

敗退したのは別にいい。そこまでの相手だったというだけであり、爆豪勝己が過大評価していただけという話だ。

それはいい。しかし――その相手が緑谷出久というのが問題であつた。

「……？」

「とぼけてんじゃねエよ！　なんであんなクソナードに負けたのかつて聞いてンだよ！！　てめエなら即凍らせて終わりだっただろうが！！　んな舐めプのクソカスに勝って上がってくるクソと戦っても意味

ねえんだよ!!」

激情のまま、轟焦凍の胸ぐらを掴む。

しかし轟焦凍が、平静を崩すことはなかった。

「あんま虚仮にすんのも大概に……」

「あいつは強いぞ」

轟焦凍は、ただ静かに、そう言った。

「……あ?」

「緑谷に炎で戦えと持ちかけたのは俺で、俺に炎を要求したのは緑谷だ。それで納得した上で、俺は負けたんだ。見てただろ? あの炎は強い。俺の『熱』の上位互換の『個性』だ。あいつの『日替わり』は——ランダム性こそあるが、とんでもない『個性』だ」

「……!」

上位互換。轟焦凍にそうとまで言わせる『個性』が、緑谷出久にはある。

その『個性』は、長年身近にいた爆豪勝己にさえ隠されていた『個性』だ。

爆豪勝己は顔を歪める。自分の下に位置づけしていたそのときから、緑谷出久は、そんな『個性』を隠し持っていたのかと——出し惜しんでいたのかと。

「それも『個性』だけじゃねえ。俺が炎を消したあの状況で、緑谷は蒸気を隠れ蓑に俺に近づいた。そして、俺を後退させるほどの打撃を放った。あいつは強い。あの『日替わり』を、活かす戦略を練るための知識を持つてる。実行する身体も、つくってきてる。」

おまえも甘く見てると——負けるぞ?」

賞賛。自分の越えるべき壁が、緑谷出久を賞賛していた。爆豪勝己は絶句するのみで、それ以上責める言葉が出てこなかった。

やるせなく、轟焦凍から手を放す。

「……ところで。緑谷と幼馴染なんだってな。あいつが『個性』に気づいたのはおまえのおかげって言ってたぞ。何をしたんだ?」

「……あア?」

その問いに、鎮まりかけていた気が、高ぶる。

「またそれか!? あのカソナードが! 前にも、俺から貰っただの、俺のおかげだの訳わかんねえことばっかいいやがって!! 周りにも言いふらしてんのか!」

去来するのは、以前緑谷出久が告げた言葉。

『君がいたから、僕は今日、君に挑むことが出来た!! 君のおかげで今僕はここにいます。君のおかげで——努力することが、できたんだ!!』それはつまり、爆豪勝己への反骨精神でのし上がったという宣戦布告だ。爆豪勝己は、そう思っている。

それを周りにまで公言するということは——

(——喧嘩売ってるって、ことだよなア……!?)

高まった気が、沸点に触れる。

「上等だ!! カソナードが……俺が完膚なきまでにブツ潰す!!」

——完膚なきまでの一位を、取る。

爆豪勝己は感情のまま、自らを鼓舞し、燃え上がらせるのだった。

そして、ついに決勝戦が去来する。

『さアいよいよラスト!! 雄英1年の頂点がここで決まる!!』

目の前に現れた緑谷出久をただ睨む。

頂点をかけた舞台に現れた、道端の石ころを、睨む。

しかし緑谷出久は悠長にも、問いかける。

「——ねえかつちゃん。『ヒーロー』って、何かな?」

その顔は、どこか思い詰めた顔で。

いつかの宣戦布告のときのような、こちらへ挑む顔ではなかった。

道ばたの石ころだったときと同じような、覇気のない顔。

それを認識した瞬間、爆豪勝己の感情は爆発する。

「いい加減にしろよカソナード——」

——そんなもん、てめエが勝手に決めろや……!!

戦え。今は戦えよ。勝つつもりねえなら俺の前に立つな。俺と同じところに、立つんじゃないよ……!!」

緑谷出久は、一瞬怖じ気いたような顔をした。そしてすぐに、こちらを見た。

いつかの宣戦布告と、同じ顔だった。

「やっぱり、かつちゃんだ。ありがとう……僕は君に——勝つ！」

『決勝戦!! 緑谷対爆豪!! 今!!』

『START』

爆豪勝己は、迫る。

緑谷出久は、退く。

緑谷出久を目掛けて『爆破』すると、彼は異様なまでに距離をとる。それは轟焦凍との試合のときと同じように。向こうから迫りこまないが、大げさに距離をとる。

まるで、一発でも受ければ終わりというかのよう。

こちらの一挙手一投足に過剰に反応し、異常な回避行動をとる。

それだけこちらを危険視しているのか。そう思えば納得するものだが、爆豪勝己はたまらず激昂する。

「……結局それか!! あのとときと同じ! 逃げ回ってばっか——俺に勝つんじゃねーのかよ!!」

その直後。

応えるように、火が上がる。

「……ッ!」

緑谷出久は、こちらを見ていた。その顔は逃げるものではない。勝つという意志は、確実に宿っていた。

「僕は君に勝つ。手なんか抜いてない。今できること、全部で勝つ!!」  
轟焦凍は、その『個性』を上位互換だと言った。

確かに。今、自然に炎が沸き上がった。

そのとき緑谷出久に、特別な動きはない。ただこちらの攻撃を必死になつて躲すのみだった。

こちらが追えば、緑谷出久は距離を取った。ときどき、反撃するよ  
うに炎を上げる。

緑谷出久に、炎を発する挙動はない。ノーモーション、予備動作な



しの『発火』だ。緑谷出久は、大粒の汗を浮かべて必死に、逃げ回るのみ。

「そう、必死に、逃げ回るのみ。」

時間が経つにつれ、爆豪勝己は疑問を抱く。

緑谷出久は、言った。

「今できること、全部で勝つ!!」

それならば、轟焦凍相手に展開した炎の檻でも出せばいい。

今できること全てをするならば、最大火力の炎を放つべきだ。逃げ回るなど余計なものではないだろう。

考え得るのはこちらのスタミナ切れ狙いか。

それもあるのかもしれない。

しかし——この逃げることにさえ意味があるとすれば。

轟焦凍との試合を思い返す。ほとんど同じスタンスだ。ヒットこそないが、アウェイの連続。それも、麗日お茶子がやったような低姿勢で。

低姿勢。そこで、気づく。

ときどき地面に手を突くほどの、低姿勢。

思い、至る。

「デク……てめエの『個性』——『発火』じゃねえな?」

——緑谷出久は、頷いた。

「……! さすががっちゃん。そうだよ、この炎は僕の『個性』じゃない。この炎は——」

——君の『個性』だ」

「! そう、いうことかよ……!!」

爆豪勝己は緑谷出久から目を離し、明後日の方向に向かって爆破する。

予想が正しければ、緑谷出久の『個性』は、轟焦凍の『熱』の上位互換などではない。

爆豪勝己の思考を裏付けるようにして、地面から火が上がった。

そこはただの地面。何の変哲もない、セメントスの『個性』によってつくられた競技場の一部。

けれども、あえて言うなら。そこは、緑谷出久が通った地面だ。緑谷出久は、挑戦的に口元を笑わせ、

「そう。今日の僕の『個性』は――

――『油汗』だよ」

\*

麗日お茶子は、お金のため。

峰田実は、モテるため。

飯田天哉は、憧れのため。

それらは皆、動機だ。

収益も、名声も、自己実現も、『ヒーロー』になって、その活動の上で何を得るかという答えだ。

だから、緑谷出久は問い方を変えた。

――『ヒーロー』って、何かな？

その問いを、爆豪勝己は一言で切り捨てた。

――そんなもん、てめエが勝手に決めろや………！

そして、今は戦えと。

その通りだった。今は戦うときで。答えは、そのあとに見つければいい。

緑谷出久の悩みを簡単に消し飛ばした爆豪勝己は、緑谷出久の本日の『個性』、その本質までも簡単に暴いた。

『油汗』。

その名の通り、汗が油になる『個性』。

「……思えば予兆はあった。騎馬戦でも――いや、障害物競走だ、あのときも俺の爆速ターボが暴発した。いくらてめエに抜かれたとはいえ、俺がそんなハマするわけねエよなア!？」

言い終わるとともに、爆豪勝己はこちらに向かって爆破する。

緑谷出久は、やはり過剰に避ける。垂れた汗に引火して、火が上がる。

それを上から爆豪勝己が爆破し、爆風で掻き消した。

「タネが割れりやあなんてことねえ。つまりデク、てめエに一撃入れればそれだけで、戦闘不能になるってことだろ……!!」

『油汗』。それは全身に油を纏っているに等しく、相手が火に関係する『個性』であればたった一撃で決定打になってしまふ『個性』である。

この対戦、危険という言葉でも生ぬるい。絶望的に相性が悪く、今にも中止した方がいいというのが実態だ。おそらくは、身体に火がついた時点で教師が介入し試合が終わるだろう。

そんな対戦だ。

爆豪勝己は容赦なく、爆速ターボで終わらせにくる。

そこへ、緑谷出久は、手を大きく振り――

――油を飛ばした。

「!!」

それはにじみ出た汗の量ではなく、『飛ばす』というよりは『噴き出す』といった方がいいだろう。

油に対して爆豪勝己が爆破する。爆風で彼は勢いを殺し。その目の前では大きく火があがる。

「――僕もこの『個性』に気づいたとき、かっちゃんには勝てないと思ったよ。油は燃える。『製紙』のときといい、かっちゃんと戦うときに限って相性の悪い『個性』だ」

言ってしまうえば、この個性ガチャは爆死。

爆死した末に、爆死しかねない『個性』を引くという爆死。

「でも相性が悪いのは――君もだろ?」

「てめ……!!」

手から油が噴き出る。噴くと言っても水鉄砲のそれではなく、腕の振りで飛ばしているのみ。しかしそれを、爆豪勝己は爆速ターボをつかってまで、避ける。

油は燃える。つまり、油がかかるといふことは、爆豪勝己自身も燃えるようになるということなのだ。

(思った通りだ、やろうとすれば、噴き出せる!)

燃える汗。そういう意味では、この『個性』、爆豪勝己と同じ系統と

言えるだろう。向こうは任意で発汗できるのだ、こちらも少しくらい融通が効くと踏んだのだ。——もつとも、任意で爆破できるというあちらの方が上位互換なのは明白だが。

もう一つ、緑谷出久が考慮したのは、二つの違い。

『爆破』は手から二トロのような汗を分泌するのに対し、『油汗』は全身から、ということだった。

全身から液体を分泌できる、そんな『個性』が身近にいたのだ。

芦戸三奈。身体から『酸』を分泌する『個性』。騎馬戦のときに観察したところ、芦戸三奈は手のみに集中して噴き出すという使い方をしていた。

ならば——この『油汗』でも可能なのではないか。

結論は、可能であった。

勢いこそないものの、多少であれば自分の意志で出すことができるところまでは進歩した。

(ただ、粘度を上げたりはできないな。どう変えればいいのか、体感した感じで……わかんない……！)

それは『個性』を成長させた後の話になるのだろう。

一朝一夕どころか、たった数時間の身では、物質の状態すら変えることすらできない。

(芦戸さんに謝らないとかな……成分を変えるなんて、簡単に言っちゃったけど、すぐにはできそうにないぞ……！)

緑谷出久は、口元を緩めた。

こんな戦闘中にも関わらず、『個性』を創意工夫するのは楽しい。

対した爆豪勝己に、笑顔はない。

緑谷出久は燃えやすいが、油を浴びれば爆豪勝己も燃えやすくなるのだ。迂闊な動きはできない。

それから両者は牽制を繰り返し、試合は長引くばかりだった。

時に油を直接掛けようとし、時に油で罫を張った。しかし、爆豪勝己は冷静にも、全て対処していった。

だが、終わりは去来する。

——おおよそ、望まないような形で。

体力の底が見えてきた緑谷出久は、勝負を仕掛けることにする。できる限りの油を、手に集中しておく。

そしてこれまでより大きく踏み込むことで、爆豪勝己の攻撃を誘う。そこへ油をぶつけることで、爆風で爆豪勝己を退場させてしまおうというものだった。

文字通りの自爆を狙おうというのだ。

疲労していた彼が最後に思いついたのは、そんな作戦だった。

(これだ、今僕ができそうなのは、これに賭けるくらい……！)

——誤算があったとすれば、疲労に苛まれていた緑谷出久と違い、爆豪勝己は痺れを切らしていただけということだろう。

爆豪勝己は、常に爆破することで、油を寄せ付けないという戦法を取った。それも空中から、大技を伴って。

だから緑谷出久は、床に油溜まりをつくることで、そこへ爆豪勝己を誘い、自爆させる選択へ変えた。

「——ハウザーインパクト手榴砲着弾!!」

迫り来る爆豪勝己。緑谷出久は、全力で後方へ油を撒き、全力で横へ逃げる。

(そのまま爆風で場外に出てくれれば——)

そこでふと、油溜まりを見て目を疑う。全力で放った油は、思っていたよりもずっと多く、競技場の外まで飛び散っていた。そこへ爆豪勝己の大技がぶつかれば、大炎上すること間違いなかった。

しかしそれは——爆豪勝己本人を呑み込み、そして観客までも危険に晒す規模になる、そんな光景が、目に浮かんだ。

とっさに緑谷出久は引き返し、爆豪勝己と油の間に立ち塞がる。

そこで発するべきは、『止まれ』か、『止めろ』か。

口から出たのは——

「——こ、降参ッ!!」

その瞬間、地面がせり上がり、爆豪勝己と緑谷出久を隔てた。目の前で何があったかを緑谷出久は理解することなく、気づいたときにはオールマイトが爆豪勝己を抱えていた。

そして、軽はずみな行動で、決勝戦を台無しにしてしまったのではという後悔だった。

緑谷出久の降参によって、爆豪勝己の勝利。

こうして、英雄体育祭は幕を閉じた。

表彰台の一位と二位に立つ爆豪勝己と緑谷出久。二人の顔は、決して晴れやかなものではなかった。

\*

「イズクウウウウウウウウ!!!」

帰宅した緑谷出久を、母親は泣きながら抱きついた。

「二位おめでどう……!! お祝いに、今日はファイレ肉よ!」

涙は喜びからくるものだった。

『無個性』だと診断され、ヒーローにはなれないとまで宣告されていた息子が、ヒーロー育成校の体育祭の上位二位に食い込むほどの躍進を遂げたのだ。喜ばないはずがないだろう。

しかし当の本人、緑谷出久は、心から喜ぶことはできなかった。

『個性』を制御できず、暴発させての幕切れ。『個性』の暴走は、これまで何度も危惧していた。しかし今回、それが起こってしまったのだ。場合によっては多くの人を危険に晒していたかもしれない、危険な行為だった。

『個性』の応用に没頭していた緑谷出久には周りが見えていなかったのだ。策士策に溺れるとはこういうことかもしれない。

それに――

(――結局、かつちゃんを裏切ってしまった)

爆豪勝己は戦えと言った。緑谷出久は勝つと言った。

それを中途半端に、投げ出してしまったのだ。

体育祭の終幕には、不完全燃焼感だけが残っていた。あの決勝戦はどこかへ消えてしまったのだと、そう感じて止まなかった。

体育祭後の二日間は振り返り休日となっている。

一日目、緑谷出久の心は心残りが占め、『個性』の研究も体力つくりも手につかなかった。

気晴らしにと、ただひたすらハンドスピナーを回していただけで一日が終わっていた。

そして、二日目。落ち込んだ気を振り払おうとケンタツキーフライドチキンを買ったところで、偶然にも爆豪勝己と出会ってしまった。

「か、かつちゃん……」

「……」

申し訳なさからか、顔を逸らす。向こうはこちらを見たままだった。

「ごめ……」

「なあデク」

振り絞った謝罪の言葉を、爆豪勝己は遮る。そして言うのは、

「戦えや、ここで、今」

「なんで」

思わず問い返す。

「あの日は『個性』の相性が悪かったから、ああなった。だから——今日のてめエの『個性』で、戦え」

「……ダメだよかつちゃん。一昨日のは、相性以前に、僕が『個性』を扱い切れずに、その上周りを鑑みなかったからこそその介入で……」

学校外で、それも私闘なんかには『個性』を使うなんてダメだ……「んなこと……わかってる！ なら俺はどうすりゃいい!? 俺は完膚なきまでの一位にならなきゃ気が済まねえ!! デクより上だと証明できなきゃ意味はねえ!!」

激昂しながら、片手を小さく爆破させる爆豪勝己を見て、緑谷出久は息を呑んだ。

「なんならてめエの都合に合わせる!! てめエが俺と戦える『個性』の日に俺と……」

「わかったよ」

今度は、緑谷出久が爆豪勝己を遮る。そして言うのは、

「なら——今日やろう」

肯定の言葉だった。

人気ひとけのない場所に移動した二人。

「構えろや」

「待って!!」

爆速ターボの構えをとる爆豪勝己に、緑谷出久は制止の声を上げる。

「なんだよ！　ここまで来て——」

「そうじゃない。僕の今日の『個性』、わからないんだ。もしかすれば、『無個性』と変わらないかもしれない」

実際のところ、本日まで緑谷出久は『個性』を発言していないのだった。爆豪勝己は露骨に不機嫌そうな顔をする。

「だから、これからやるのは『個性』禁止の、戦いだ」

「……は？」

「真っ向から、君と戦う。僕は『個性』を使わないし——作戦も立てない。ただこの拳で、

君を殴る」

「……」

爆豪勝己は——笑った。

「上等だ……!」

そうして今日、緑谷出久と爆豪勝己は、正面からぶつかり合い、拳を交える。

体育祭の決勝戦は——ここにあった。



## No. 12 だめだやめとけ非常口

体育祭から二日後。連休明けの教室には、異様にボロボロの生徒が約二名。

クラスメイトに現実として去来する、動揺。

「緑谷ちゃん、その怪我どうしたの？ 爆豪ちゃんも、同じような傷だし……喧嘩かしら？」

「な、なんでもないよ」

緑谷出久と爆豪勝己は顔を所々腫らせ、湿布や絆創膏を貼っている。それはどこからどう見ても体育祭の負った傷ではない。

心配するクラスメイトに対し、緑谷出久が浮かべるのは苦笑い。

「これは……僕たちにとって必要なものだったんだよ。だから心配しないで、蛙吹さん」

「……？ まあそれならいいわ。あと、梅雨ちゃんって呼んでちょうだい」

「あすつ……つ、つ……ツユウチャン」

そんなやり取りを余所に。爆豪勝己が浮かべるのもまた、どこか晴れやかなものであった。

朝一番、担任相澤により始められたのはヒーロー情報学。

『コードネーム』ヒーローネームの考案だった。

学生がプロの世界に触れるにあたり、重要ともなってくる呼び名。名を体を現す、その言葉に則り、自らを売り込むために名乗るものがある。

先日の体育祭によって、ヒーロー科にはプロヒーローから指名が寄せられていた。

この指名を元に、生徒たちは一週間後の職場体験に望むこととなる。ヒーローネームはそこでも使用される重要なものだ。

余談であるが、指名は思いの外バラけたものであり、曰く二位の緑

谷が作戦主体であり、個性を要所でしか使っていないのが影響しているとのことだった。

遅れて登場した評価役のミッドナイトを加え、15分が経過。生徒たちは各々、思いつく名前を発表した。それはさながら大喜利のようで、元気とユーモアのある流れが生まれていた。

明るい未来のある教室だ。

そして緑谷出久、ぱつと浮かんだ第一希望『オールマイト』。

(いやいやいや……こんなのここで言ったらシャレにならないぞ……)

未だに振り切れていない憧れがここで浮き上がる。

頭を振ると、改めて発表用のフリップボードと向き直り、他の生徒のネーミングを思い返す。

切島鋭児郎は『レッドライオット烈怒頼雄斗』。憧れのヒーロー『クリムゾンライオット紅頼雄斗』をリスパクトしたネーミングだった。

麗日お茶子は自分の名前と、個性『ゼログラビティ』を文字った洒落たネーミングだった。

そんな二人を参考にして思いついたのが――

「――『オールダイト』！」

「馬鹿にしてんのか!!」

教室中からツツコミが入る。

「これは憧れの『オールマイト』と『常に死んでいる(All die d)』っていうのを掛け合わせた名前で……」

「尚更ダメだよ!!」

「もうお前なんか『(命)捨ティン』だよ!!」

コントの如く、野次が飛ぶ。その裏では、

「ああ、一回オールマイトみたいなコスチュームだったもんね」「憧れかあ……」「つかなんで常に死んでんのさ」とのコメント。

半笑いで自分の席に戻る。

『オールマイト』にはなれない、そのことを正面から捉えている今こそ、こんな笑い話のネタにできるものだが。

それでもやはり、簡単に捨てきれるものではない。十年以上憧れに

生きてきたのが緑谷出久である。

この体を名前で表すというコードネーム考案は、彼にとってこれからどうなるか、なりたいかというのを見つめ直すいい機会でもあった。

『オールマイト』への憧れ以外に、今の自分にあるもの、今の自分で乗れるものと言えば――

「――『クソナード』」

「マジかお前!!」

「またもや、ツツコミが入る。」

『「頑張れ」って感じのクソナード』。

それはクラスメイトから言われた言葉で。緑谷出久にとって激励ともなる名前でもあった。

しかし、もはやネタ枠と化してしまった緑谷出久の発表。『クソナード』をそのまま言葉どおりに受け取り、ウケを狙ったものと認識される。

「でもさ……案外いいんじゃないか?」

そこへふと、切島鋭児郎が呟く。

「だってよ、『クソ』って『すごい』って意味でも使うだろ? クソカッケーとか、クソ強えとか、クソ学校っぽいとか。」

「それでさ、緑谷ってまんまナード……オタクじゃん? 馬鹿にしてる訳じゃなくてさ、知識があるって意味で。個性オタク。それも、すげえ。すげーオタク、なんかやべーオタク。要は、あり得ないほど個性に詳しいやつ。……ぴったりじゃね?」

「確かに……オタクってそもそも、一分野に固執して詳しいやつのことだし……」

「どんな敵の個性もすぐに分析して対処しちゃうみたいな……イメージどおりじゃん!」

「真に賢しいナード!」

「クソナード!! なんかやべーナード!! いいね!!」

流れが変わる。緑谷出久自身、予想していなかった流れにやや啞然とした後、力強く頷く。

「うん！ 『クソナード』。これが僕のヒーロー名です！」  
「おおお!! 個性分析ヒーロー『クソナード』の誕生だああ!!」

「いや、やめときなさいよ」

ミッドナイトが冷静に言った。人氣が大事なヒーローなんだから、もう少し世間体を気にしろとのことだ。緑谷出久は静かに文字を消した。

さらば、個性分析ヒーロー『クソナード』。

(うーん、僕にぴったりで、それでいて前向きな名前……)

ふと、緑谷出久の目に飯田天哉のボードが映る。飯田天哉はここまです発表ゼロ、しかしボードには文字が書かれており――

『インゲ』

(淫毛……!?! どうしちやっただ……だめだやめとけ飯田くん……)

緑谷出久が浮かべる表情は、真顔。

その名前は、本人が発表するか迷っているであろうもの。盗み見ってしまったことに申し訳なきを感じる。

――この時。もっと強く言葉を掛けるべきだった。僕はこの日のことを、やがて後悔することになる。

「よし、決めた……!」

授業も終了間際。緑谷出久に一つの単語が去来する。

今日を、このときを。今ある全てを生み出した、発端のワード。

――そんなヒーローに就きてんなら効率いい方法があるぜ。来世は個性が宿ると信じて――

『ワンチャンダイブマン』。これが僕のヒーロー名です」

緑谷がまた変なこと言い出した、そんな風に沸く教室に対して――

――ただ一人、爆豪勝己だけは。言葉にしようのない、複雑な表情で彼を見ていた。

\*

一方、職員室では。

「おいおい、なんでこんなところから指名が来てるんだよ……!」

1—Aに所属する、とある生徒への指名に動揺が巻き起こっていた。

「なんでこんなところから……」

「あ、相澤はこのことを知ってるのか?」

「ええ……でも、おかしくはないって」

困惑。その指名先に対しての、疑念。

「おかしくないって……コネか?」

「かもしれない。コスチューム絡みで関わりがあると聞いた。でもこれは……あまりにも……」

「だが実際指名が来ているんだ……事実として、受け入れるしかない」  
その生徒の名は緑谷出久。雄英体育祭において二位となった生徒で、指名数は他に比べて多い。

指名先に紛れた、一つだけ、異質な名前。

雄英高校ヒーロー科としては異例の、初の指名。

——『ケンタッキーフライドチキン』。

「なんで飲食店から指名が来てるんだ……」

\*

火災によって、建物は限界を迎えていた。

消化が間に合わず、ヒーローによる救助だけが最後の頼りとなっていたのだが、取り残された最後の一人は絶望的な状況にあったと言っていただろう。

四方を炎に囲まれ、壁も、床も、天井も、いつ崩れるかというところ。

「タケシ!!」

取り残されたされた者を呼ぶ、悲痛な声。

誰もが諦めの文字をちらつかせていたその状況で、唯一。一人の少年は、飛び込んだ。

ヒーローは制止の声を掛けた。だが少年——ヒーローですらない学生の彼は、ただ駆けた。

少年の姿が建物に消える。それを飲み込むようにして入り口は崩れ、外と絶たれてしまう。

焦り惑う周囲の面々。

この状況にあつたヒーローを呼べと、救助に駆けつけた者が更なる救助を求める。

そうしている内に建物の倒壊は進み——中心の柱がやられたのか、無慈悲にも全域が瓦礫と化した。

直後——瓦礫を突き上げるようにして、内側から鋭利な何か飛び出した。

瓦礫が押しつけられた中心には、二つの人影。一人は弱った様で、伏したまま。この火災に取り残されていた者。

そしてもう一人は、それを救助する者。先ほど、無謀にも建物に入した少年だった。

少年もまた、横たわっていた。取り残されていた者と同じ。右肩を下に、地に体を着けている。ただ、容姿的に違いがあつたとすれば——

——少年の肩が数メートルほど鋭利に突き出ていたことだった。

個性『肩パッド』とでも称そうか。少年の肩は世紀末を遙かに越えた突き出し具合を見せていたのだ！

両肩の骨を、突き出すことのできる『個性』。少年は横になり、全力で発動させることで、上方への力に変えたのだった。

保護——完了！

こうして、絶望的な状況は一人の少年によって打破された。

その少年が職場体験途中の学生であつたことは後にも語られることとなる。

保護の際に少年が発した第一声、

『あの……もう片方の肩が地面に刺さっていて抜けないんですけど、

助けて貰っていいですか……?』  
と共に。

少年の名前は、緑谷出久と言った。

\*

職場体験の二日目が終わった。

街外れにて、緑谷出久はほっと一息つく。

パトロール中に火災現場に行くわした緑谷出久は、自分の個性『ワ  
ンチャンドライブ』だからこそ出来る一手を打った。

一回きりの保険と、そこから発現する個性に賭けるといふ文字通り  
のワンチャンドライブだ。

緊迫した状況での無茶である。ずっと肩に力が入ったままだった  
のだ。一日の体験が終わり、ようやく肩の力を抜くことができる。

肩パッドをせり出すのに込めていた力も含めて。強弱コントロー  
ルはできないが、オンオフくらいは点けられるようになったところ  
だ。

(でも、体感で感じられる個性なら、ベタ踏みならできる……)

以前から感じていたが、ここで確信に変わる。

自信が去来したところで、思考を転換。

「えっと……次——明日行く事務所は……」

次。明日。その言葉の意味と言えば、緑谷出久は、次の日には別の  
ヒーロー事務所へ去来することになっているのだった。

体育祭二位の緑谷出久には多くの指名があり、その中から体験先を  
選ぶ必要があった。

しかし、ただいま絶賛壁にぶち当たり中の緑谷出久には目指すイ  
メージが希薄だ。一つに絞り込むには材料が少ない。そこで彼が選  
んだ複数の職場を体験することだった。

これもまた、異例の選択。

個性『日替わり』を活かすために色々な個性を見たい。

自分の進む方向を見つけない。

その二つを理由に申し出た結果、超短期間の体験で受け入れてくれ

る先で予定を組んでもらえることになったのだ。

一週間の職場体験の間に、緑谷出久は東京都内で五つの職場を去来することとなっている。

——最後に控えているのがケンタッキーフライドチキン（二日間）であるのは余談か。

理想的な条件で異例の形を了承した学校にも、体験先にも感謝しなければならぬ。

必ず収穫を得るためにも、『ワンチャンダイブ』だからできる無茶もした。行く先々のヒーローには、必ずヒーローの志望動機を尋ねた。しかし、答えはまだ、明確化しなかった。

オールマイトではない、緑谷出久だからこそなれる『ヒーロー』は、まだ。

——このときまでは。

帰り道。慣れない土地のゆえ迷い込んだ、人気のない路地にて。

「——『英雄』とは何だ？」

誰かが、聞いた。

「!？」

逆光でその姿は見えなかった。辺りが暗いせいもあるだろうが、その声は不気味に感じられた。

「昼間の一件、見させて貰った。自らを顧みず、救助に走った姿。中々……良い」

声から判断できるのは、その主が男であるということ。

男は緑谷出久を讃え、そして最初の問いを繰り返す。

「おまえにとって、『英雄』とは何だ？」

そこでまず、男が誰かを問い返してもよかっただろう。

だが、緑谷出久にとって興味深いものであった。

ヒーローとは、何か。

たった今、彼がぶち当たっている壁そのものであった。

だから、思わず、答えてしまう。思っていたことを、そのまま。

「わから……ないんです。憧れてるヒーローがいたんですけど、僕の



『個性』じゃその人にはなれなくて……」

「ハア……論外だ」

男は冷たい声で言った。一瞬、おぞましい殺気を伴って――

――しかし次に、男は笑った気がした。殺気は、消え失せていた。

「だが――『無』ならば、まだ、いいだろう。」

……ヒーローとは、何かを成し遂げた者にのみ許される『称号』！  
自らを省みずに他を救い出す者。己の為に力を振るわない者。

『ヒーロー』とは元来、そうあるべきものだ。英雄気取りの拝金主義者のことを指すものじゃない」

成し遂げた者。そこで緑谷出久が挙げるのは、オールマイト。

彼のデビュー鮮烈なもので、大災害に現れて多くの人々を救ったというものだ。それは逸話であり、語り継がれるもの。間違いなく、成し遂げた者だ。

加えて、それは自らを顧みずに他を救うことにも当てはまる。

「オールマイト、みたいにですか？」

「！……そうだ。オールマイトこそ、本物の『英雄』だ」

やはり、オールマイト。

結局、『ヒーロー』という言葉に結びつくのはオールマイトだった。

(でも僕は、オールマイトには――)

――なれない。

そう、言おうとして――留まる。そして、去来する。

(いや違う、そうじゃない！)

『ヒーロー』とは何か、その問いは以前、自らにも問いかけた。その答えが『オールマイト』。

しかし、男が示した答えはそう、『成し遂げた者』。

『自らを省みずに他を救い出す者』であり、『己の為に力を振るわない者』である。決してそれは『オールマイト』だけの話ではない。

明朗快活な『個性』こそがオールマイトの印象だろう。派手に敵を打ち倒す様に人は惹かれるのだろう。豪快に人を救う光景に人は憧れるのだろう。

だが、真髄はそこじゃない。

『オールマイト』がどう在ったかじゃなく、何を成し遂げたか。パズルの最後のピースがはまったような、迷路を抜けたような、知恵の輪が解けたような、そんな感覚。

(単純なことだった……！)

それは、ウソの災害や事故ルームで既に学んでいたこと。13号から教えられていたこと。

人気よりも、世間体よりも。名声より、金より優先すべき、本当のヒーローの目的。

敵を倒すことでもない、それは――

「――人を救うことが、ヒーローの本来の目的……！」

「正解だ」

男は笑っていた。予感でも気がしたでもなく、笑っていた。

「何かを成し遂げるにも、信念……想いが要る。あのとき、あの状況で飛び込んだおまえが、このことを抱き続けるなら――

――おまえは『本物の英雄』になれる」

「……！」

それはいつだったか、求めていた言葉と同じもの。

男の言うヒーローの条件、『自らを省みずに他を救い出す』というのは、『ワンチャンダイブ』だからこそできることでもあった。

緑谷出久だからなれる、『ヒーロー』。

「まだ、名前を聞いていなかった。おまえの名は……？」

「みど……」

本名を答えようとして、留まる。今名乗るべきは、そっちじゃない。

「『ワンチャンダイブマン』……です！」

「ワンチャンダイブマン……そうか。ハア……飛び込む者――

――どんな絶望的な状況だろうとも、一縷の希望あると信じ、飛び込む者……か。良い名だ……！」

そして男は満足したように、場を去ろうとする。

「待って……！ あなたは……あなたは一体――」

男は背を向け、遠ざかる。

この問いには答えない。そんな意志が、どことなく感じられた。

「せめて！ 名前だけでも！」  
足を止め、男は僅かに考えるようにして。

「俺の名は——赤黒血染」